

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

上境旭台貝塚

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

平成 21 年 3 月

独立行政法人 都市再生機構茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

か み さ かい あ さ ひ だ い
上 境 旭 台 貝 塚

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

平成 21 年 3 月

独立行政法人 都市再生機構茨城地域支社
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、つくば市を日本における科学技術の研究開発の中核として、さらに国際交流の拠点としてふさわしい街づくりを進めています。この新しい街づくりの一環として、つくば市と独立行政法人都市再生機構茨城地域支社は、市と首都圏を直結する「つくばエクスプレス」の整備と同時に、その沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を計画的に推進しています。

しかしながら、この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である上境旭台貝塚が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が独立行政法人都市再生機構から同貝塚の埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成19年4月から平成20年1月にかけてこれを実施しました。また、平成8年度から平成18年度にかけては、同社から開発区域内における埋蔵文化財発掘事業の委託を受け、中根中谷津遺跡、東岡中原遺跡、金田西遺跡、金田西坪B遺跡、九重東岡廃寺、上野陣場遺跡、上野古屋敷遺跡の調査を実施し、その成果は、当財団の『文化財調査報告』第139・155・159・170・182・195・209・251・285・307集として既に刊行したところです。

本書は、第307集に続き、平成19年度における上境旭台貝塚の調査成果を収録したものです。学術的な研究資料としてはもちろんのこと、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者であります独立行政法人都市再生機構茨城地域支社から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 稲葉 節生

例 言

1 本書は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成19年4月から平成20年1月まで発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字栄439番地の1ほかに所在する^{かみろけいほみだい}上境旭台貝塚の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調 査 平成19年4月2日～5月31日 9月3日～10月18日 平成19年11月28日～平成20年1月31日
整 理 平成20年2月1日～6月30日

3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長	三谷 正	平成19年4月2日～平成20年1月31日
首席調査員	白田正子	平成19年4月2日～5月31日
主任調査員	柴山正広	平成20年1月1日～1月31日
主任調査員	田原康司	平成19年4月2日～5月31日
主任調査員	照山大作	平成19年4月2日～10月18日 平成20年1月1日～1月31日
主任調査員	小野政美	平成20年1月1日～1月31日
主任調査員	小室弘毅	平成19年4月2日～4月30日
主任調査員	小川貴行	平成19年10月1日～平成20年1月31日
主任調査員	齋藤和浩	平成19年4月2日～5月31日
副主任調査員	櫻井完介	平成19年4月2日～5月31日 9月3日～9月30日 平成19年11月28日～12月31日
調 査 員	越川欣和	平成19年4月2日～平成20年1月31日
調 査 員	中村博子	平成20年1月1日～1月31日
調 査 員	作山智彦	平成20年1月1日～1月31日
調 査 員	川井伸也	平成19年4月2日～5月31日

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、以下の者が担当した。

主任調査員	柴山正広	第5章第2節2
主任調査員	小野政美	例言・凡例・抄録，第1章，第3章第1・2節
主任調査員	小川貴行	第2章，第5章第2節1
調 査 員	越川欣和	第3章第3節，第4章，第5章第1節，第6章
主任調査員	須賀川正一	第5章第3・4節

5 貝，獣骨，魚骨の同定については国立歴史民俗博物館考古研究部教授の西本豊弘氏に依頼し，考察は付章として巻末に掲載した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、 $X = +12,160\text{m}$ 、 $Y = +26,280\text{m}$ の交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C..., 西から東へ1, 2, 3...とし、「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c...j, 西から東へ1, 2, 3...0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SK-土坑 SD-溝跡 SE-井戸跡 TP-陥し穴 PG-ピット群 P-ピット
遺物 P-土器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 B-骨角器 S-貝製品
土層 K-攪乱




3 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

4 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は300分の1、遺構実測図は原則として60分の1で掲載した。遺構全体図において、調査が完了した遺構については実線で示し、確認調査だけをおこなった遺構については実線のトーンを落として表現した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土・赤彩		炉・火床面・繊維土器断面		
	貝層・粘土範囲・炭化物範囲				
●	土器	○	土製品	□	石器・石製品

5 遺物観察表及び遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

(1) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m, cm, gで示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。

(2) 備考欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、土製品、石製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 竪穴住居跡の「主軸」は炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N-10°-E）。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 基本層序	8
第3節 縄文土器の分類	10
第4章 A区の調査	11
第1節 調査の概要	11
第2節 調査区の状況と遺物	11
1 トレンチの状況	11
2 遺物	15
第3節 A区貝塚の様相	30
第5章 B・C・D区の調査	31
第1節 B区の調査と遺物	31
1 トレンチの状況	31
2 遺物	41
第2節 C区の遺構と遺物	50
1 縄文時代の遺構と遺物	50
(1) 竪穴住居跡	50
(2) 陥し穴	57
(3) 土坑	58
(4) 遺構外出土遺物	76
2 その他の遺構と遺物	80
(1) 焼土遺構	80
(2) 井戸跡	81
(3) 溝跡	81
(4) 土坑	82
(5) ピット群	87
第3節 D区の調査と遺物	88
1 遺構の確認状況	88
2 遺物	88
第4節 特殊遺物	90
第6章 まとめ	97
付 章 旭台貝塚の動物遺体	101
写真図版	
抄録	
付図	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

つくば市は、世界に開かれた国際交流の中心、世界の科学技術をリードする研究開発の拠点として、21世紀の新しい街づくりを進めている。その一環として取り組んでいるのが、西暦2005年8月開業の「つくばエクスプレス」の建設とそれに伴う沿線の開発である。中根・金田台地区については、住宅・都市整備公団つくば開発局（平成9年10月から住宅・都市整備公団茨城地域支社に、平成11年10月から都市基盤整備公団茨城地域支社に、平成16年7月から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社に名称を変更）を事業主体として、土地区画整理事業を進めている。

平成6年11月18日、住宅・都市整備公団つくば開発局長から茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成7年度に現地踏査を行い、上境旭台貝塚については平成12年1月18・19日、平成19年3月1・2日に試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成12年2月15日、及び平成19年3月23日に茨城県教育委員会教育長から独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、事業地内に上境旭台貝塚が所在すること及びその取り扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成19年1月11日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘についての通知が提出された。茨城県教育委員会教育長は、計画変更による現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、平成19年1月31日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年2月23日、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から、茨城県教育委員会教育長あてに、中根・金田台特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書が提出された。平成19年2月27日、茨城県教育委員会教育長は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長あてに、上境旭台貝塚について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、独立行政法人都市再生機構茨城地域支社長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年4月2日から平成20年1月31日まで上境旭台貝塚の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

上境旭台貝塚の調査は、平成19年4月2日から5月31日まで、平成19年9月3日から10月18日まで、平成19年11月28日から平成20年1月31日までの合計約6か月間にわたって実施した。

なお、発掘調査事業の委託期間中の6月に、中根・金田台特定土地区画整理事業における開発計画の変更がなされたため、A区の調査については、調査範囲と方法を限定して行った。

以下、その概要を表で記載する。

工程		期間													
		平成19年4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	平成20年1月	2月	3月		
調査表遺	準備確認	■						■							
遺構	調査	■	■	■				■	■			■			
遺物写真	洗浄整理	■	■	■				■	■		■				
補足撤	調査収											■			

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

上境旭台貝塚は、茨城県つくば市大字栄439番地の1ほかに所在している。昭和62年11月の4町村合併（桜村、谷田部町、大穂町、豊里町）によるつくば市誕生（その後昭和63年1月に筑波町、平成14年11月に茎崎町が編入）までは、新治郡桜村に属していた。

つくば市は、茨城県の南西部に位置しており、市の東方約5kmに霞ヶ浦がある。市域の多くは標高25～26mのほぼ平坦な台地上にあり、この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれている。台地の両端には、桜川、小貝川が流れ、標高約5mほどの沖積低地を形成している。両河川にはさまれた台地は、花室川、蓮沼川、東谷田川、西谷田川などの中小河川にも樹枝状に開折され、市の北東部は筑波山を中心とした筑波山塊に接している。

筑波・稲敷台地は、千葉県北部から茨城県南部に広がる常総台地の一部であり、地質的には、新生代第四紀洪積世に形成された地層が堆積している。下層は成田層及び竜ヶ崎層と呼ばれる砂層・砂礫層が主体をなし、その上に常総粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、さらに関東ローム層、腐植土層が連続して堆積している¹⁾。

当貝塚は、つくば市の東部に位置し、桜川右岸の低地から入り込む谷津に面する標高24～27mの台地上に立地している。谷津は調査区の東側にあり、道路によって遮断されたため、現在はため池となっている。調査区の北側は桜川低地に向かって、南側では谷頭近くでその小支谷に向かって、ゆるやかに傾斜している。その台地縁辺部から斜面部にかけて貝の散布が確認されている。谷津を挟んだ東約200mの対岸には、平成8・9年度に発掘を実施した中根中谷津遺跡が所在している。

縄文時代前期には、海進によって霞ヶ浦は内湾を形成しており、桜川流域にも海水が入りこんでいたと考えられる。その後の海退によって汀線は変化するが、当貝塚が形成された後・晩期には、桜川下流域にも海水の入り混じる汽水域が広がっていたと想定される。

当貝塚とその周辺の土地利用の現状は、台地上の縁辺部の一部が雑木林・杉林のほか、主として畑地として利用されている。桜川によって形成された沖積低地は、主に水田として利用されている。

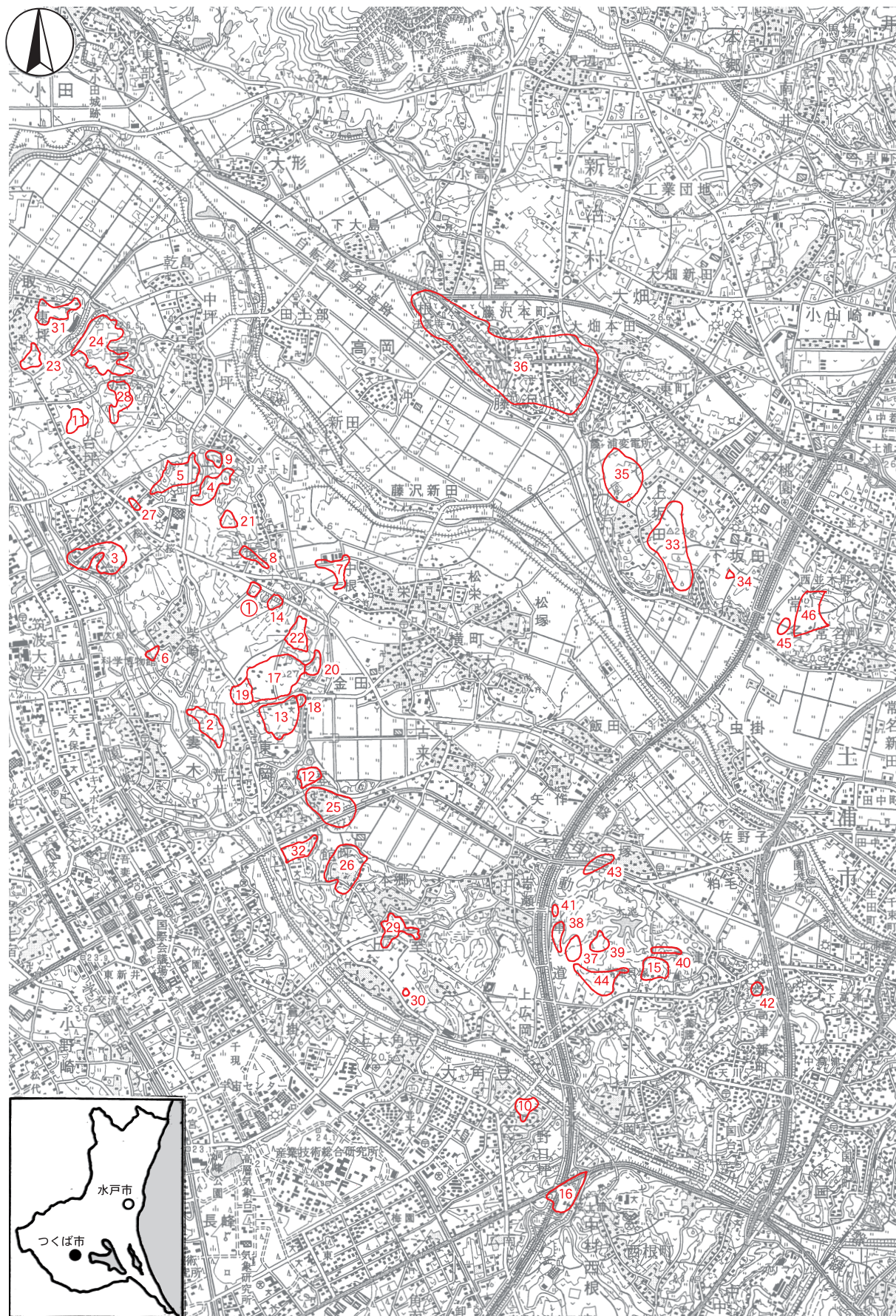
当貝塚の調査前の現況は宅地・畑地・山林であった。

第2節 歴史的環境

桜川と花室川に挟まれた台地上には、数多くの遺跡が点在している。その中で上境旭台貝塚は、縄文時代後期から晩期にかけての遺跡で、ヤマトシジミを主体とする汽水系の貝塚である。ここでは、縄文時代の遺跡を中心に、周辺の遺跡について概観する。

^{ひがしおこなかはら}東岡中原遺跡〈2〉では、荒屋型彫刻刀形石器を含む細石刃石器群が確認されている。当該地では、すでに旧石器の時代から、人々が生活を営んでいたことがうかがえる²⁾。

縄文時代になり、遺跡の数は飛躍的に増加する。縄文時代の遺構が確認されたり、土器が表面採集できた遺跡として、^{しばさき}柴崎遺跡（早・前期、後期）〈3〉、^{うえのふるやしき}上野古屋敷遺跡（前・中期）〈4〉、^{うえのじんば}上野陣場遺跡（前期～後期）〈5〉、^{しばさきのみ}柴崎南遺跡（中期）〈6〉、^{なかねぶはねき}中根不葉拔遺跡（中期）〈7〉、^{かみさいたきのだい}上境滝ノ臺遺跡（中期）〈8〉、^{うえのてんじん}上野天神遺跡（中期）〈9〉、^{ささげ}大角豆遺跡（中期）〈10〉、^{くりはらさいじゅうろう}栗原才十郎遺跡（中期）〈11〉、^{はなむろ}花室遺跡（中期～後期）〈12〉、



第 1 図 上境旭台貝塚周辺遺跡位置図(国土地理院 5 万分の 1「土浦」)

表1 上境旭台貝塚周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代								
		旧石器	縄文	主な時期	弥生	古墳	奈・平	中世			近世	旧石器	縄文	主な時期	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
①	上境旭台貝塚	○		後期～晩期		○			24	栗原中台遺跡	○		—	○	○	○	○		
2	東岡中原遺跡	○	○	前・中期			○	○	○	25	花室城跡	○		—	○	○	○	○	○
3	柴崎遺跡	○		早期～前期・後期		○	○	○		26	上ノ室城跡	○		—			○	○	○
4	上野古屋敷遺跡	○		前期～中期		○	○	○	○	27	上野中塚遺跡	○		—			○		
5	上野陣場遺跡	○		前期～後期		○	○	○		28	栗原五竜遺跡	○		—		○	○	○	○
6	柴崎南遺跡	○		中期		○	○	○	○	29	上ノ室野中遺跡	○		—		○	○		
7	中根不葉抜遺跡	○		中期			○	○		30	上ノ室中畑遺跡	○		—				○	○
8	上境滝ノ臺遺跡	○		中期	○					31	玉取遺跡	○		—	○	○	○		○
9	上野天神遺跡	○		中期						32	花室儀量台遺跡	○		—		○	○	○	○
10	大角豆遺跡	○		中期		○				33	中台貝塚	○		中期～後期					
11	栗原才十郎遺跡	○		中期						34	馬場先貝塚	○		中期～後期		○			
12	花室遺跡	○		中期～後期			○			35	原の門遺跡	○		中期			○		
13	金田西坪B遺跡	○		中期～後期		○	○			36	岡の宮遺跡	○		—		○	○		
14	中根中谷津遺跡	○	○	後期～晩期			○			37	糶屋久保C遺跡	○		前期	○	○			
15	上高津貝塚	○		中期～晩期		○	○			38	糶屋久保B遺跡	○		—		○			
16	下広岡遺跡	○		中期		○				39	グミヌキ遺跡	○		—	○	○			
17	金田西遺跡	○		中期		○	○			40	蛭田遺跡	○		前期～中期	○	○			
18	金田西坪A遺跡	○		中期～後期			○			41	馬場先遺跡	○		—		○		○	
19	九重東岡廃寺						○	○	○	42	寄居遺跡	○		前期		○	○	○	
20	金田城跡							○		43	穴塚遺跡	○		前期～後期	○				
21	上境作ノ内遺跡	○		—	○	○				44	栗崎遺跡	○		中期		○			
22	横町庚申塚遺跡					○	○	○		45	羽黒後遺跡	○		前期～中期					
23	玉取向山遺跡					○	○		○	○	46	北西原遺跡	○	○	中期～後期		○		

※縄文時代の「主な時期」は遺構が確認されている時期である。細分できないものは縄文全般とし「—」で示した。

金田西坪B遺跡（中期～後期）〈13〉、中根中谷津遺跡（後期～晩期）〈14〉などがあげられる³⁾。下流域には、国指定史跡の上高津貝塚（15）があり、後期から晩期にかけて形成された大規模な貝塚として知られている。貝塚は4地点からなり、いずれの地点の貝層もヤマトシジミが主体である。捕獲魚類もズキ・クロダイなどの汽水域に生息する魚が中心であるが、注目すべきは、鹹水種のマダイが成魚に限って捕獲されている点である。平成2年度のA地点貝塚の調査でも、水洗選別で小型のマダイは全く確認できず、これらの資料から、他の集落との交流が想定されている⁴⁾。

当財団が調査した下広岡遺跡〈16〉は、堅穴住居跡86軒が確認された中期の集落跡である。また袋状土坑も多く検出され、この中からパン状炭化物や木の実の炭化物が出土しており、当時の食文化を知る上で貴重な資料となっている⁵⁾。近年の調査では、上野陣場遺跡で前期から中期にかけての堅穴住居跡8軒、上野古屋敷遺跡でも同時期の堅穴住居跡8軒が確認されている⁶⁾。本跡と谷津をはさんで対岸には、中根中谷津遺跡が位置し、後期から晩期の堅穴住居跡10軒、土坑115基、地点貝塚4か所が確認され、堅穴住居跡は堀之内式期が中心である。出土した縄文土器の大半は堀之内1式土器であり、一部に北陸地方や東北地方の影響をうけた土器も出土している⁷⁾。

当貝塚の紹介は、中村盛吉、藤田清の両氏が最初である。それ以後は、地元の桜村立栄小学校郷土クラブ、桜村教育委員会による調査が行われ、平成12年度の常磐新線沿線開発の区画整理事業による試掘調査では、堅穴住居跡1軒、土坑5基、溝3条、遺物包含層4か所、地点貝塚4か所が確認されている⁸⁾。

縄文時代以降、上野陣場遺跡では10世紀後半まで、隣接する上野古屋敷遺跡でも16世紀代まで、断続的ながら集落跡が確認されており、当該地では人々の営みが続いていたことがうかがえる。なお、奈良・平安時代において、北の筑波郡との境にあたる河内郡荊田郷に属しており、国指定史跡である金田西遺跡〈17〉、金田西坪A遺跡〈18〉、金田西坪B遺跡、九重東岡廃寺〈19〉など、河内郡衙跡と関連建物群と推定されている⁹⁾。また東岡中原遺跡、柴崎遺跡、上野陣場遺跡などもほぼ同時期の集落として周辺に位置し、河内郡衙との関連が考えられている。当該地は、鎌倉時代から戦国時代にかけて小田氏の支配下となり、台地上には金田城跡〈20〉など小田氏関連の中小城館が築かれたが、小田氏の衰退に伴い支配下の土豪層の多くが帰農し、集落の廃絶と移動があったと考えられている¹⁰⁾。

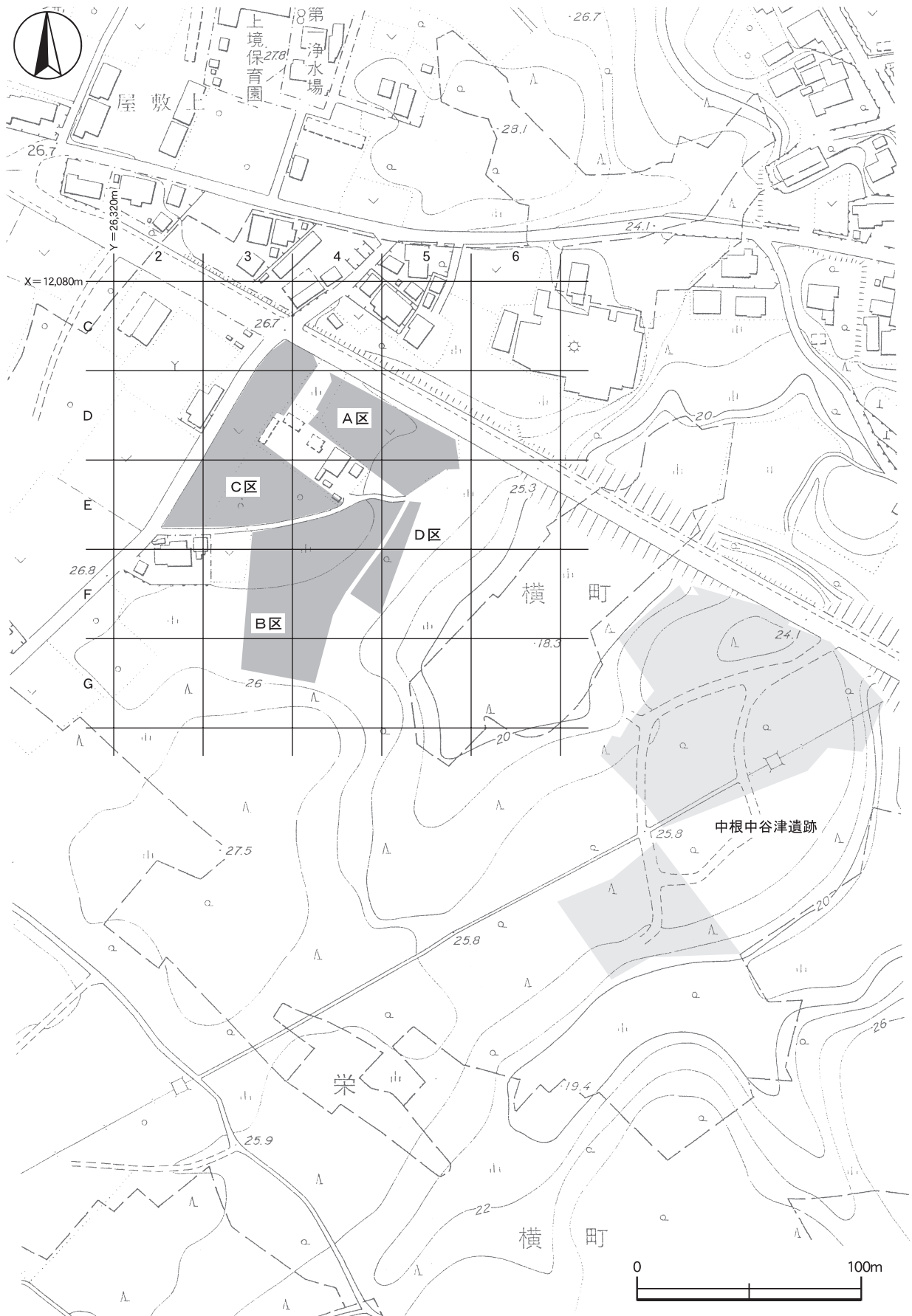
※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

- 1) 大山年次監修『茨城県 地学のガイド』コロナ社 1977年8月
- 2) a 成島一也『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 中原遺跡1』『茨城県教育財団文化財調査報告』第155集 2000年3月
b 成島一也・宮田和男『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 中原遺跡2』『茨城県教育財団文化財調査報告』第159集 2000年3月
c 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏『中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 中原遺跡3』『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
d 駒澤悦郎『東岡中原遺跡4 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』『茨城県教育財団文化財調査報告』第251集 2005年3月
- 3) 茨城県つくば市教育委員会『つくば市遺跡分布調査報告書一谷田部地区・桜地区』2001年3月
- 4) a 佐藤孝雄・大内千年編『国指定史跡上高津貝塚A地点一史跡整備事業に伴う発掘調査報告書一』土浦市教育委員会 1994年3月
b 塩谷修編『国指定史跡上高津貝塚E地点一史跡整備事業に伴う発掘調査報告書一』土浦市教育委員会 2000年3月
c 石川功・福田礼子編『国指定史跡上高津貝塚C地点一史跡整備事業に伴う発掘調査報告書一』2006年3月
- 5) 高根信和・加藤雅美・小川邦男「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅹ』1981年3月
- 6) a 川上直登・長谷川聡・大塚雅昭「上野陣場遺跡 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第182集 2002年3月
b 三谷正・大塚雅昭・桑村裕「上野古屋敷遺跡1 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第285集 2007年3月
- 7) 川村満博（仮称）中根・金田台地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 中谷津遺跡Ⅰ』『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年9月
- 8) a 桜村史編さん委員会『桜村史 上巻』桜村教育委員会 1982年3月
b 註3)に同じ
- 9) 白田正子「金田西遺跡 金田西坪B遺跡 九重東岡廃寺 中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第209集 2003年3月
- 10) 註6 b)に同じ

参考文献

- ・茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月
- ・川西宏幸ほか『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書』霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室 2001年3月
- ・茨城県史編さん第一部『茨城県資料一考古資料編 先土器・縄文時代』1979年3月



第2図 上境旭台貝塚グリッド設定図(独立行政法人都市再生機構茨城地域支社 中根・金田台地現況調整土地図2500分の1)

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

上境旭台貝塚は、桜川右岸の低地から入り込む谷津の北岸で、標高24～27mの台地上に立地している。当遺跡の範囲は南北150m、東西200mであり、調査面積は7,800㎡である。調査前の現況は畑地、山林、宅地であり、地表面の観察により調査区内の台地縁辺に沿って3か所に貝殻の散布が認められていた。

当遺跡は、今回の調査の過程で便宜上A～D区に分けている。これは、道路等の状況と調査順に従って呼称したものである。それぞれの区の調査面積は、A区が1,777㎡、B・C・D区が6,023㎡である。なお平成19年度において調査が終了した地区は、A区とC区の一部で、面積は2,878㎡である。B・D区とC区の一部には、未調査部分が残る。

A区については、茨城県教育委員会が平成11・18年度に試掘調査を実施した部分に、第1～3号トレンチを設定し、土層堆積状況の観察と遺構分布状況の把握を行った。その調査過程で、貝塚1か所、竪穴住居跡2軒を確認したが、事業地内における開発計画の変更が行われたため、遺構の掘り込みは実施していない。遺構の詳細については不明であり、出土遺物も遺構確認時に一括で取り上げているため、土器については時期・部位等に従って分類を行い、実測図と解説を掲載する。

B・C・D区については表土除去の後、遺構確認作業及びトレンチを設定しての調査を行い、B・C・D区全体で、竪穴住居跡13軒、地点貝塚33か所（住居内地点貝塚、貝集中地点を含む）、土坑774基、溝跡4条、焼土遺構1か所、ピット群3か所が確認されている。そのうち調査が終了しているのは、C区の一部だけで、竪穴住居跡3軒（縄文時代）、陥し穴1基、土坑93基（縄文時代15基、時期不明78基）、井戸跡1基、溝跡3条、焼土遺構1か所、ピット群2か所である。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に105箱出土している。主な遺物は縄文土器（深鉢・浅鉢・注口土器・台付鉢・皿形土器・異形台付土器・ミニチュア土器）、土製品（土偶・耳飾り・土版・土製円盤・海獣形土製品）、石器（石鏃・石錘・磨製石斧・打製石斧・石匙・敲石・凹石・磨石）、石製品（石棒・石剣）、骨角器（ヤス）、貝製品（貝輪）などである。

第2節 基本層序

C区は台地上、B区は台地縁辺から谷部にかけての調査であり、比高差が2m程あるため、C区西部のD3j8区にテストピット1、B区東部のF4g5区にテストピット2を設定し、基本土層（第3図）の観察を行った。テストピット1の地表面の標高は27.0mで、表土から深さ2.8mまで掘り下げた。テストピット2は、標高の低い谷部に設定しており、地表面の標高は25.0mで表土から深さ1.9mまで掘り下げた。テストピット2では、テストピット1で確認された第4～12層は認められず、耕作土を除去するとすぐに第14層以下の常総粘土層が確認されている。

土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから19層に細分される。観察結果は、以下の通りである。

第1層は、耕作土層で、黒褐色で粘性・締まりともに弱く、層厚は23～40cmである。

第2層は、黒色でロームブロックを中量含み、粘性・締まりは普通で、層厚は10～32cmである。

第3層は黒褐色を呈するソフトローム層への漸移層で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含み、層厚は7～24cmである。

第4層は褐色を呈するソフトローム層で、粘性・締まりは普通で、層厚は18～42cmである。

第5層は暗褐色を呈するハードローム層で、黒色粒子を微量含んでおり第2黒色帯と考えられる。締まりが強く、層厚は15～35cmである。

第6層は褐色を呈するハードローム層で、締まりが強く、層厚は10～16cmである。

第7層は褐色を呈するハードローム層で、粘性・締まりは普通で、層厚は15～40cmである。

第8層は褐色を呈し、上層に細礫を含むハードローム層で、締まりは強い。層厚は16～40cmである。

第9層は褐色を呈する粘土層への漸移層で、粘性・締まりともに強く、層厚は10～25cmである。

第10層は褐色を呈する粘土層への漸移層で、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は20～32cmである。

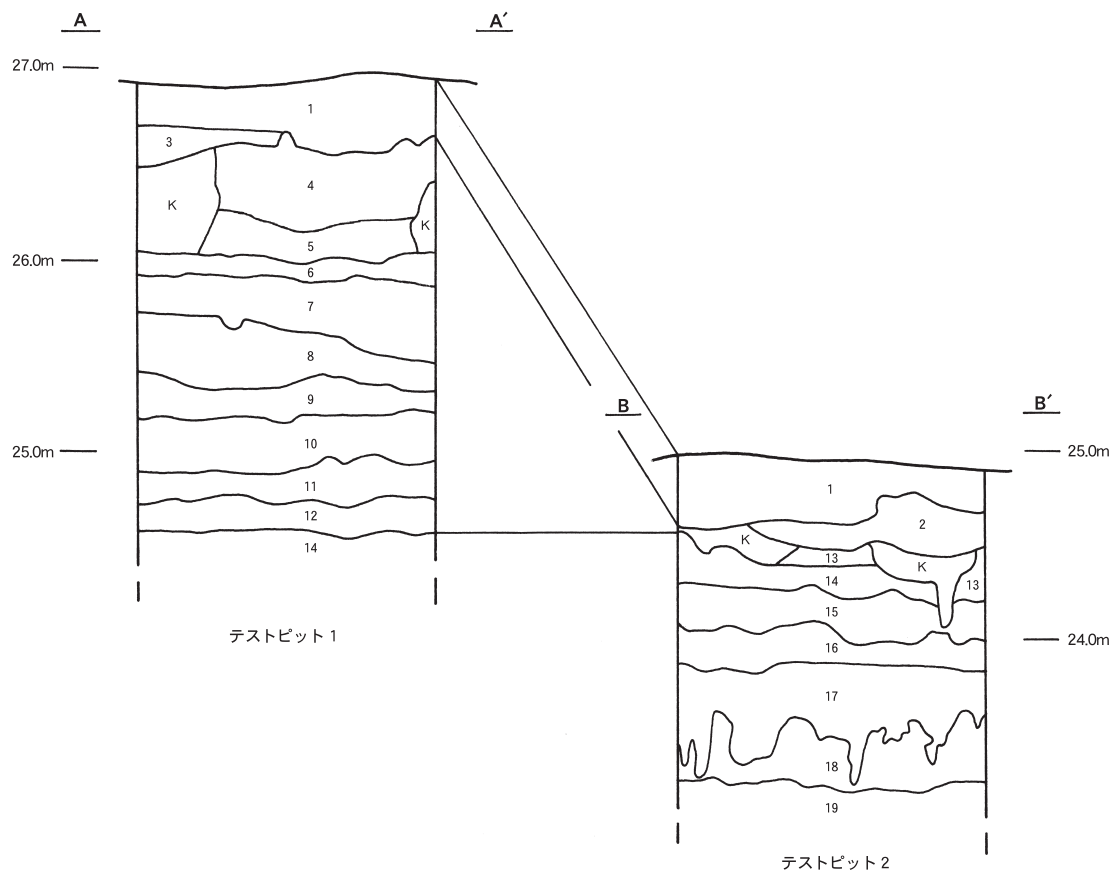
第11層は褐色を呈する粘土層への漸移層で、軽石粒子を微量含み、粘性・締まりともに強く、層厚は5～26cmである。

第12層は黄橙色を呈する粘性の強い層で、層厚は16～20cmである。

第13層は黒褐色を呈する耕作土層で粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は10cmである。

第14層は灰白色の粘土層である。ここから常総粘土層になると考えられる。

第15層は灰白色を呈する粘土層であり、軽石粒子を多量に含み、層厚は14～26cmである。



第3図 基本土層図

第16層は浅黄色を呈する下層への漸移層であり、粘性・締まりともに弱く、層厚は12～21cmである。

第17層は浅黄色を呈する砂層であり、ガラス質粒子を微量含み、粘性は弱く、締まりは強い。層厚は28～48cmである。

第18層はにぶい黄色を呈する砂層であり、ガラス質粒子を微量含み、下層には黒色砂粒を含む。粘性は弱く、締まりは強い。層厚は8～35cmである。

第19層はにぶい黄色を呈する砂層であり、ガラス質粒子を微量含む。

遺構は、第4層上面で確認されている。

第3節 縄文土器の分類

次のような基準を用いて土器の分類を行った。主たる分類は深鉢形土器（以下深鉢）を用いている。

第I群 前期の土器群

A類 黒浜式

第II群 中期の土器群

A類 阿玉台式

B類 加曾利E式

第III群 後期の土器群

A類 称名寺式

B類 堀之内式

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式

C2類 加曾利B2式

C3類 加曾利B3式

C4類 加曾利B式の粗製土器

D類 曾谷式

E類 安行1・2式

E1類 安行1式

E2類 安行2式

E3類 安行1・2式の粗製土器

第IV群 晩期の土器群

A類 安行3a～3d式

A1類 安行3a式

A2類 安行3b式

A3類 安行3c式

A4類 安行3d式

A5類 安行3a～3d式の粗製土器

B類 大洞式

B1類 大洞B式

B2類 大洞BC式

C類 前浦式

第V群 その他の土器群

第4章 A区の調査

第1節 調査の概要

A区は標高25～26mの台地上に位置し、北側は桜川低地へ、東側は谷津へ向かって傾斜している。調査範囲は南北17～22m、東西40～65mの面積1,777㎡である。

平成11・18年度に茨城県教育委員会は、貝塚の分布と遺構の有無を確認するため、調査区内に3か所のトレンチを設定して試掘調査を実施している。今回の調査では、貝塚の分層発掘を実施するため、その試掘トレンチを利用して土層の堆積状況の確認と遺物の取り上げを行った。なお、A区の調査は、事業地内における開発計画の変更が行われたため、トレンチの部分にとどめた。

今回の調査によって地点貝塚、竪穴住居跡、土坑などの遺構が確認されたが、その範囲や時期など詳細な情報については明確ではなく、ここでは各トレンチの土層や貝層の堆積状況と遺構の確認状況、出土した遺物について記述する。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に18箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢・鉢・注口土器・異形台付土器・壺形土器）、土製品（土偶・海獣形土製品・耳飾り・土器片錘・土製円盤）、石器（石匙・敲石・磨石・凹石）、動物遺存体（獣骨・鳥骨・魚骨・貝）などである。

第2節 調査区の状況と遺物

1 トレンチの状況

第1号トレンチ（第4図）

A区東部E4i5～E5c2区に、幅1.5m、長さ18.5mのトレンチを南北方向に設定し、深さ50～140cmまで掘り込んだ。堆積する層は10層からなり、南から北に向かって傾斜して堆積している。

第1～4層は厚さ5～30cmでローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒色土、黒褐色土で、傾斜に沿って土砂が堆積した自然堆積層である。土器は縄文時代後期後葉から晩期前葉の土器片が出土しているが、小破片が多い。土層堆積状況と遺物出土状況から二次的な堆積によって形成された土層と考えられる。

第5・6層は厚さ20～30cmでローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、黒色土で混貝土層である。混貝率は低く、破碎率が高いこと及び堆積状況から斜面に形成された貝層の最上層と考えられる。遺物は全体に出土するが、特に南部に集中する傾向がみられる。土器は縄文時代後期後半の加曾利B式土器から安行1・2式土器までが確認され、加曾利B式土器が中心である。動物遺存体は貝・獣骨が確認されている。貝種はヤマトシジミが9割以上を占め、他にハマグリ、アカニシなどが極めて少量検出されている。動物種はイノシシ、シカが主体であり、上層は少なく、下層からは多量に検出され、最下層は遺存状態の良好なものが多い。第7・8層は厚さ4～34cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、黒色土で混土貝層である。混貝率は高く、貝の破碎率は低い堆積状況を示している。土器は縄文時代後期の堀之内2式土器から安行1・2式土器までの土器が確認され、特に加曾利B式土器が多い。

第9・10層は厚さ10～42cmでロームブロック少量及び水分を多量に含んだ黒色土、黒褐色土であり、低湿地の土壤に類似している。遺物包含層であるが遺物の出土量は少量で、土器は縄文時代後期安行1・2式土器から晩期前浦式土器まで確認でき、中でも安行1・2式土器が多い。

第2号トレンチ（第4図）

A区中央部E4h2～E4a9区に、幅1.5m、長さ16.3mのトレンチを南北方向に設定し、深さ65～175cmまで掘り下げた。堆積する層は26層からなり、南から北に向かって傾斜して堆積している。第2・4・5・6・9・10層は前述した第1号トレンチと共通の土層である。

第11～14層は厚さ10～20cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒色土、黒褐色土で混貝土層である。混貝率は低く、貝の破砕率は高いこと及び堆積状況から斜面に形成された貝層の最上層と考えられる。土器は縄文時代後期の加曽利B式土器から安行1式土器が確認されている。

第15～20層は厚さ10～20cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む極暗褐色土、黒褐色土、褐色土、黒色土で混貝土層である。第11～14層に比べると混貝率が低く、破砕率も高い。貝を含む土がブロック状に重なって堆積している状況から人為堆積と考えられる。土器は縄文時代後期の堀之内2式土器から加曽利B式土器までが確認されており、加曽利B式土器が多い。またイノシシやシカなど獣骨類は、遺存状態の良好なものが多く出土している。

第21～23層は厚さ10～25cmで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土で、混土貝層である。混貝率は高く、破砕率も低い堆積状況を示している。土器は縄文時代後期の堀之内2式土器から加曽利B式土器まで確認され、特に加曽利B式土器が多い。

第15～23層は堅穴住居跡覆土の可能性はある。第16～20層の混貝土層を中心に、南側に第21～23層、北側に第15・21層の混土貝層が堆積している。貝層は南から北へ緩く傾斜し、ブロック状に堆積して人為堆積の状況を示し、堅穴住居廃絶後に廃棄された貝の可能性が高い。土器は縄文時代後期堀之内2式土器から加曽利B式土器が出土し、加曽利B2式土器が主体である。堅穴住居跡の時期は、堆積状況と出土土器から縄文時代後期中葉と考えられる。

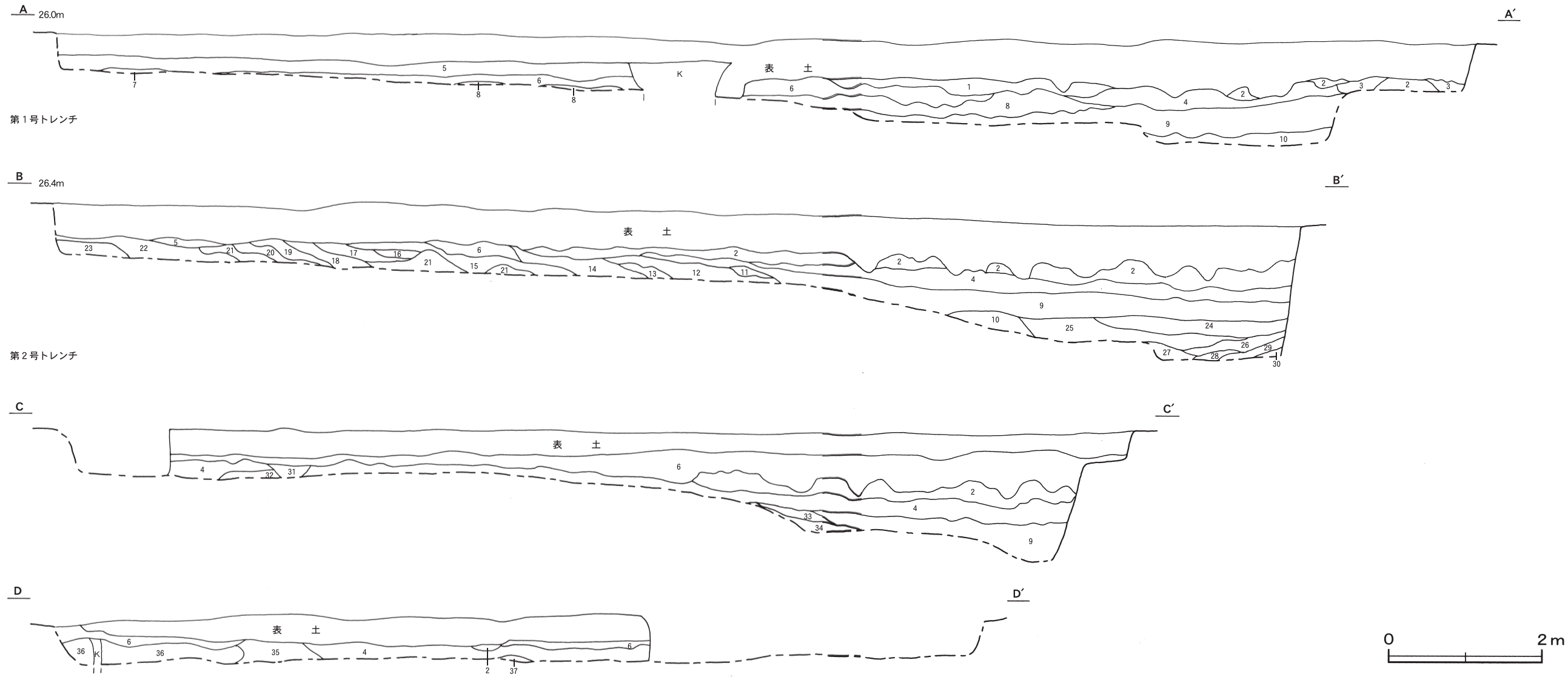
第24～30層も第10層を掘り込んだ堅穴住居跡覆土の可能性はある。土器は第27層からP2が出土している。その他、安行1式土器から安行3a式土器が出土しており、安行1式土器が主体である。この住居跡の時期は、出土土器から縄文時代後期後葉と考えられる。

第3号トレンチ（第4図）

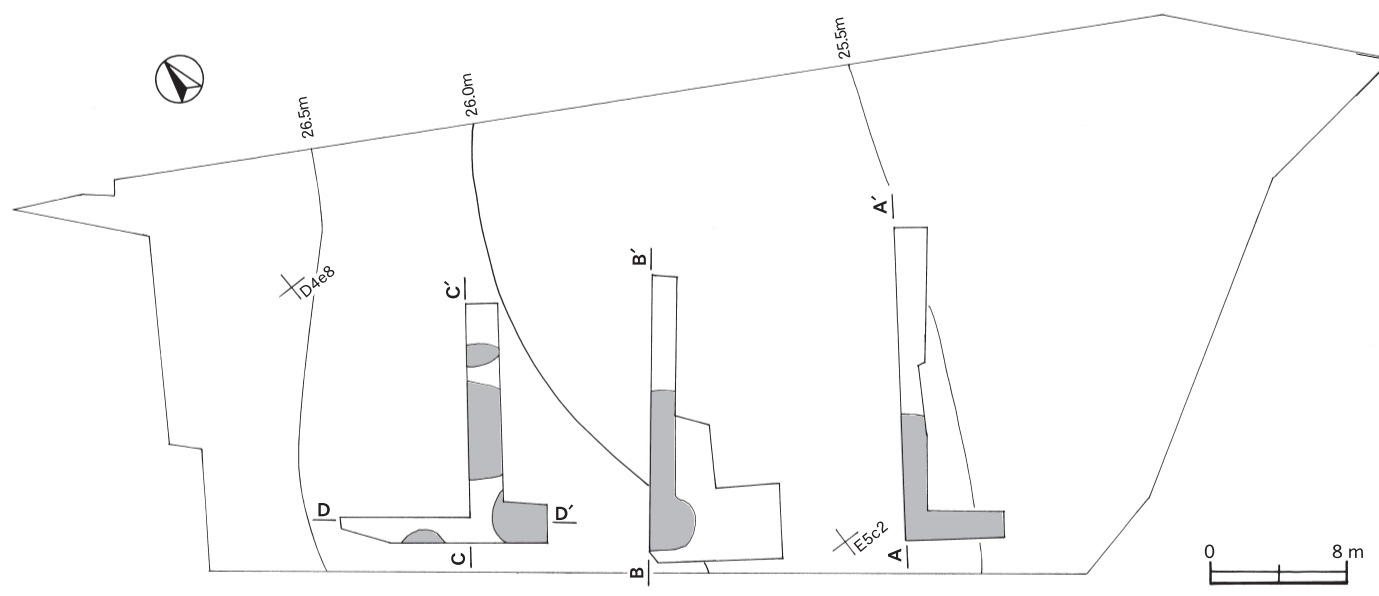
A区西部D4f9～D4i7区に、幅1.5m、長さ14.0mのトレンチを南北方向に設定し、深さ50～165cmまで掘り込んだ。堆積する層は11層からなり、南から北に向かって水平方向に堆積している。第2・4・6・9層は前述した第1号トレンチと共通の土層である。

第31層は第4層上面から掘り込まれた土坑覆土と考えられる。

第32～37層は厚さ2～28cmでロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を含む黒褐色土、暗褐色土、黒色土の遺物包含層である。土器は縄文時代後期加曽利B式土器から安行1式土器が確認されており、加曽利B式土器が主体である。



第3号トレンチ



土層解説 (各トレンチ共通)

1	黒色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	19	褐色	ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量
2	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子微量	20	黒色	ローム粒子微量
3	黒褐色	ロームブロック少量	21	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量 (混貝率1%, 破砕率100%)
4	黒色	ロームブロック少量, 焼土粒子微量	22	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量 (混貝率15%, 破砕率40%)
5	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子微量 (混貝率3~5%, 破砕率80%)	23	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率15%, 破砕率5%)
6	黒色	ロームブロック・炭化粒子微量	24	黒色	焼土粒子・細礫微量
7	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率60~70%, 破砕率50%)	25	黒褐色	焼土粒子少量, 炭化粒子微量
8	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	26	黒色	ローム粒子・焼土粒子少量
9	黒色	ロームブロック少量	27	黒色	焼土粒子・炭化粒子微量
10	黒褐色	ローム粒子微量	28	極暗褐色	焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量
11	黒色	ローム粒子・焼土粒子微量 (混貝率25%, 破砕率20%)	29	黒色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
12	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子微量 (混貝率5%, 破砕率50%)	30	黒褐色	ローム粒子多量, 焼土粒子微量
13	黒褐色	炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量	31	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
14	暗褐色	ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子微量	32	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
15	極暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率1%, 破砕率100%)	33	黒色	ローム粒子微量
16	黒褐色	ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量	34	黒褐色	ローム粒子少量
17	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量 (混貝率2%, 破砕率50%)	35	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
18	黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	36	暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
			37	黒色	ロームブロック微量

第4図 A区第1~3号トレンチ実測図

2 遺物 (第5～17図, PL7～9・12～14)

A区の調査では、中期から晩期の土器が出土しているが、後期から晩期の土器が主体で、前・中期の土器は数点であり、縄文時代後期中葉から晩期前葉の土器が多い。加曽利B式期から安行1・2式期は精製土器と粗製土器の重量はほぼ同じ(1.02倍)であるが、晩期安行3a～3d式期には粗製土器の出土は精製土器の5.5倍である。このことから、後期に比べて、晩期には粗製土器の製作が盛んに行われたと考えられる。

また、土製品6点(土偶1・土版1・海獣形土製品1・耳飾り2・土製円盤1)、石器・石製品20点(石匙1・磨製石斧5・磨石3・敲石1・石錘2・凹石2・軽石1・石棒4・石剣1)、剥片24点が出土している。前述したとおり、多くの遺物はすでに原位置を失っているため、各層毎の定量的な分析はできない。

本報告では、第3章第3節の縄文土器の分類に従って、各土器群について記していくことにする。また、TP番号のついている遺物の説明は、数字番号のみの表記である。土製品と石器については一覧表で記した。

A区出土土器の点数及び重量

時期	前 期				後 期							
	前 期		中 期		称名寺式		堀之内式		加曽利B式			
粗・精の別									精 製		粗 製	
部位	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部
出土数			1	1	13	34	3	57	221	700	58	600
重量(kg)			0.09	0.03	0.33	0.58	0.04	1.78	4.13	10.88	1.63	12.48

時期	後 期										総点数 総重量
	曾谷式				安行1・2式				底部片	細片	
粗・精の別	精 製		粗 製		精 製		粗 製				
部位	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部			
出土数		1			161	101	74	186	131	2734	5076
重量(kg)		0.04			3.67	2.01	1.75	4.09	5.51	26.56	75.60

時期	晩 期											
	安行3a～3d式				前浦式		大洞式		製塩土器	底部片	細片	総点数 総重量
粗・精の別	精 製		粗 製									
部位	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部				
出土数	76	83	333	544	16	13	81	58	713	87	8882	10886
重量(kg)	1.53	1.27	6.28	9.2	0.36	0.24	1.15	0.68	5.66	4.19	63.89	94.45

第II群 中期の土器群

B類 加曽利E式 1は地文が単節縄文RLの縦位施文で、懸垂文がみられる。

第III群 後期の土器群

A類 称名寺式 2～5は称名寺2式である。3・5は刺突文が充填されている。2は小波状口縁、4は大きな突起をもつ口縁部片である。

B類 堀之内式 6～9は堀之内1式で、数条の沈線文が施文されている。7は波頂部に円孔がある。10は堀之内2式で、地文は単節縄文LRで縦位に沈線区画が施されている。

C類 加曽利B式

C1類 加曽利B1式 11～19である。11は沈線間に縄文LRが充填施文されている。12・13には横位2条の隆起線がみられ、14・15・17・18は内面に沈線を施し、19は地文が単節縄文LRで波状文が施文されている。

C2類 加曽利B2式 P1, 20～31である。P1, 20～23は矢羽根状文系土器で、24～29は斜格子目文系

土器である。24～29は口辺部と胴部に斜格子目文を施し、30は口辺部に斜位の沈線文がみられる。31は無文である。

C 3類 加曾利B 3式 32～53である。32～48には刻文帯や弧状の文様がみられる。32～40は波状口縁で、41～45は平口縁である。44～48には弧線文を施し、49・50には口縁に縦の条線文が施文されている。51～53は口辺部片で、地文が単節縄文であり懸垂する2条の沈線文が施文されている。

C 4類 加曾利B式の粗製土器 54～65・68～76である。地文には縄文あるいは撚糸文を施し、斜位あるいは弧状の沈線文を施すものが多い。54～62・65は指頭圧痕、63・64は爪形文が並ぶ紐線文系土器群である。68～76は縄文を地文とし、斜位の条線文が施文された胴部片である。

D類 曾谷式 77・78・190は刻文帯や沈線文がみられる。

E類 安行1・2式

E 1類 安行1式 P 2, 80～84・86・88～91・95・96・164である。95は環状の貼付文、96には斜位の沈線文が施文されている。P 2は浅鉢である。164は縄文帯がみられる。

E 2類 安行2式 85・98～113・115・117～126・204である。98～113・115・117～126は縄文帯に刻目をもつ貼付文がみられ、85・119～126・204は刻文帯をもつ土器である。

E 3類 安行1・2式の粗製土器 66・67・127～150である。66・67・127～138は口縁部で、紐線文あるいは刻文帯を施す土器であり、弧状の条線文が施文されている。一部には懸垂あるいは入り組む沈線文をもつ土器もある(129・130・131)。137～145は紐線文をもたない土器で、弧状の条線文が施文されている。144は2条の懸垂文が施文され、146・150は無文である。147は撚糸文、148は縄文帯と条線文、149は縦位の条線文が施されている。

第IV群 晩期の土器群

A類 安行3 a～3 d式

A 1類 安行3 a式 P 3, 87・92・97・116・151～154・156～158・214である。151～154には三叉文、87・92・97・116・158・214は縄文帯が施されている。158は浅鉢と考えられる。

A 2類 安行3 b式 79・93・94・114・159～174・176～179・192である。79・93・159～166は単節縄文LR, 94は単節縄文RLを地文とし、入組文や波状沈線文が施文されている。114は口唇部にB突起を貼り付け、沈線区画に単節縄文RLを充填施文している。167～173はいわゆる「姥山式」であり、細密沈線文が充填されている。192は鉢巻状の貼付文をもつ。174は弧状文の鉢形土器、176・177は鉢、178・179は皿である。

A 3類 安行3 c式 180～189で、刺突文や刻目が施文されている。189は沈線文を施文する土器である。

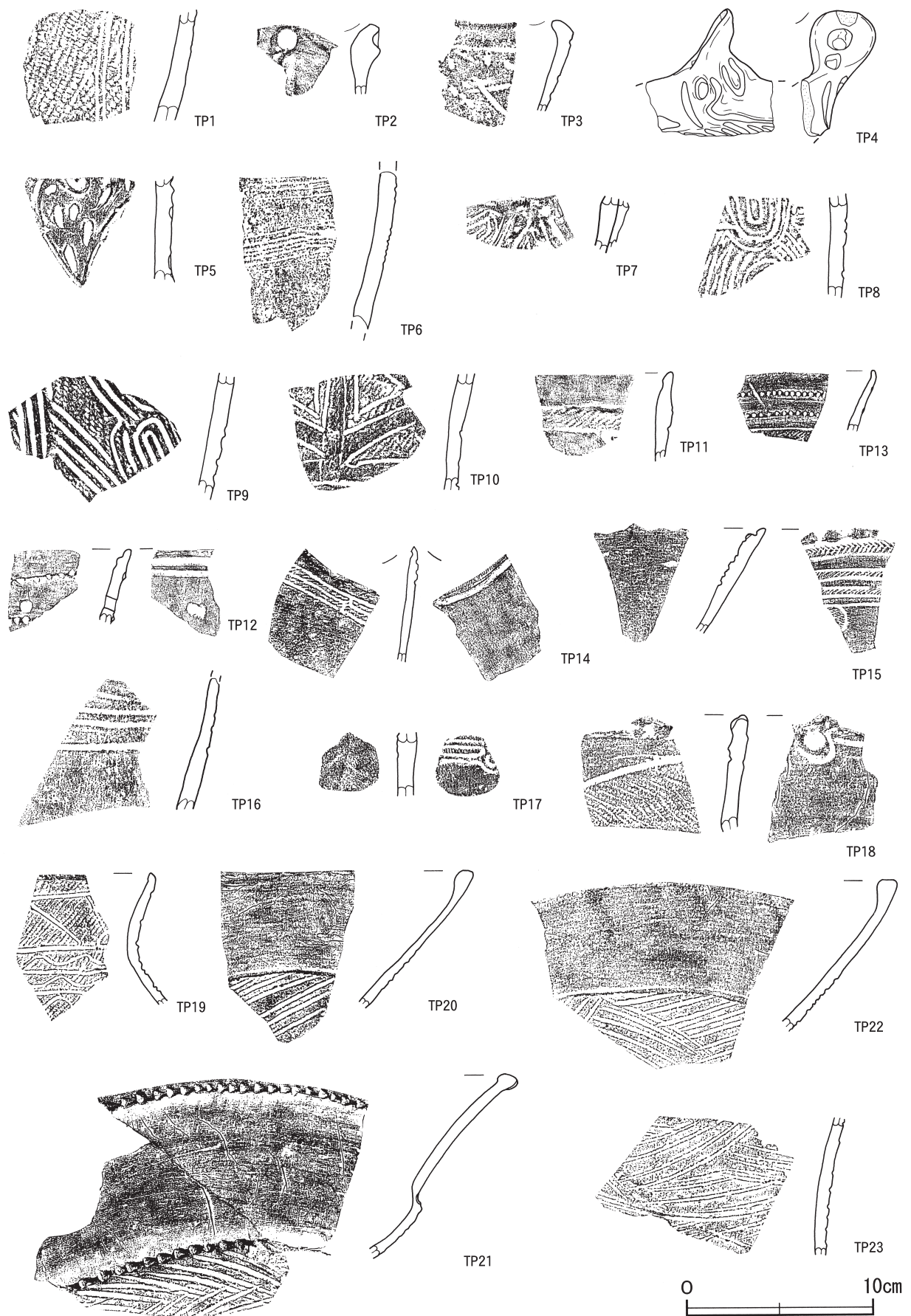
A 5類 安行3 a～3 d式の粗製土器 193～200・216～221である。193～198は紐線文土器である。弧状の沈線文を地文とし、懸垂する沈線文を施文している。199・200・216～221は紐線文がみられない土器である。

B類 大洞式 P 4・P 5, 155・175・191・201～203・205～212である。155は小波状口縁、P 5, 201～203は羊歯状文を施す土器である。175・191・205～211は雲形文、212は口縁部に縄文が施文されている。P 4は口縁部に二溝間の截痕が見られ、口唇部にB突起を貼り付けた皿で、大洞C 1式と考えられる。

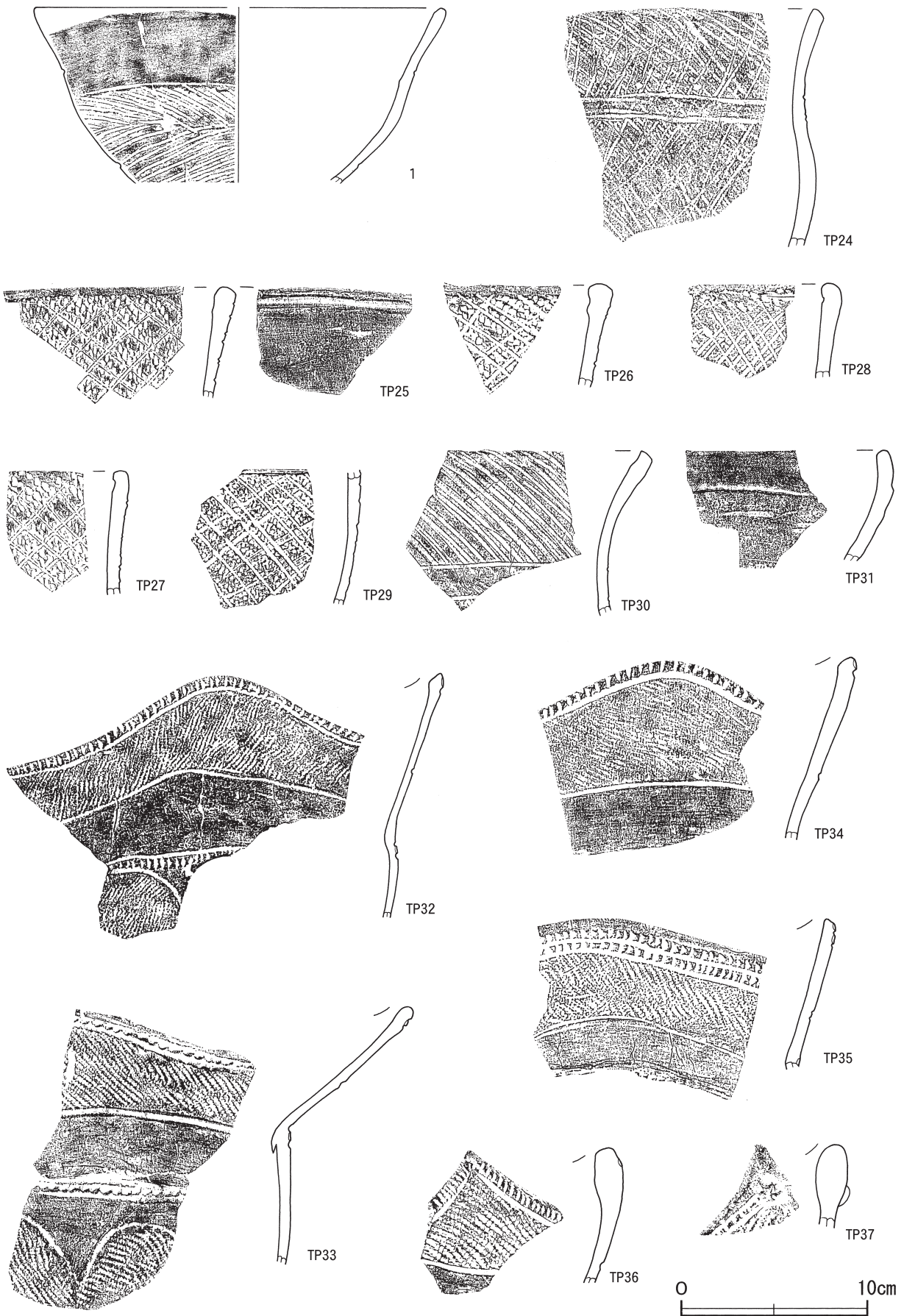
C類 前浦式 213である。口唇部に小突起が貼付された波状口縁で、幅広の沈線文が施文されている。

第V群 その他の土器群

P 6・P 7・P 9, 215である。215は撚糸文が施されている。P 6は注口部片、P 7は無文のミニチュア土器である。P 9は、三方向に単節縄文が充填された沈線区画帯が延び、器形は三角形あるいは六角形状の浅鉢と考えられる。



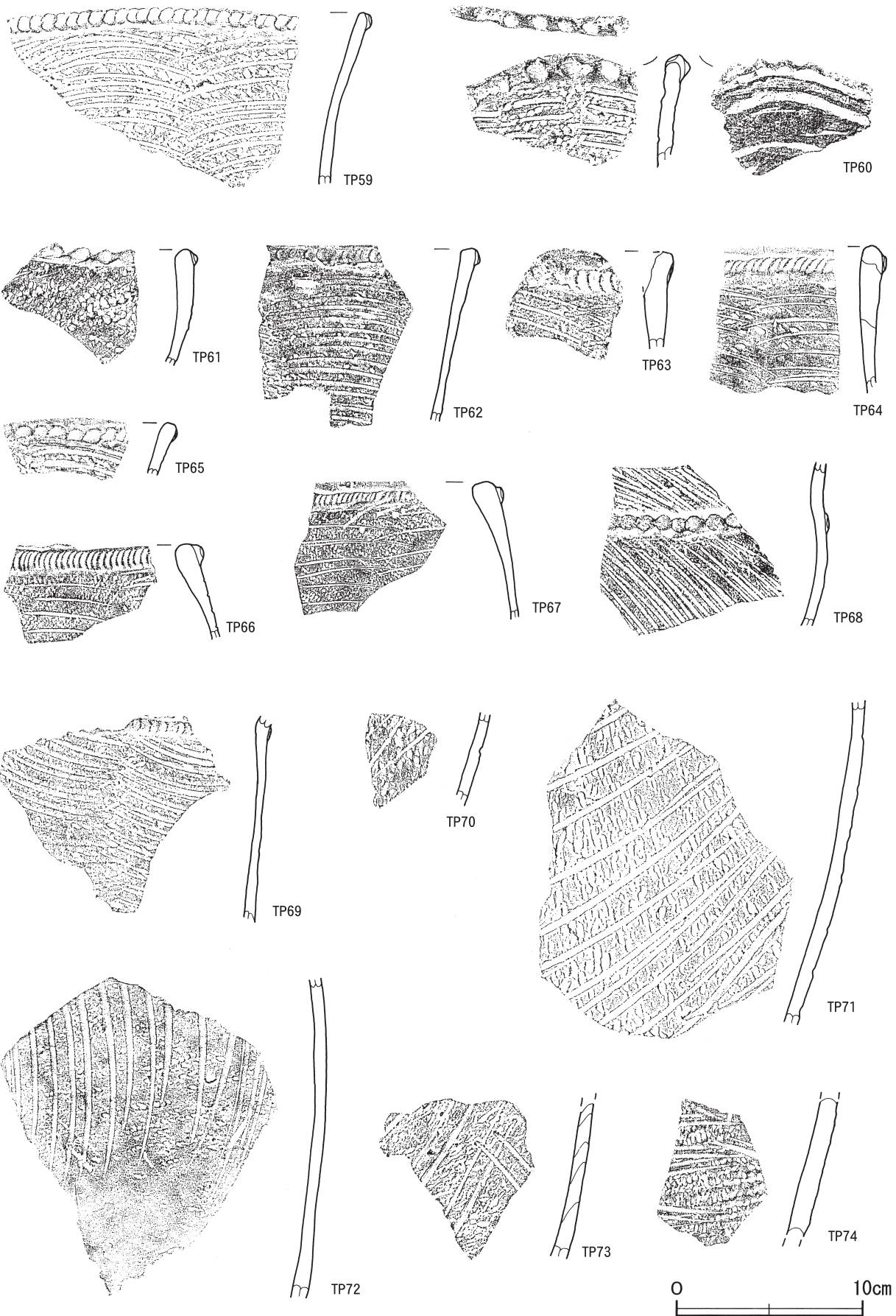
第5図 A区トレンチ出土遺物実測図(1)



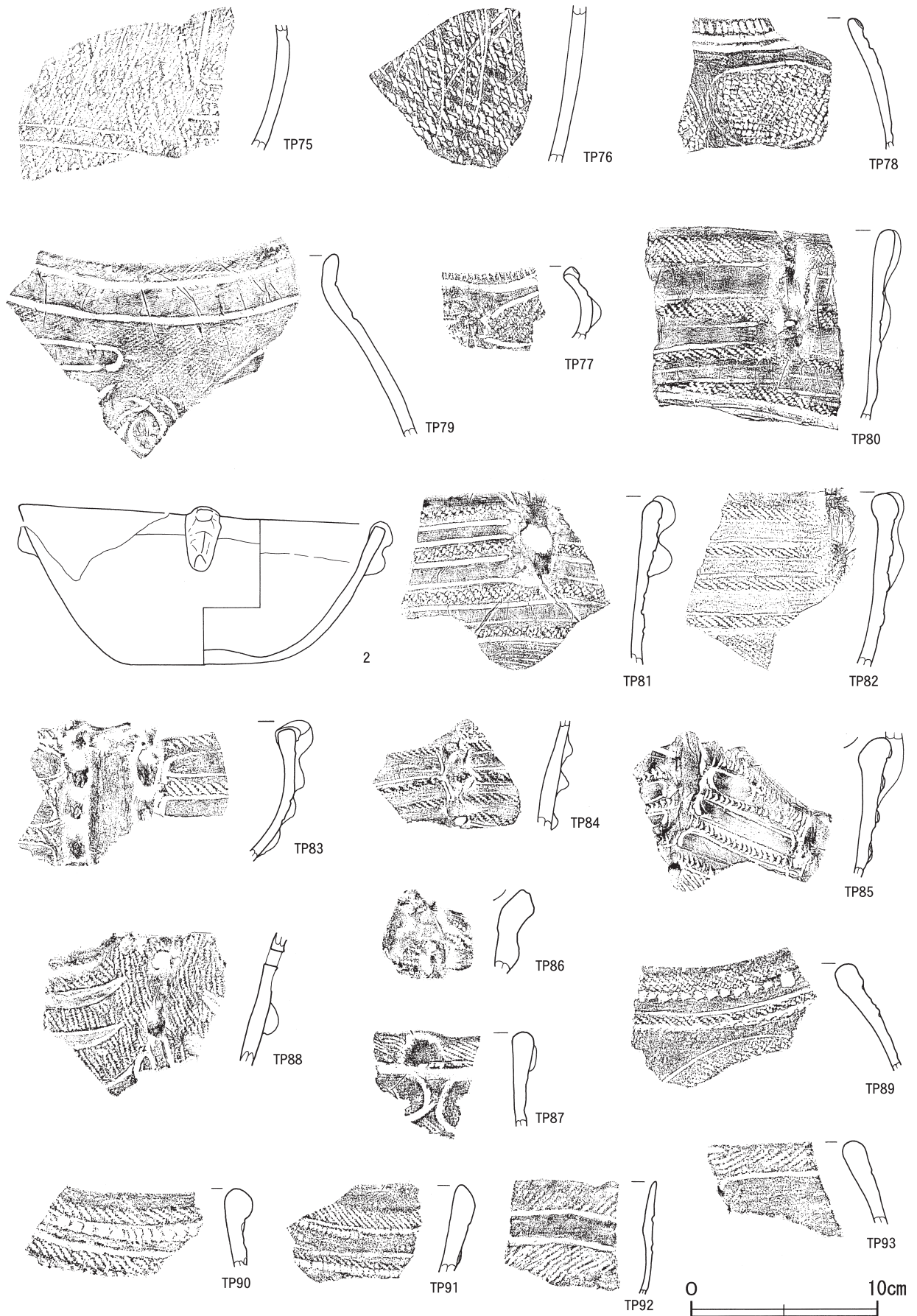
第6図 A区トレンチ出土遺物実測図(2)



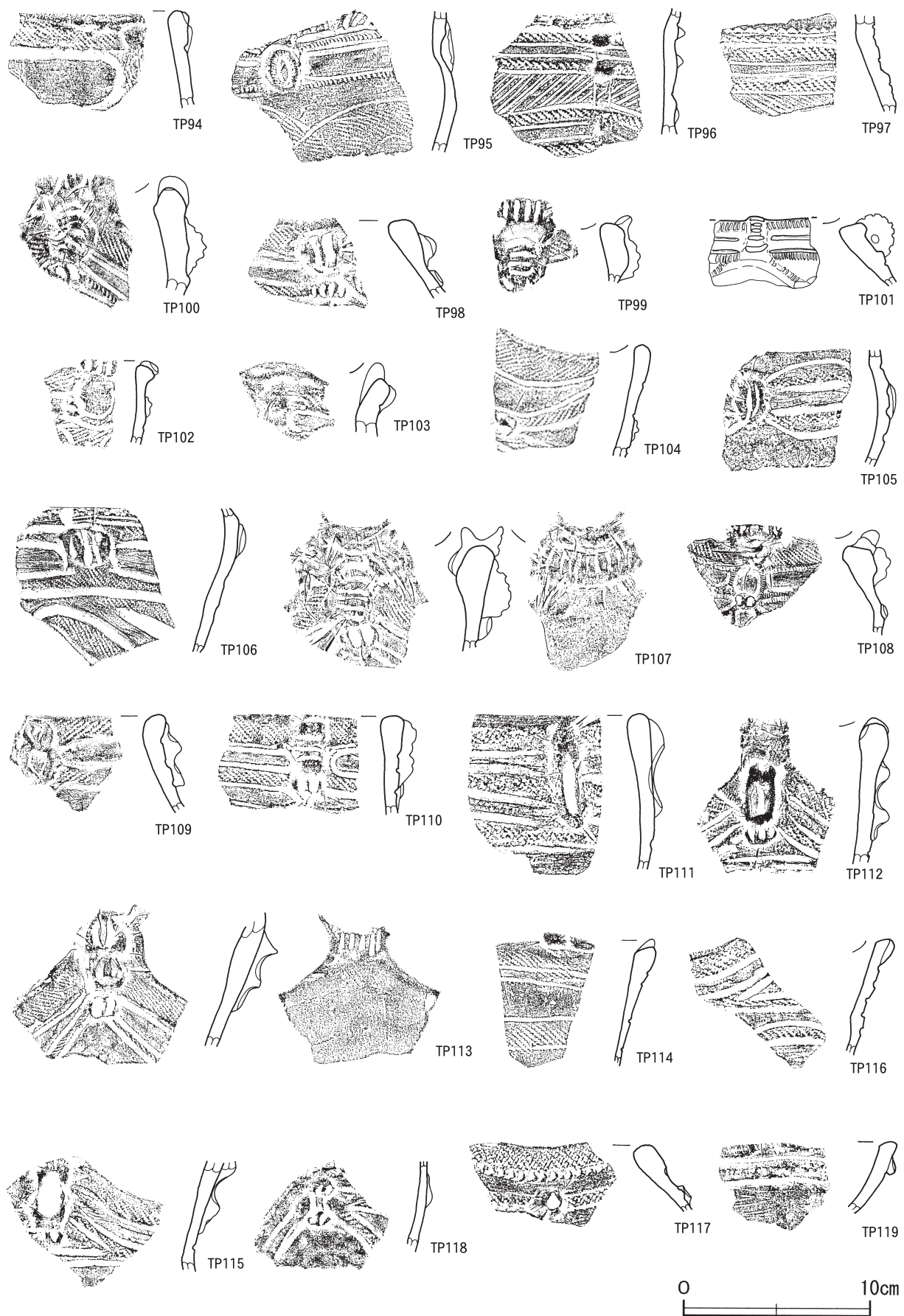
第7図 A区トレンチ出土遺物実測図(3)



第8図 A区トレンチ出土遺物実測図(4)



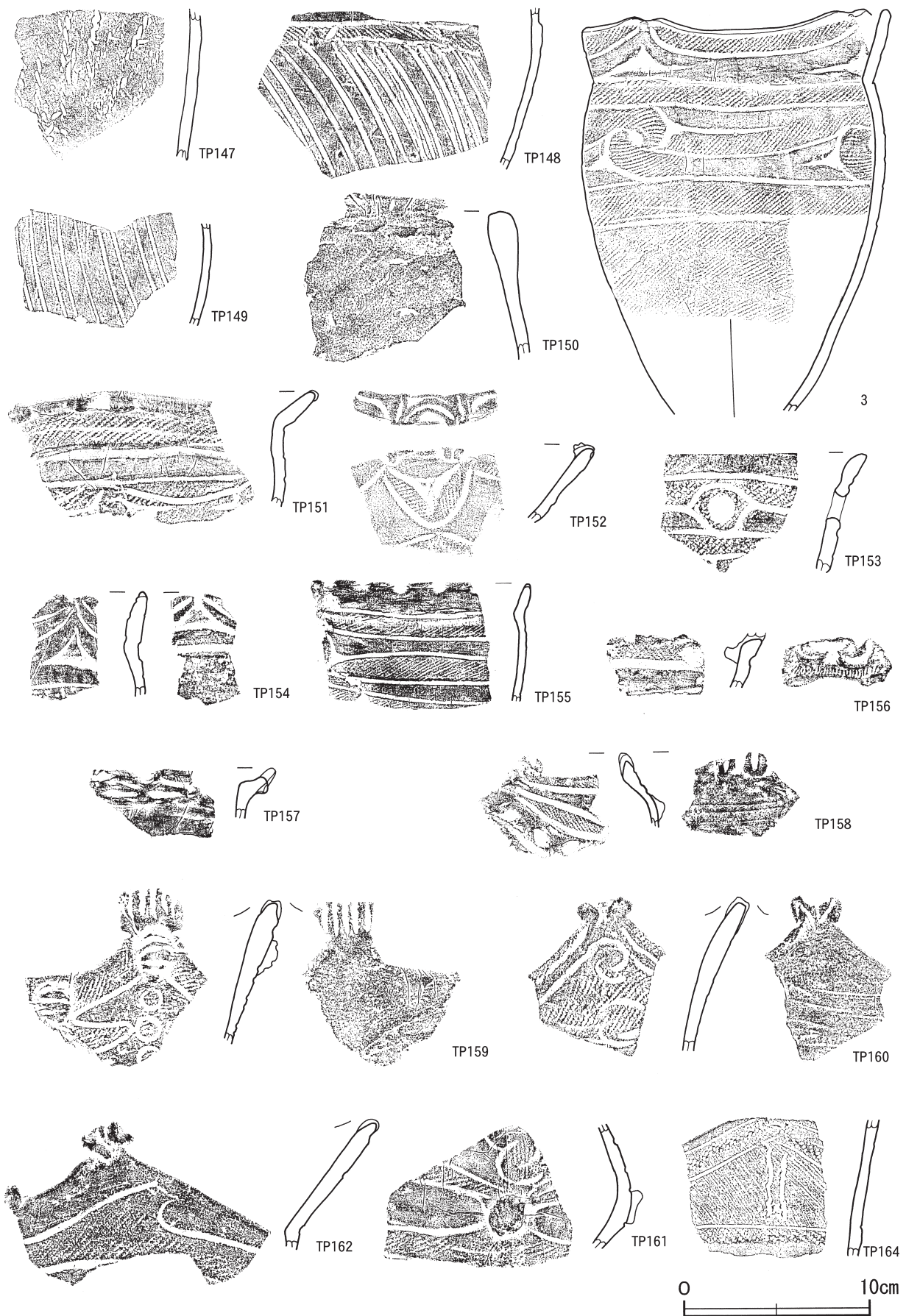
第9図 A区トレンチ出土遺物実測図(5)



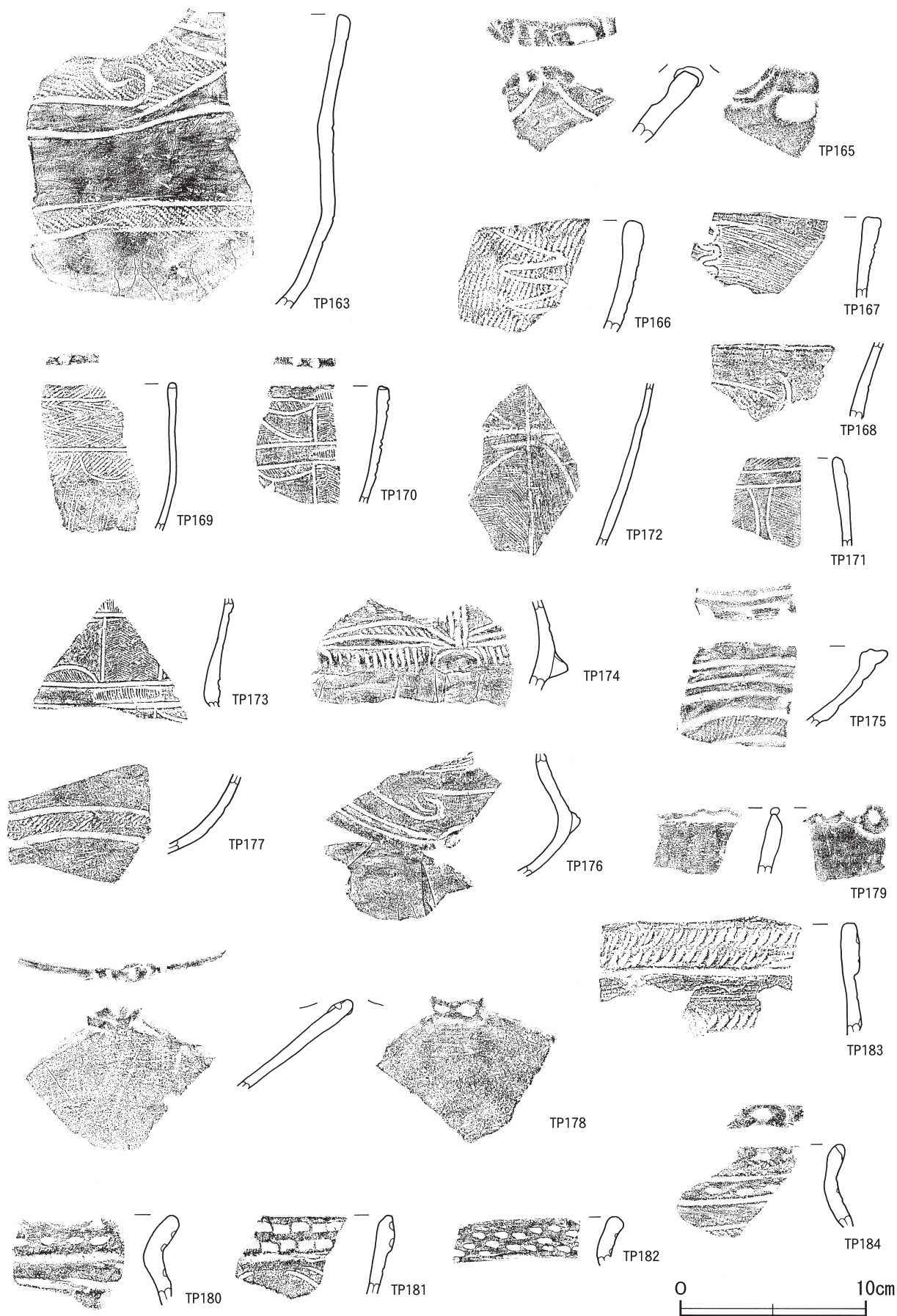
第10図 A区トレンチ出土遺物実測図(6)



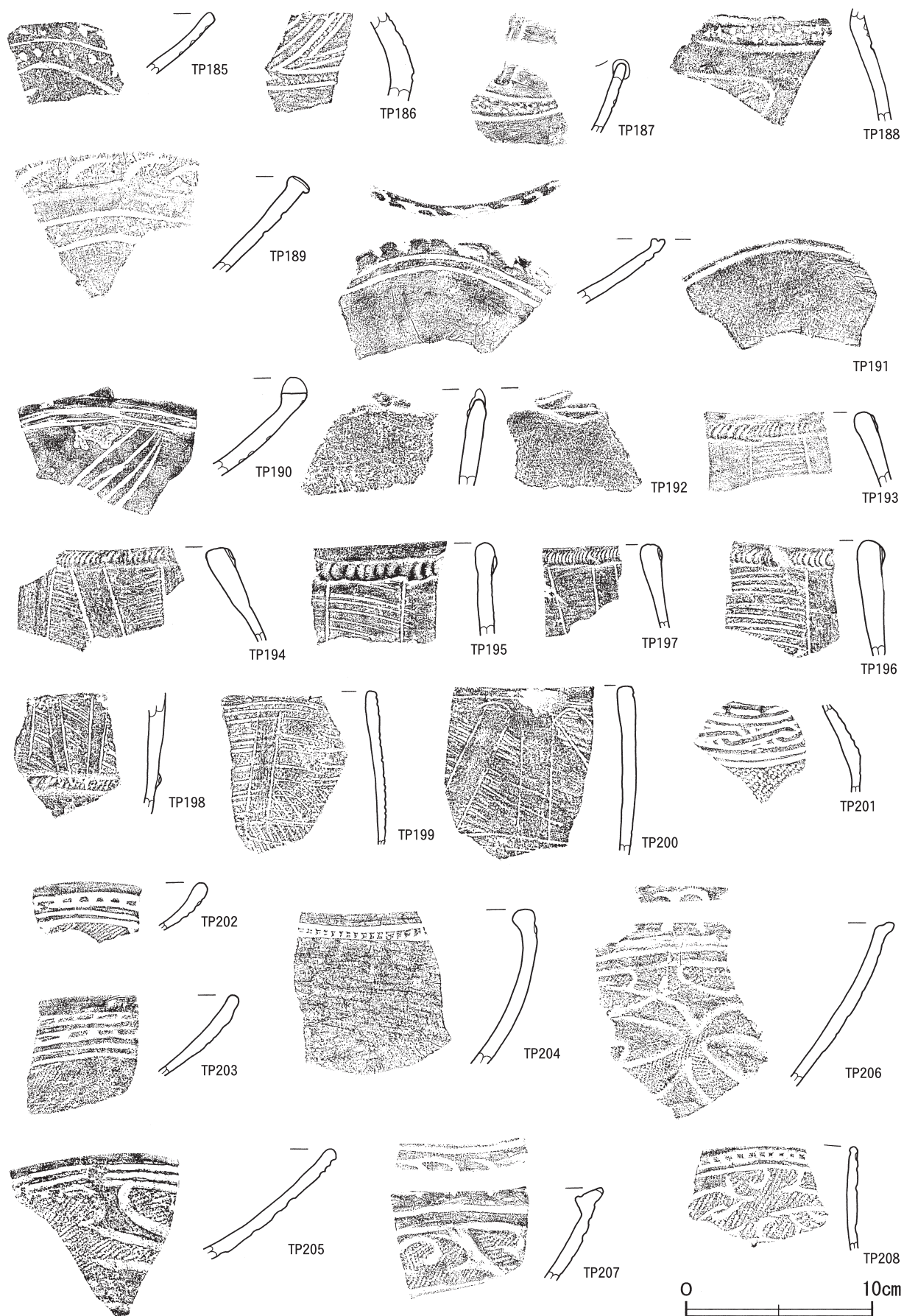
第11図 A区トレンチ出土遺物実測図(7)



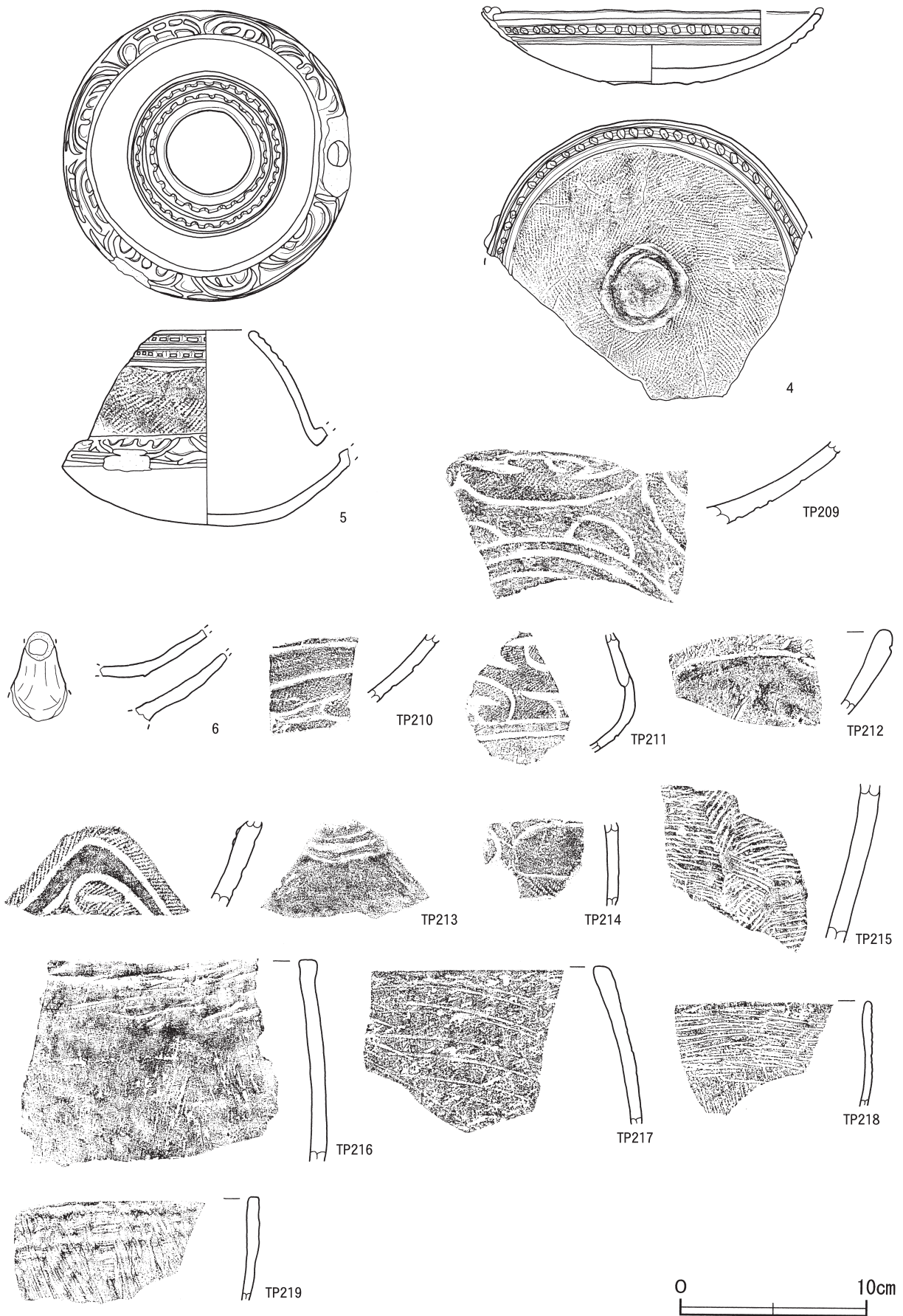
第12図 A区トレンチ出土遺物実測図(8)



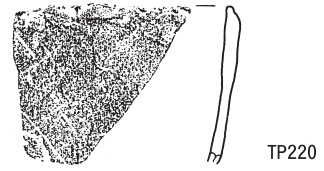
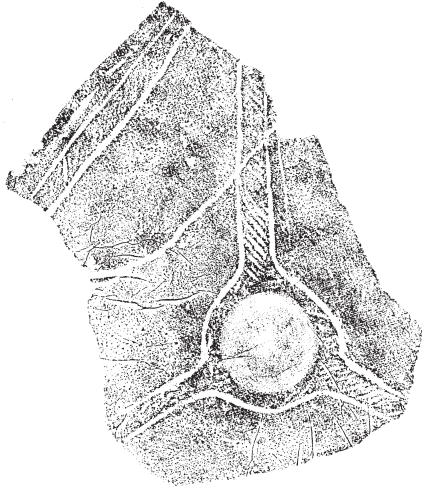
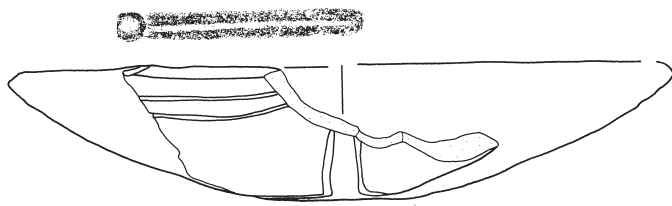
第13図 A区トレンチ出土遺物実測図(9)



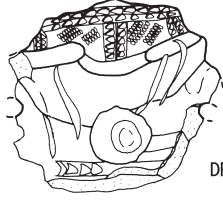
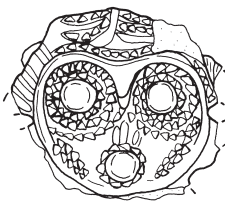
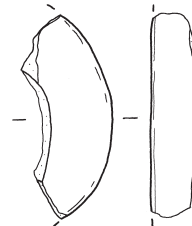
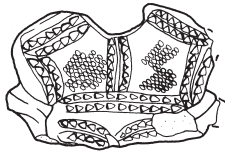
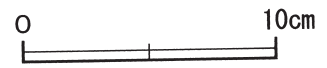
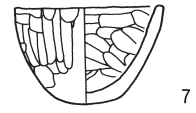
第14図 A区トレンチ出土遺物実測図(10)



第15図 A区トレンチ出土遺物実測図(11)



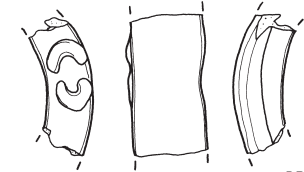
9



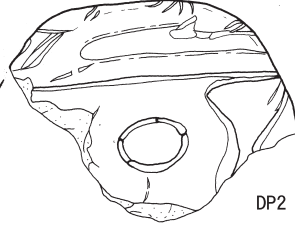
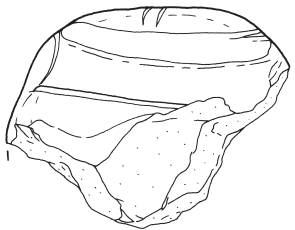
DP1



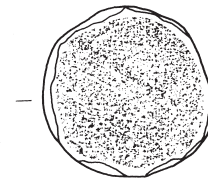
DP4



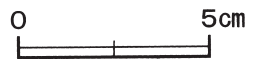
DP5



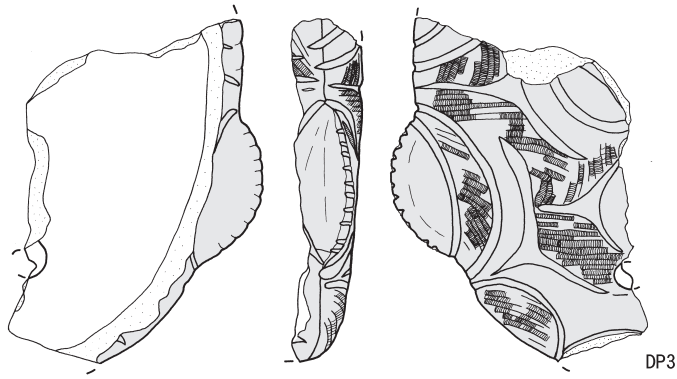
DP2



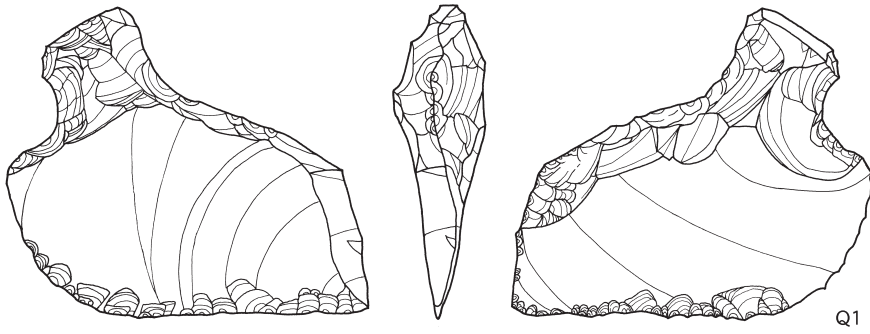
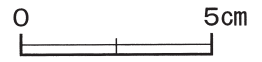
DP6



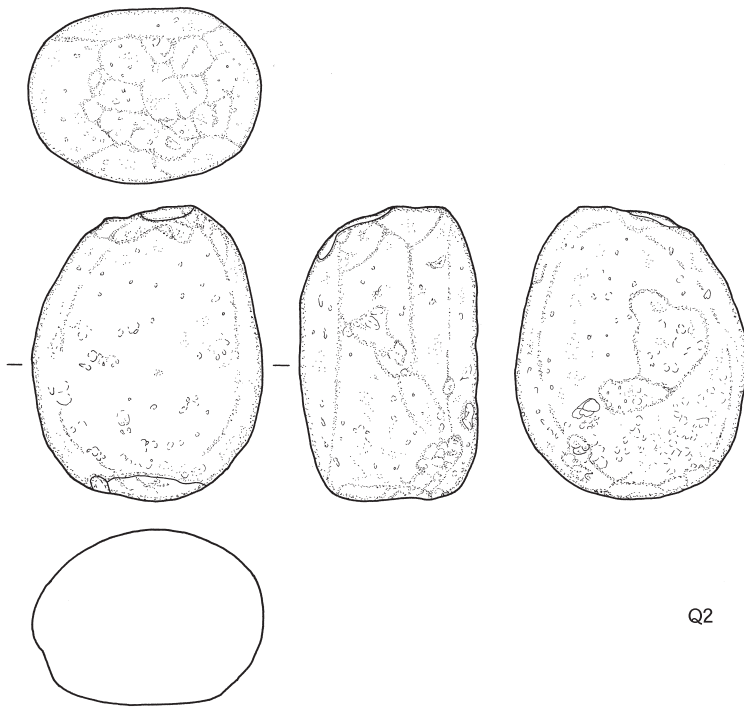
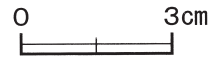
第16図 A区トレンチ出土遺物実測図(12)



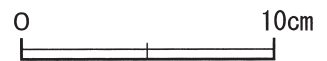
DP3



Q1



Q2



第17図 A区トレンチ出土遺物実測図(13)

A区トレンチ出土土製品・石器観察表(第16・17図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP1	土偶	(5.1)	(5.6)	3.8	(68.4)	長石・石英・赤色粒子	目・口・鼻を連続刺突で表現 頭頂部は平坦 後頭部にボタン状の貼付文 木葺土偶	第1号トレンチ	PL15
DP2	土版	(5.8)	(7.6)	1.9	(74.2)	長石・石英・雲母	2条の沈線を施文	第2号トレンチ	PL15
DP3	海獣形土製品	(9.0)	(6.8)	(1.9)	(59.9)	長石・石英・雲母	中空 三叉文 無節縄文Lを充填施文 穿孔あり	第2号トレンチ	PL15
DP4	耳飾り	(5.4)	(2.3)	(1.3)	(15.3)	長石・石英・雲母	厚手 無文	第1号トレンチ	
DP5	耳飾り	(3.7)	(1.7)	2.1	(8.5)	長石・雲母	対向する弧状の浮線文	第2号トレンチ	
DP6	土製円盤	4.5	4.5	0.7	15.7	長石・石英・雲母	周囲を研磨 無文	第2号トレンチ	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q1	石匙	6.1	7.2	1.8	50.7	硬質頁岩	横長石匙 縁辺周辺部に押圧剥離	第2号トレンチ	PL16
Q2	磨石	11.7	9.2	7.1	446.0	安山岩	底面に磨痕	第3号トレンチ	

第3節 A区貝塚の様相

A区は、事業地内における開発計画の変更が行われたため、トレンチ部分の調査で終了したが、斜面貝層と考えられる貝層と遺物包含層が確認された。調査区南部に広がる貝塚は、小貝塚の集合体のようにも見えるが、貝層の貝種組成や混貝率から南から北へ形成された斜面貝層と推測される。この貝層は、桜川低地および谷津へ向かって傾斜した旧地形に沿って堆積している。文化課の試掘によれば、東側谷津に向かう斜面部の貝塚の貝層は、厚さ2～3mの純貝層が確認され、その範囲は、東西15m、南北70mの規模という。また堆積状況から、貝層の下に住居跡覆土や土坑覆土の存在も確認されている。竪穴住居跡覆土はトレンチでは2か所で確認されたが、覆土に貝層が見られることから、住居廃絶後の窪地に貝殻を廃棄した結果と考えられる。遺構の分布と貝層に集中する数多くの遺物が検出されていることから、他にも住居跡、土坑など遺構の存在が想定される。

遺物は、南側の土層から堀之内2式土器をはじめ加曾利B1～B3式土器、安行1・2式土器が確認され、加曾利B式土器が主体である。北側からは、加曾利B式をはじめ安行1・2式土器、安行3a～3d式土器、前浦式土器、大洞式土器が確認され、安行1・2式土器が主体である。

当貝塚の貝種組成は、縄文時代後期から晩期に内海の汽水域に形成される貝塚の特徴を表しているもので、貝類は汽水域に棲息するヤマトシジミが9割以上を占めている。その他、鹹水域に棲息するハマグリ・アカニシ・シオフキなどが確認できるが、その量は極めて少量である。獣骨類は南部の斜面貝層に集中した出土が認められる。動物種はイノシシ・シカが大半を占め、四肢骨は骨幹部に螺旋状の割れ口をもつ資料が目立った。斜面貝層の形成時期は、縄文時代後期前半から始まり、晩期の前半で終焉となる。貝層に包含する縄文土器は、標高の高い南側に後期前半の遺物が、標高の低い北側に後期終末から晩期の遺物が集中していることから、斜面貝層の堆積は南から北へ進んでいる。従って、後期前半堀之内2式期に斜面貝層の南側から堆積が始まり、加曾利B式、安行1・2式期に最盛期となり、安行3a・3b式期をもって終焉を迎えている。その後、貝層直上の遺物包含層では安行3式から前浦式期の遺物が確認できることから、貝塚形成の終焉後も旭台貝塚は集落として継続して利用されたものと考えられる。

A区は現状保存されるが、今後の学術的な調査により、詳細な遺跡内容等の情報分析に期待するものである。

第5章 B・C・D区の調査

第1節 B区の調査と遺物

B区は、標高25～26mの台地縁辺部に位置し、北側は桜川低地へ、東側は谷津へ向かって緩やかに傾斜している。南側の平坦な台地とは、谷津へ向かう小支谷を挟んで対峙している。調査範囲は南北20～64m、東西32～64mの約2,623㎡で、確認調査によって貝層、竪穴住居跡、土坑などが確認されている。本区の調査は、まず貝層の堆積状況と範囲を確認することであり、トレンチ調査による土層観察と出土遺物の取り上げを行った。その後、表土を除去して遺構確認作業を実施したが、事業地内の開発計画の変更が行われたため、遺構調査は実施しておらず、その内容については不明である。ここでは、トレンチ調査によって確認された土層や貝層の堆積状況と遺物の出土状況について記し、遺構については、確認状況について記載する。

1 トレンチの状況

B区の調査では、南北方向に第1・5～7号トレンチ、東西方向に第2～4号トレンチを設定し、確認調査を行った。各トレンチで観察した土層は、同一と判断できる層は同一として番号をつけており、全体で第1～20層に分層される。また、第3・4・7・10層においては土色や含有物が共通であるが、貝ブロックのまとまりや混貝率、さらに貝の殻長や堆積方向を考慮して細分をしている。

第1号トレンチ（第18図）

B区西部F3a9～G3d9区に、幅1.5m、長さ52.2mのトレンチを南北方向に設定し、深さ20～250cmまで掘り込んだ。土層は北から南に傾斜する斜面に沿って、北側から流れ込んだ堆積状況を示している。

第1・2層は厚さ8～62cmで、傾斜に沿って堆積している耕作土である。

第3層は厚さ6～28cmでローム粒子微量、貝少量（混貝率10%）を含む黒褐色の混貝土層である。本層は26層に細分される。貝種はヤマトシジミが主体である。第3～5層でハマグリを検出した以外他の種は検出されていない。貝がブロック状に堆積しているように観察できるが、各層とも混貝率が低く貝の破碎率も高いことや土層中に中期から晩期までの土器が混在していることから再堆積層と考えられる。

第4層は厚さ6～34cmで、焼土粒子・砂ブロック微量を含む黒色土である。本層は北側から24.8mの地点で南北長約7mの混貝土層となっており、15層に細分される。貝種はヤマトシジミだけであり、他の貝は確認されていない。ほぼ傾斜に沿って堆積する状況を示しており、混貝率は1～5%程、土器片の時期も混在していることから、高位から流れ込んだ土による再堆積層と想定される。

第7層は厚さ8～32cmで、ローム粒子少量、砂ブロック・炭化粒子を微量含む暗褐色土である。本層は北側から約25mの地点で南北約7mの混貝土層となっており、6層に細分される。貝種はヤマトシジミだけであり、他の貝は確認されていない。ほぼ傾斜に沿って堆積する状況を示しており、混貝率は1～2%で、貝の破碎率が高く、高位から流れ込んだ土による再堆積層と想定される。

第10層は厚さ10～25cmで、砂ブロックを微量含む黒褐色土である。北側から約21.8mの地点で南北長3.4mの混貝土層となっており、10層に細分される。第10-3～8層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

第8・9・11・14・15層は厚さ5～42cmで砂ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み微量の貝を含む黒褐色土で，堆積範囲が比較的広い。

北側の第9・15層を掘り込んでいる第18・19層は堅穴住居跡覆土と考えられる。第18層は粘土ブロックを含む混貝率30%，貝の破碎率5%の明褐色土であり，貝種はヤマトシジミだけである。第19層は焼土粒子を含む混貝率10%，貝の破碎率5%の黒褐色土であり，貝種はヤマトシジミ90%のほかハマグリ，オキシジミが検出されている。土器は，加曽利B式から安行1・2式までが確認され，加曽利B式土器が主体である。第20層はローム粒子を少量含む褐色土で，地山の上にブロック状に堆積しており，住居跡に伴う周堤痕跡と考えられる。

トレンチ土層解説 (各トレンチ共通)

- | | | | |
|-------|------------------------------------|--------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
(混貝率5%) | 10 黒褐色 | 砂ブロック微量 (混貝率0.5%) |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
(混貝率1%) | 11 黒褐色 | 砂ブロック少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率0.1%) |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 (混貝率10%) | 12 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 焼土粒子・砂ブロック微量 (混貝率1～5%) | 13 暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 5 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子微量 (混貝率1%) | 14 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量 |
| 6 黒褐色 | 焼土粒子微量 (混貝率0.1%) | 15 黒褐色 | 砂粒少量，ローム粒子・焼土粒子微量 |
| 7 暗褐色 | ローム粒子少量，砂ブロック・炭化粒子微量 (混貝率1%) | 16 浅黄色 | 粘土粒子・砂粒中量 |
| 8 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 17 褐色 | 粘土ブロック・砂粒少量 |
| 9 暗褐色 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量
(混貝率0.2%) | 18 明褐色 | 粘土ブロック少量 (混貝率30%) |
| | | 19 黒褐色 | 焼土粒子少量 (混貝率10%) |
| | | 20 褐色 | ローム粒子少量 |

第1号トレンチ 3層

混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
1	7 ヤマトシジミ	100	3	平坦	14	15 ヤマトシジミ	100	2～3	北斜位 平坦
2	7 ヤマトシジミ	100	2～3	平坦	15	15 ヤマトシジミ	100	3	垂直
3	15 ヤマトシジミ	100	3	平坦 北斜位	16	7 ヤマトシジミ	100	3	垂直
4	15 ヤマトシジミ	100	3	平坦 垂直	17	15 ヤマトシジミ	100	3	北斜位 平坦
5	7 ヤマトシジミ・ハマグリ	80・20	3	平坦	18	7 ヤマトシジミ	100	1～2	南斜位
6	7 ヤマトシジミ	100	3	北斜位	19	5 ヤマトシジミ	100	2	平坦
7	10 ヤマトシジミ	100	3	平坦 北上斜位	20	15 ヤマトシジミ	100	3	北斜位
8	15 ヤマトシジミ	100	3	南斜位	21	20 ヤマトシジミ	100	2～3	北斜位
9	20 ヤマトシジミ	100	3	南斜位	22	20 ヤマトシジミ	100	3	北斜位
10	5 ヤマトシジミ	100	1	垂直	23	10 ヤマトシジミ	100	3	北斜位
11	2 ヤマトシジミ	100	2	北斜位	24	10 ヤマトシジミ	100	2	北斜位
12	20 ヤマトシジミ	100	2～3	南斜位 平坦	25	20 ヤマトシジミ	100	3	南斜位 垂直
13	20 ヤマトシジミ	100	3	南斜位 平坦	26	15 ヤマトシジミ	100	3	南斜位

第1号トレンチ 4層

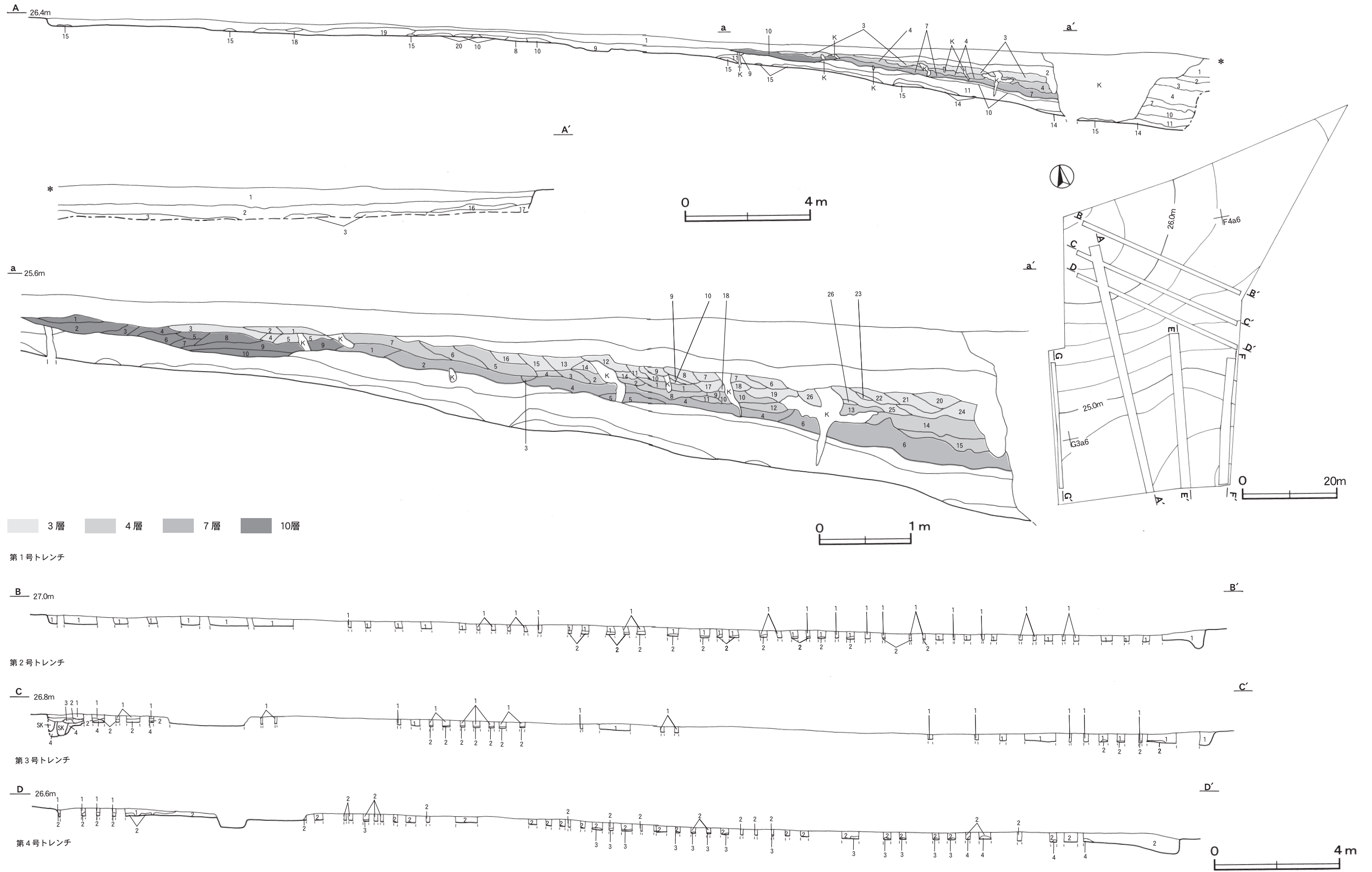
混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
1	1 ヤマトシジミ	100	3	平坦	9	1 ヤマトシジミ	100	細片	—
2	1 ヤマトシジミ	100	2～3	平坦	10	1 ヤマトシジミ	100	細片	北斜位
3	1 ヤマトシジミ	100	3	平坦 北斜位	11	0 ヤマトシジミ	—	—	—
4	0	—	—	—	12	1 ヤマトシジミ	100	2	平坦
5	1 ヤマトシジミ	100	細片	—	13	5 ヤマトシジミ	100	2	北斜位 平坦
6	1 ヤマトシジミ	100	2	北斜位	14	2 ヤマトシジミ	100	1	北斜位
7	2 ヤマトシジミ	100	2	平坦	15	1 ヤマトシジミ	100	細片	—
8	1 ヤマトシジミ	100	細片	—					

第1号トレンチ 7層

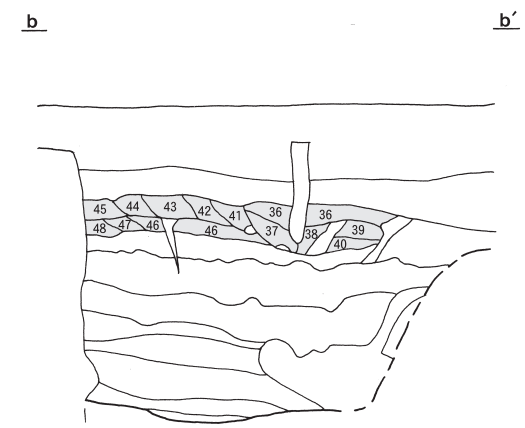
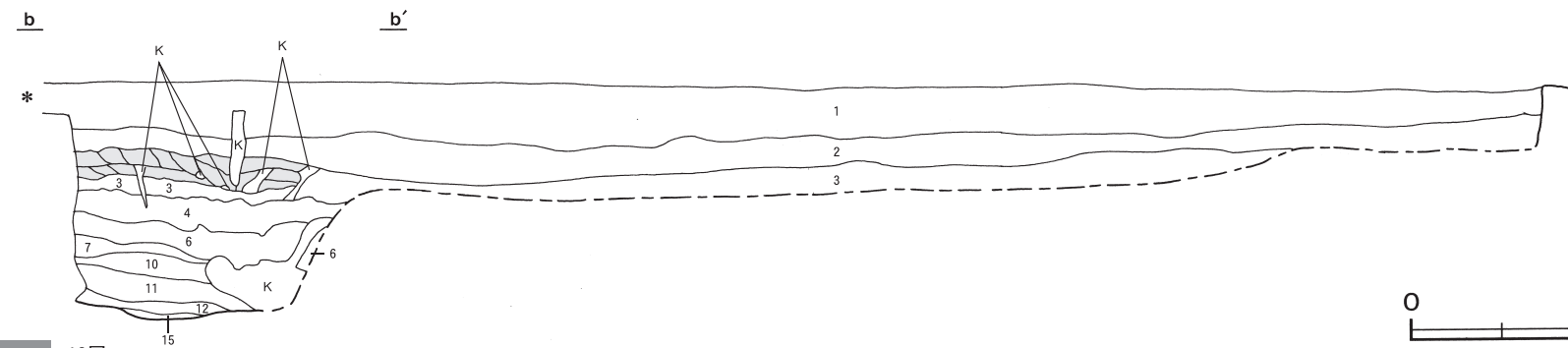
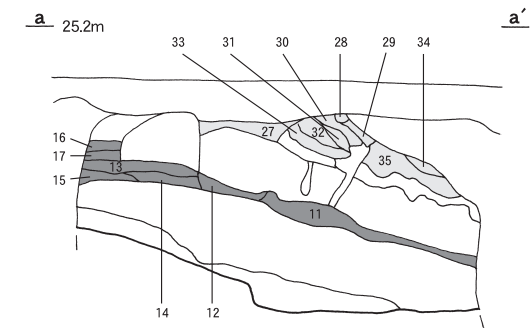
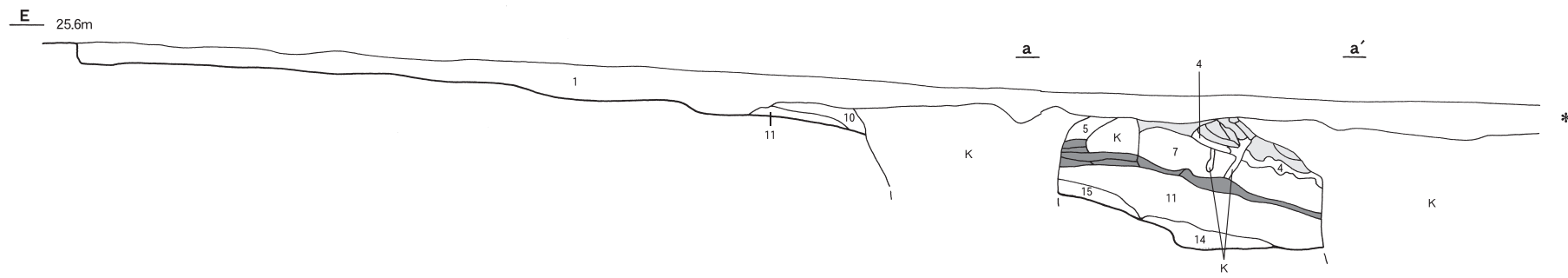
混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
1	1 ヤマトシジミ	100	細片	平坦	4	1 ヤマトシジミ	100	細片	—
2	1 ヤマトシジミ	100	細片	北斜位	5	2 ヤマトシジミ	100	細片	—
3	1 ヤマトシジミ	100	細片	平坦 垂直	6	1 ヤマトシジミ	100	細片	北斜位 平坦

第1号トレンチ 10層

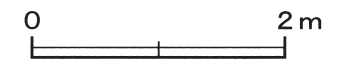
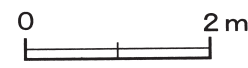
混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
1	7 ヤマトシジミ	100	2	平坦	6	2 ヤマトシジミ	100	3	平坦
2	1 ヤマトシジミ	100	細片	—	7	10 ヤマトシジミ	100	3	垂直 北斜位
3	15 ヤマトシジミ	100	3	—	8	15 ヤマトシジミ	100	2	北斜位 南斜位
4	1～2 ヤマトシジミ	100	細片	—	9	20 ヤマトシジミ	100	2～3	平坦 北斜位
5	7 ヤマトシジミ	100	2	平坦	10	5 ヤマトシジミ	100	2	南斜位



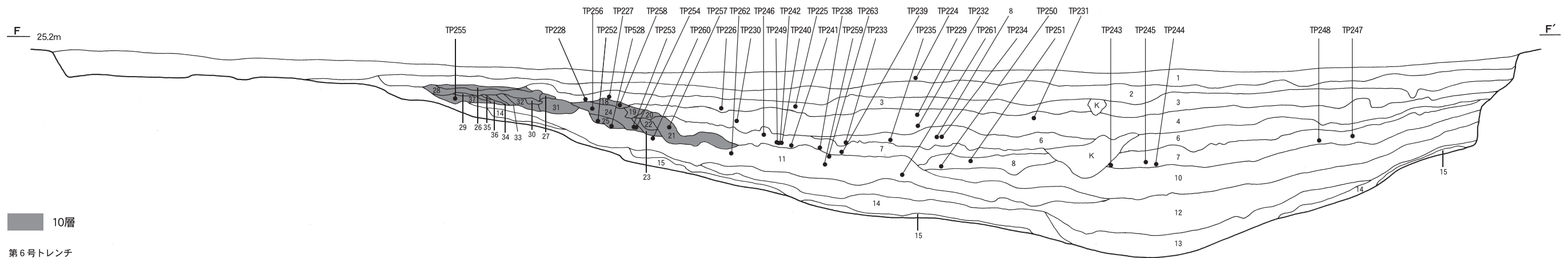
第18図 B区第1～4号トレンチ実測図



3層 10層

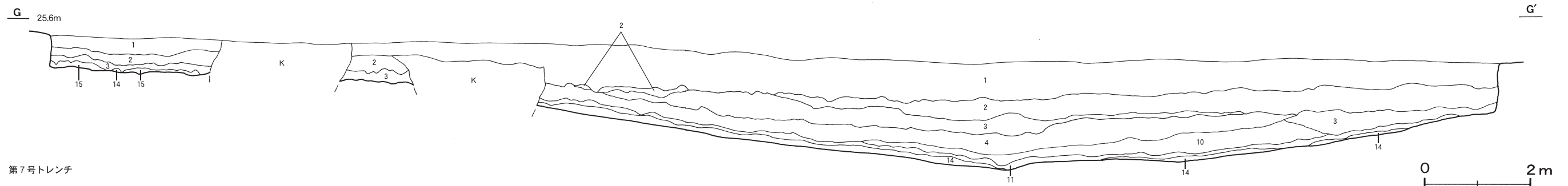


第5号トレンチ

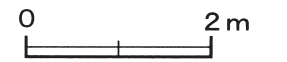


10層

第6号トレンチ



第7号トレンチ



第19図 B区第5～7号トレンチ実測図

第2号トレンチ (第18図)

B区北部のE 3 i8～F 4 e6区に、幅1 m、長さ37.0mのトレンチを東西方向に設定し、深さ20～60cmまで掘り込んだ。土層は2層に分層され、西から東に傾斜する地形に沿って堆積している。

第1・2層は、トレンチャーによって攪乱された耕作土で、1～5%程の貝を含み、層厚は2～10cmである。テストピット1の第4層に相当するソフトローム層上面まで掘り込んだが、遺構や遺物は検出されていない。

第3号トレンチ (第18図)

B区北部のF 3 a8～F 4 f5区に、幅1 m、長さ37.0mのトレンチを東西方向に設定し、深さ15～70cmまで掘り込んだ。土層は4層に分層され、西から東に傾斜する地形に沿って堆積している。

第1・2層は第1号トレンチと共通の土層であり、第3層はローム粒子微量、貝少量(混貝率10%)を含む黒褐色土である。第4層は焼土粒子・砂ブロック微量を含む黒色土である。第2～4層にかけて掘り込まれた土坑が2基確認されている。

第4号トレンチ (第18図)

B区北部のF 3 b8～F 4 g5区に、幅1 m、長さ36.0mのトレンチを東西方向に設定し、深さ10～50cmまで掘り込んだ。土層は4層に分層され、西から東に傾斜する地形に沿って堆積している。第1～4層は、第1号トレンチと共通の土層である。テストピット1の第4層に相当するソフトローム層上面まで掘り込んだが、遺構や遺物は検出されていない。

第5号トレンチ (第19図)

B区西部のF 4 f2～G 4 d1区に、幅1.5m、長さ33.8mのトレンチ南北方向に設定し、深さ20～256cmまで掘り込んだ。土層は高位から流入した土砂による自然堆積の状況を示している。中央部南寄りの南北幅2.8m、深さ200cmの範囲が攪乱されており、堆積状況は一部不明である。

第1・2・4・11層は、第1号トレンチと共通の土層である。第3層は厚さ10～34cmでローム粒子微量、貝少量(混貝率10%)を含む黒褐色の混貝土層である。本層は22層に細分される。貝種はヤマトシジミだけである。混貝率は1～15%で、貝の破碎率が高く、混貝土層内の貝のまとまりはみられない。第5層は、焼土粒子・炭化粒子・貝微量(混貝率1%)を含む暗褐色土である。

第6・7層は谷津部で平坦に堆積している。ローム粒子少量、砂ブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む黒褐色土や暗褐色土で、土器や貝は微量出土し、再堆積層と考えられる。

第10層は厚さ4～28cmで、砂ブロックを微量含む黒褐色土である。北から12.0mの地点で長さ3.2mの混貝土層があり、7層に細分される。貝種はヤマトシジミが主体である。第10～13層でハマグリが確認されているが、他の混貝土層で確認されているのはヤマトシジミだけである。また、第10～14・17層では獣骨が出土している。ほぼ傾斜に沿って堆積する状況を示しており、混貝率は20～30%、殻長は3～5cmであり、貝の破碎率は高い。第10層は高位から流れ込んだ再堆積層と考えられる。

第12層は谷津に傾斜する地形に沿って堆積している。混貝率が低く貝の破碎率も高いこと、また、土層中から遺物が出土していないことから自然堆積層と考えられる。

第14・15層は谷津に傾斜する地形に沿って堆積している。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒を含むし

まりが強い黒色土や黒褐色土である。貝や遺物は含まれず、北と南から支谷へ向かう傾斜に沿って自然堆積している状況を示している。

第5号トレンチ 3層

混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
27	5 ヤマトシジミ	100	1	平坦	38	1 ヤマトシジミ	100	1	南斜位
28	1 ヤマトシジミ	100	1	—	39	2 ヤマトシジミ	100	2	北斜位
29	7 ヤマトシジミ	100	1	—	40	1 ヤマトシジミ	100	1	—
30	2 ヤマトシジミ	100	1	南斜位 北斜位	41	2 ヤマトシジミ	100	1	北斜位
31	5 ヤマトシジミ	100	1	南斜位 北斜位	42	15 ヤマトシジミ	100	1	北斜位 南斜位
32	5 ヤマトシジミ	100	1	北斜位	43	15 ヤマトシジミ	100	1	北斜位 平坦
33	2 ヤマトシジミ	100	1	北斜位	44	15 ヤマトシジミ	100	1	南斜位 北斜位
34	7 ヤマトシジミ	100	1	北斜位	45	10 ヤマトシジミ	100	1	平坦 北斜位
35	2 ヤマトシジミ	100	1	平坦	46	5 ヤマトシジミ	100	1	平坦
36	15 ヤマトシジミ	100	2	北斜位 平坦	47	2 ヤマトシジミ	100	1	平坦
37	2 ヤマトシジミ	100	1	北斜位	48	1 ヤマトシジミ	100	1	—

第5号トレンチ 10層

混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
11	20 ヤマトシジミ	100	3	平坦	15	30 ヤマトシジミ	100	3	平坦 北斜位
12	0 —	—	—	—	16	30 ヤマトシジミ	100	3	南斜位 北斜位
13	30 ヤマトシジミ・ハマグリ	99・1	3・5	平坦 北斜位	17	20 獣骨・ヤマトシジミ	80・20	5・細片	平坦
14	3 獣骨	100	5	北斜位					

第6号トレンチ (第19～21図)

B区東部のF4h4～G4d3区に、幅1.5m、長さ27.0mのトレンチを南北方向に設定し、深さ32～340cmまで掘り込んだ。土層は13層に分層され、傾斜する地形に沿って南・北からの堆積状況を示している。第6号トレンチでは、B区における貝層の形成過程を観察するため、資料の採集を行った。調査方法は、コラムサンプルの定量的な貝層の採集である。サンプルは北から7.8mの地点で表土から25cm下の土層を、40×40cmで厚さ5cmごとに深さ75cmまで採取した。採取した土壌は1～15までサンプル番号をつけ、未分別のまま取り上げた。サンプルは乾燥した後、5mm、3mm、1mm目の篩および水洗選別器を使用し、水洗洗浄、分別、浮遊選別を行い、乾燥した後に重量を計測した。

第1～4層は、第1号トレンチと共通の土層であるが、遺物、獣骨、貝が混在している。遺物は、第1層からTP224、第3層からTP225～TP228、第4層からTP229～TP232がそれぞれ出土しており、後期前葉から後期後葉までの土器が確認され、加曽利B式土器が主体である。

第6～8層は、谷津部でほぼ平坦に堆積している。土色が異なるが、ローム粒子を含む土質は共通で、遺物は縄文時代後期前葉から後期後葉までが出土している。第6層からはP8、TP233～TP235が出土しており、晩期前葉の土器が主体となる。第7層でもTP238～TP249の晩期前葉の土器が主体である。第8層からはTP250・TP251が出土しており、後期後葉の土器が主体である。貝はヤマトシジミが微量出土しているが、破片であることから再堆積層と考えられる。

第10層は厚さ10～52cmで、砂ブロック微量、貝少量（混貝率0.5%）を含む黒褐色の混貝土層である。北側から谷津へ向けて傾斜して堆積している。本層には、北から7～12.8mに2層の混貝土層が認められる。殻長の方向や貝のまとまりなどから20層に細分されるが、全体的に含まれる獣骨や貝は少ない。細分された一部の土層には、獣骨や貝がまったく含まれていないものがある。トレンチ北側は貝がブロック状に堆積しているが、南側は遺物の出土は微量である。北側の混貝土層（第10～26～37層）はヤマトシジミが主体であり、土器も出土している。南側の混貝土層（第10～18～25層）は、獣骨の出土量が多い。遺物はTP252～TP258・TP528で、縄文時代後期前葉から後期後葉までの土器が確認され、後期後半が主体である。混貝率は低く、貝の破砕率は高く、ローム粒子があまり含まれていない。また、土層中に中期から晩期までの土器が混在しており、再堆積層と考えられる。

第11層は厚さ16～60cmで、砂ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み、また貝を微量含む黒褐色土である。北側から谷津に傾斜して堆積しており、自然堆積層と考えられる。遺物はTP259～TP263が出土している。

第12・14・15層は前述した第5号トレンチと共通の土層である。

第13層は層厚12～42cmのローム粒子を微量含む暗褐色土で、粘性は強く締まりは普通である。貝や遺物は検出されず、南・北から支谷に流れ込んだ堆積状況を示している。

第6号トレンチ 10層

混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向	混貝率%	組成	%	大きさ(cm)	堆積方向
18	1 獣骨	100	—	平坦	28	2 ヤマトシジミ	100	3	平坦
19	5 獣骨	100	—	北斜位	29	2 ヤマトシジミ	100	3	平坦
20	1 獣骨	100	—	平坦	30	0 —	—	—	—
21	2 獣骨	100	—	平坦	31	1 ヤマトシジミ	100	3	平坦
22	0 —	—	—	—	32	1 ヤマトシジミ	100	細片	—
23	0 —	—	—	—	33	2 ヤマトシジミ	100	3	南斜位
24	2 獣骨	100	—	平坦	34	1 ヤマトシジミ	100	3	北斜位
25	0 —	—	—	—	35	1 ヤマトシジミ	100	2	北斜位
26	2 ヤマトシジミ	100	3	平坦	36	3 ヤマトシジミ	100	3	南斜位
27	0 —	—	—	—	37	1 ヤマトシジミ	100	3	平坦

第7号トレンチ (第19・70図)

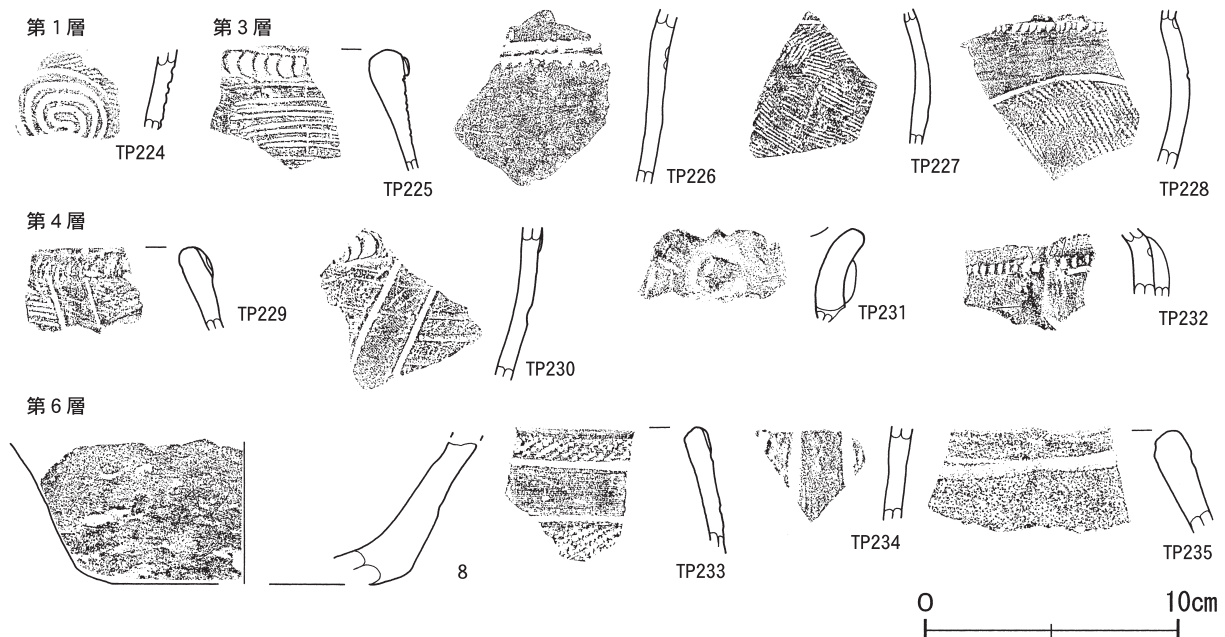
B区西部のF 3 g6～G 4 c5区に、幅1m、長さ26.5mのトレンチを南北方向に設定し、深さ62～198cmまで掘り込んだ。土層は傾斜する地形に沿って南・北から流れ込んで堆積した状況を呈している。

第1～4層は、第1号トレンチと共通の土層である。

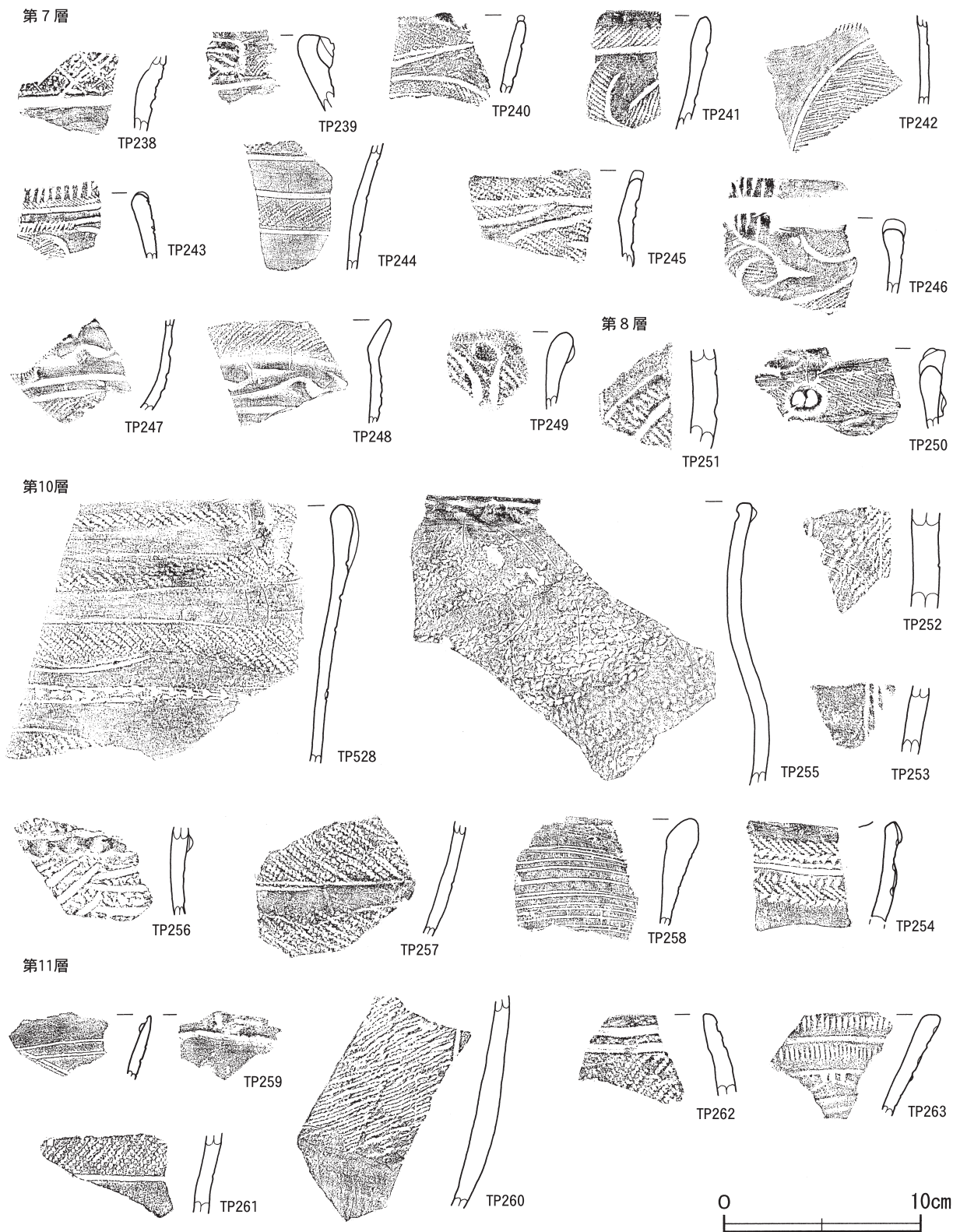
第10層は厚さ6～38cmで、砂ブロック微量、貝少量を含む黒褐色土である。混貝率は低く、破砕率も高いことや土層中から遺物が出土していないことなどから自然堆積層と考えられる。

第11層は厚さ3～14cmで、砂ブロック少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量含み、また貝を微量含む黒褐色土で貝の破砕率は高い。支谷へ流れ込んだ堆積状況を示しており、遺物はQ11 (第70図) の搔器だけが検出されている。

第14・15層は前述した第5号トレンチと共通の土層である。



第20図 B区第6号トレンチ出土遺物実測図(1)



第21図 B区第6号トレンチ出土遺物実測図(2)

B区第6号トレンチ出土遺物観察表(第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
8	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	[13.4]	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	無文	後期後半	第6層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP224	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	渦巻文	堀之内1	第1層	
TP225	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	普通	口縁部に指頭押圧のある隆線文 胴部横位の条線文	安行2粗製	第3層	
TP226	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	2条の刻目帯	後期後半	第3層	
TP227	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒	普通	地文単節縄文 LR	後期後半	第3層	
TP228	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	刻目文 連弧文 磨消縄文 RL	安行1精製	第3層	
TP229	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部に刻目のある紐線文	安行2粗製	第4層	
TP230	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	紐線文に刻目 斜位2条の沈線	安行2粗製	第4層	
TP231	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	普通	貼付文	安行1精製	第4層	
TP232	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	刻目文 貼付文	曾谷精製	第4層	
TP233	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	帯縄文 沈線区画帯無文	曾谷精製	第6層	
TP234	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	2条の沈線文 刺突文	称名寺2	第6層	
TP235	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	沈線文	安行3a精製	第6層	
TP238	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	地文単節縄文 LR 斜格子目文	加曾利B2精製	第7層	
TP239	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	縄文帯 刻目のある貼付文	安行2粗製	第7層	
TP240	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	弧状沈線文 磨消縄文	安行3b精製	第7層	
TP241	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	暗赤褐	普通	口唇部単節縄文 LR 磨消縄文 沈線文	安行3a精製	第7層	
TP242	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	弧線文 細密沈線文	安行3b精製	第7層	
TP243	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	刻目文 弧線文 細密沈線文	安行3b精製	第7層	
TP244	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	横位に3条の沈線 単節縄文 LR	後期末葉	第7層	東北系 瘤付土器
TP245	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	口唇部に突起 沈線文 単節縄文 LR	安行3a精製	第7層	
TP246	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部に突起 入組三叉文 単節縄文 LR	安行3a精製	第7層	
TP247	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	沈線文 単節縄文 LR	大洞B2	第7層	
TP248	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	三叉文 単節縄文 LR	大洞B2	第7層	
TP249	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	貼付文 単節縄文 RL	安行2精製	第7層	
TP250	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	帯縄文 刻目のある貼付文	安行2精製	第8層	
TP251	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	地文単節縄文 LR	中期末～後期初頭	第8層	
TP252	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	地文単節縄文 RL 沈線文	堀之内1	第10層	
TP253	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	懸垂文	堀之内1	第10層	
TP254	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒	普通	帯縄文	安行1精製	第10層	
TP255	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	地文単節縄文 LR	加曾利B粗製	第10層	
TP256	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	暗赤褐	普通	指頭押圧による刻目のある紐線文 地文単節縄文 LR	加曾利B粗製	第10層	
TP257	縄文土器	深鉢	長石・石英	暗赤褐	普通	単節縄文 RL 沈線区画帯無文	安行1精製	第10層	
TP258	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	横位の条線文	後期粗製	第10層	
TP258	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	帯縄文 沈線による区画帯 貼付文	安行1精製	第10層	
TP259	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	沈線文 口唇部内面に貼付文	堀之内2	第11層	
TP260	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	地文無節縄文 L	後期初頭	第11層	
TP261	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	単節縄文 LR 充填施文	加曾利B1精製	第11層	
TP262	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	黄灰	普通	単節縄文 LR 充填施文 横位2条の沈線文	加曾利B1精製	第11層	
TP263	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	2条の刻文帯 連弧文	後期末葉	第11層	東北系 瘤付土器

2 遺物 (第22~28図, PL 9~11・13・14)

縄文土器片28, 120点が出土している。中期から晩期までの土器が出土しているが、後期中葉から晩期前葉の土器が主体である。他の区の出土量と比較するとB区では加曾利B式土器が多く、細片と底部片を除いた割合で見ると、出土点数の43.6%、重量の45.3%を加曾利B式土器が占めている。破片資料 (TP番号) は、数字番号のみの表記とする。

B区出土土器の点数及び重量

時期	前期		中期		後期							
					称名寺式	堀之内式	加曾利B式					
							精製		粗製			
土器型式	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部
粗・精の別												
出土数			1	65	9	31	8	53	533	1011	954	2684
重量 (kg)			0.03	2.29	0.15	0.68	0.23	1.42	8.61	18.28	18.90	46.16

時期	後期										
	曾谷式				安行1・2式				底部片	細片	総点数 総重量
	精製		粗製		精製		粗製				
土器型式	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部			
粗・精の別											
出土数	1	150			709	227	1259	1541	301	8139	17676
重量 (kg)	0.03	2.72			14.57	4.39	21.80	25.37	9.28	50.61	225.52

時期	晩期											
	安行3a～3d式				前浦式		大洞式		無文土器	底部片	細片	総点数 総重量
	精製		粗製		口辺部	胴部	口辺部	胴部				
土器型式	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部				
粗・精の別												
出土数	215	100	126	1889	8	19	6	1	290	273	7517	10444
重量 (kg)	4.04	1.96	2.87	24.19	0.24	0.36	0.14	0.01	3.38	7.86	39.45	84.50

第Ⅱ群 中期の土器群

A類 阿玉台式 265は突起をもち、隆線文を施文している。

B類 加曾利E式 264は加曾利E1式で、眼鏡状把手である。266は加曾利E3式で、地文が単節縄文RLで3条の沈線文が施文される。

第Ⅲ群 後期の土器群

A類 称名寺式 268は称名寺1式で、沈線文、磨消縄文が施される。267・269～272は称名寺2式である。2条の沈線文を施し、沈線間に刺突文を施すものと、無文のものがある。269は口縁部に沈線文を施している。271・272は刺突文を施し、270は隆帯下に沈線による文様を施している。

B類 堀之内式 274～278は堀之内1式で、沈線による文様をもつ。310は注口土器の吊り手である。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式 280・281・304・306・307・311である。口縁部外面あるいは内面に横位の4～6条の沈線文を施すものが多い。281は充填縄文が施される。280は沈線間にL字文を施文している。307は浅鉢、306は皿、311は注口土器の吊り手である。

C2類 加曾利B2式 P11, 282・283・285である。斜位に沈線文が施文され、282・283の矢羽根状沈線文と285の斜格子目文を施したものがある。P11は隆帯上に刻目を施された鉢である。

C3類 加曾利B3式 P10, 286～290・294～297・299～302・367である。口唇部に刻文帯をもち、口辺部に沈線文、磨消縄文を施し、胴部に弧状の沈線文を施文するものがある。286～288は刻文帯に沈線文を施す。286・287は充填縄文、288は斜位の沈線文を施す。289は刻文帯に単節縄文RLを施文している。290・295は横位の沈線文、294は羽状縄文を施している。P10, 296・297・299～301は胴部に連弧文がある。

C4類 加曾利B式の粗製土器 312～317・320・322・324・325・353である。地文に縄文を施文し、口縁

部に1～2条の指頭押圧をもつ隆線、刻文帯、紐線文を施すものがある。また縦・斜位の沈線文を施すものもある。312～317・322・353は紐線文を施す。312～315は内面に沈線、316・317・353は弧状や斜位の条線文を施している。320は刻文帯と斜位の条線文を施文している。322・324・325は地文が縄文で斜位の条線文を施す。

D類 曾谷式 P22, 305・308・323・326・327・329～331である。口唇部に刻文帯、口辺部に下向の連弧文を施すものがある。329・330は刻文帯、326は連弧文、329は胴部に沈線文が施されている。323・331は粗製土器で条線文を施文している。305・308は浅鉢、P22は口辺部に沈線文を施された鉢である。

E類 安行1・2式

E1類 安行1式 P12～P16, 291・292・303・318・319・332～337である。3～5条の縄文帯に無文の貼付文を施すものが多い。P12の浅鉢や333～335は縄文帯と貼付文、291は入組文を施す。318・319・332は刻文帯をもつ。292・303は東北系の土器である。P13は沈線施文後、単節縄文RLを充填施文された台付鉢である。

E2類 安行2式 P20, 284・338～348・366である。縄文帯と刻目のある貼付文を施すものが多い。284は貼付文と矢羽状沈線文が施されている。338～345・347は縄文帯と刻目のある貼付文、341は沈線による入組文、346は縄文帯に連続刺突文が沿って施文されている。366は蛇行沈線文と稲妻状文様を施されている。P20, 348は異形台付土器である。

E3類 安行1・2式の粗製土器 273・321・349～352・354～360・378である。刻文帯あるいは紐線文を施すものや粘土紐による隆帯がないものがある。また、胴部に縦・斜位の条線文、直線・弧状・「ト」状・蕨手状の沈線文を施すものがある。321・349～351は刻文帯があり、349・350は横・斜位の条線文、355・378は弧状の沈線文をもつ。352・354～357・359・360・378は紐線文と弧状の条線文を施し、356・357・359は縦位の沈線文を施す。358は紐線文がなく、弧状の条線文と縦位の沈線文を施す。

第IV群 晩期の土器群

A類 安行3a～3d式

A1類 安行3a式 293・298・361～363・365である。361は三叉文が施され、293・362・363・365は2条の沈線間に節の細かい縄文が施文されている。

A2類 安行3b式 279・364・368・370・373・376である。沈線間に節の細かい縄文を施文し、沈線による入組文や入組三叉文を施す。また、区画文間に細密沈線文を施すものもある。364は入組文を施す。368・370は細密沈線文を施すいわゆる「姥山式」である。373は沈線による連弧文が施文されている。

A3類 安行3c式 369・372である。369は口縁部に貼付文、胴部に弧線文と玉抱き三叉文を施す。372は沈線文に沿って刺突文が施文されている。

A5類 安行3a～3d式の粗製土器 P21・P23, 379～381・383である。379～381は弧状の条線文、383は無文である。P21・P23は底部片で、P21は網代痕がある。

B類 大洞式

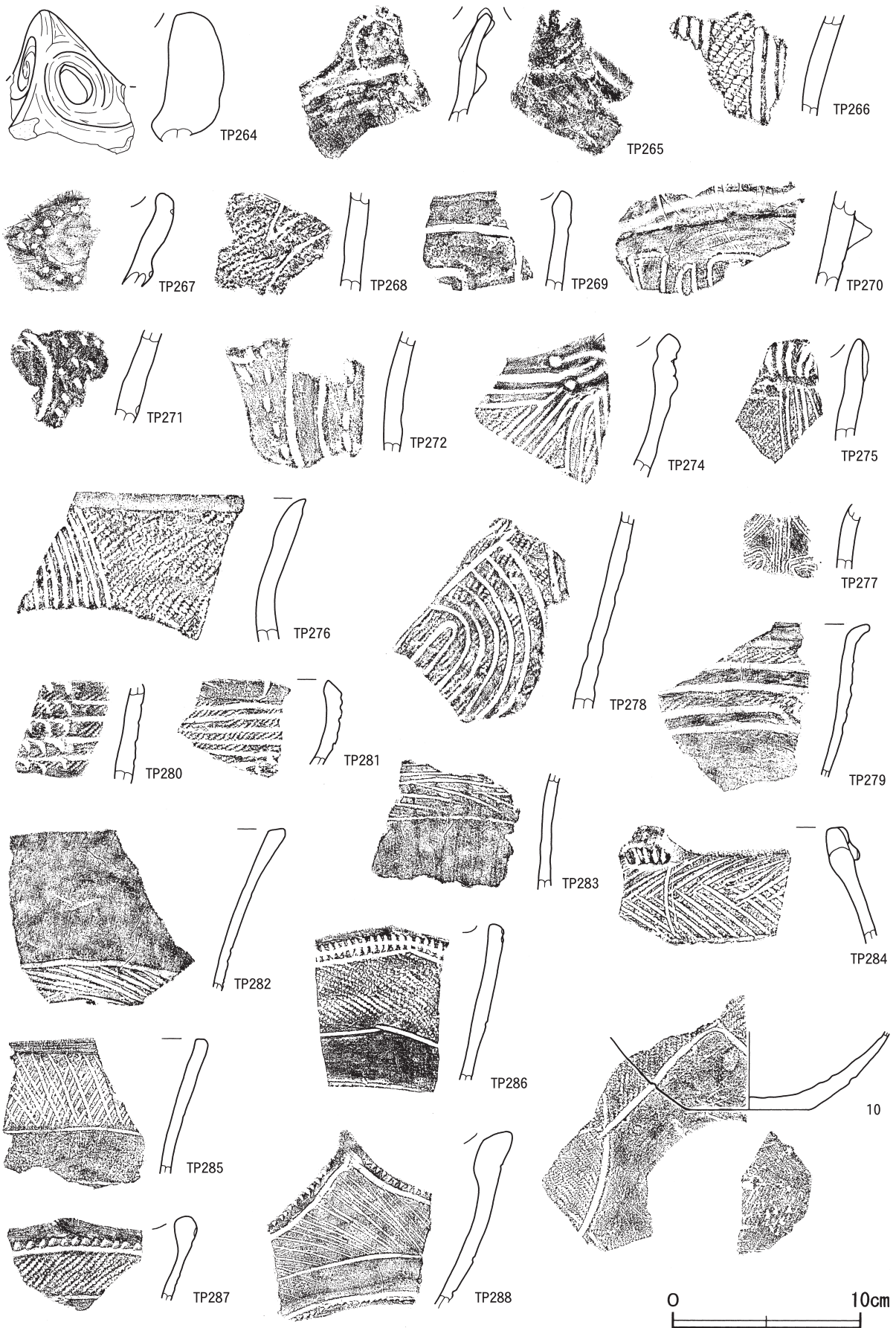
B1類 大洞B式 328は入組文を施文している。

B2類 大洞BC式 P18とP19は雲形文を施した注口土器と壺形土器である。375・382は雲形文を施す。

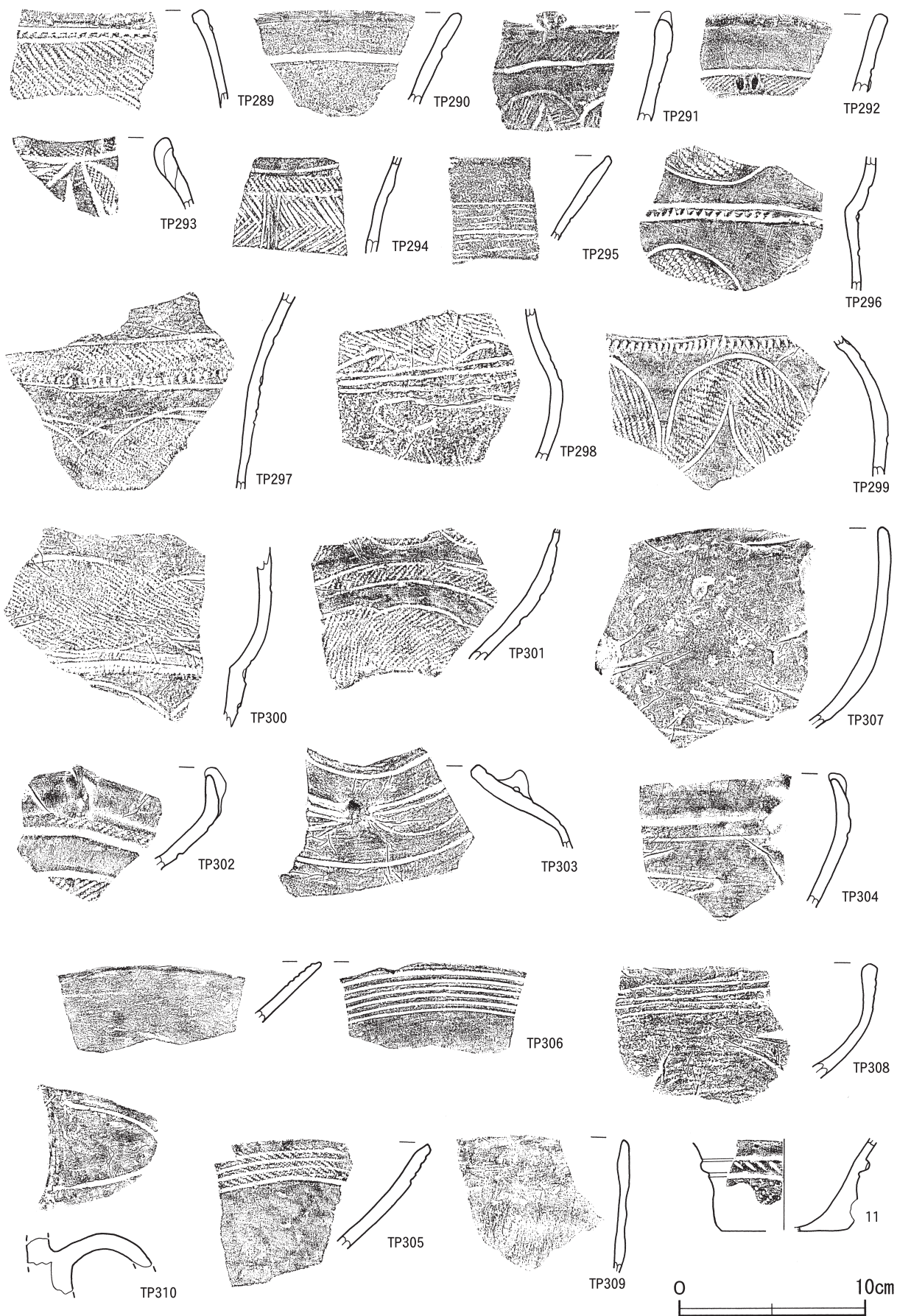
C類 前浦式 371・374・377である。371は口縁部に刺突文を施す壺形土器、374は口縁部に刻目をもち、雲形文を施す。377は波状口縁で幅広の沈線文をもつ。

第V群 その他の土器群

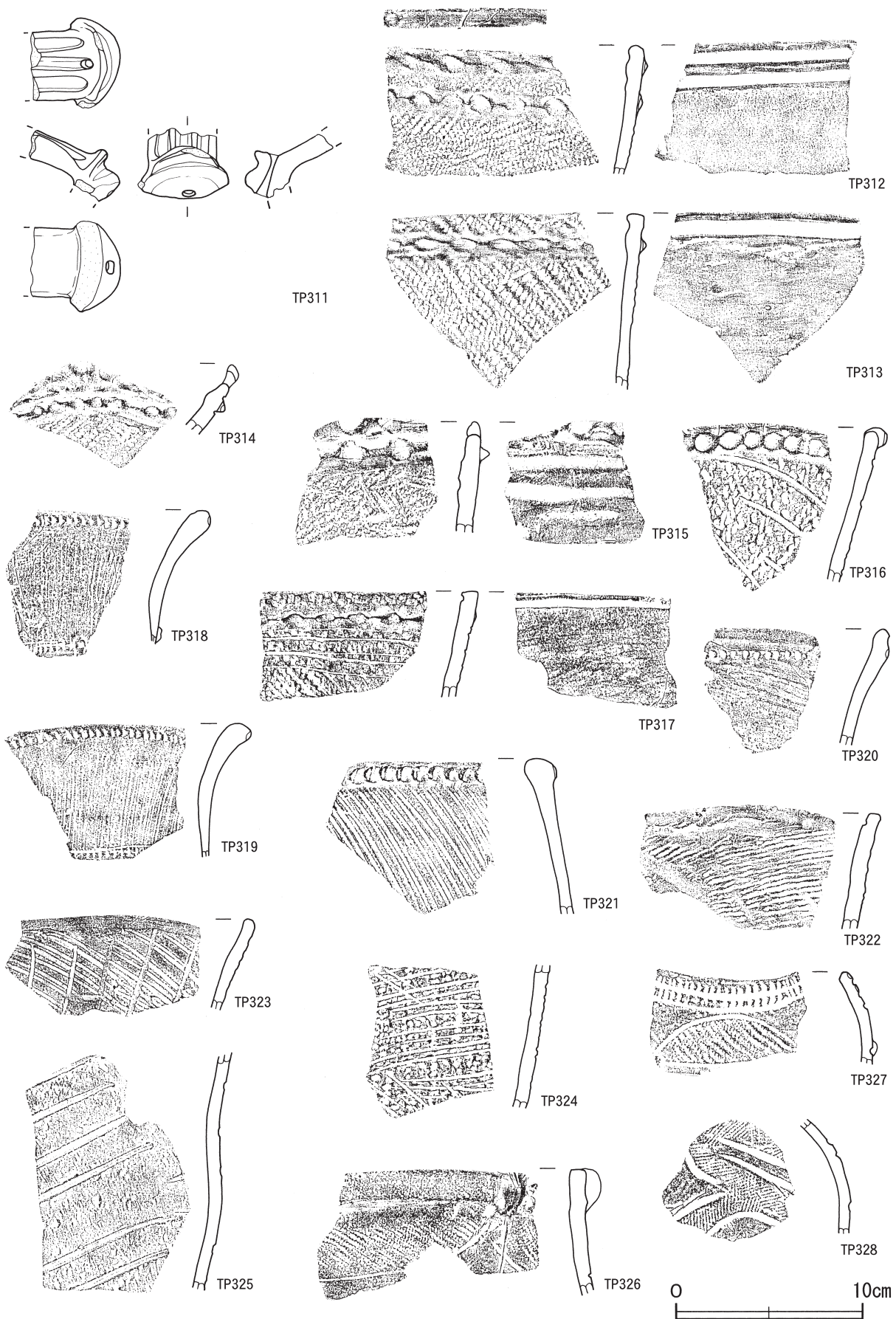
309はミニチュア土器である。384は無文の製塩土器である。



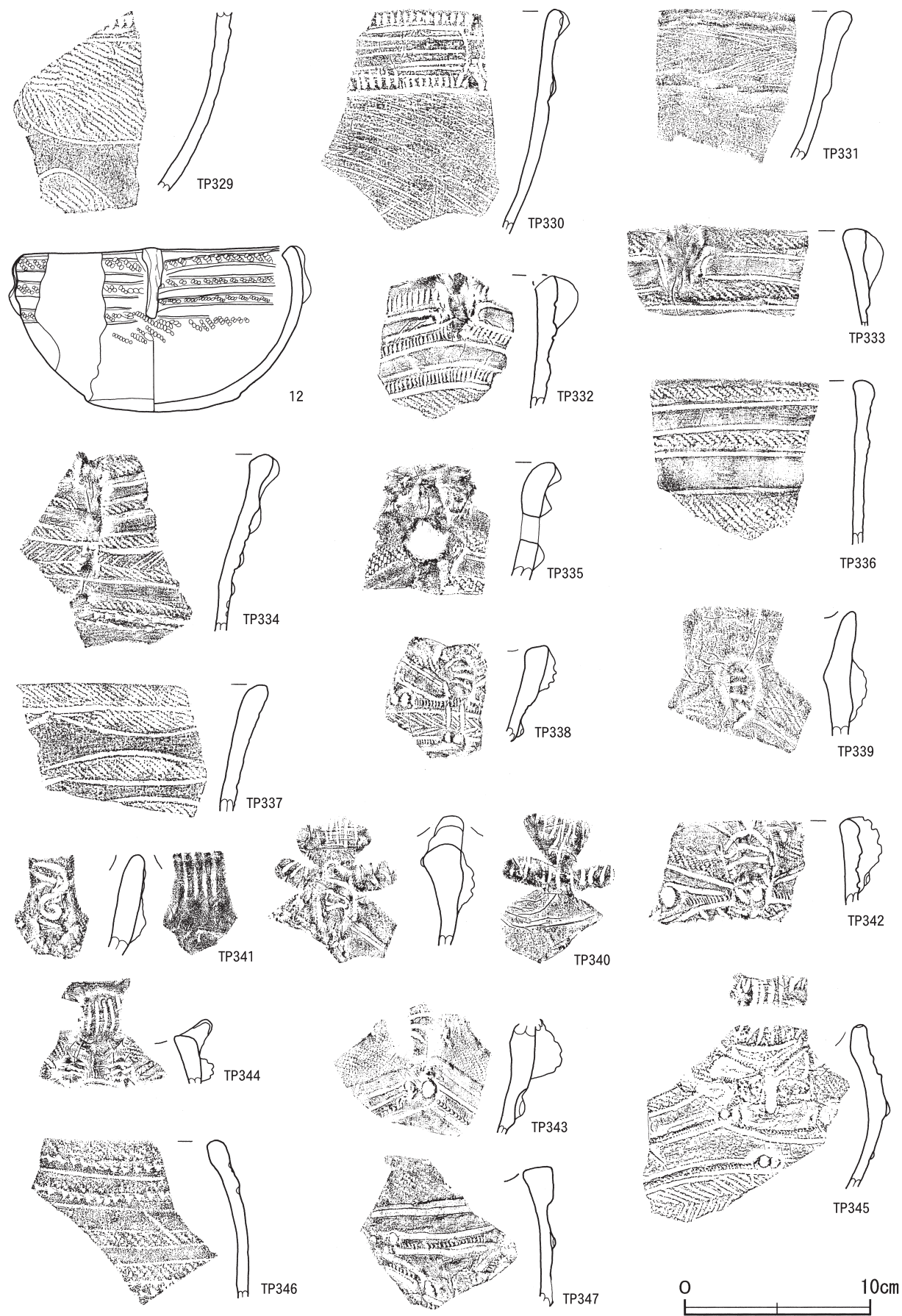
第22図 B区トレンチ出土遺物実測図(1)



第23図 B区トレンチ出土遺物実測図(2)



第24図 B区トレンチ出土遺物実測図(3)



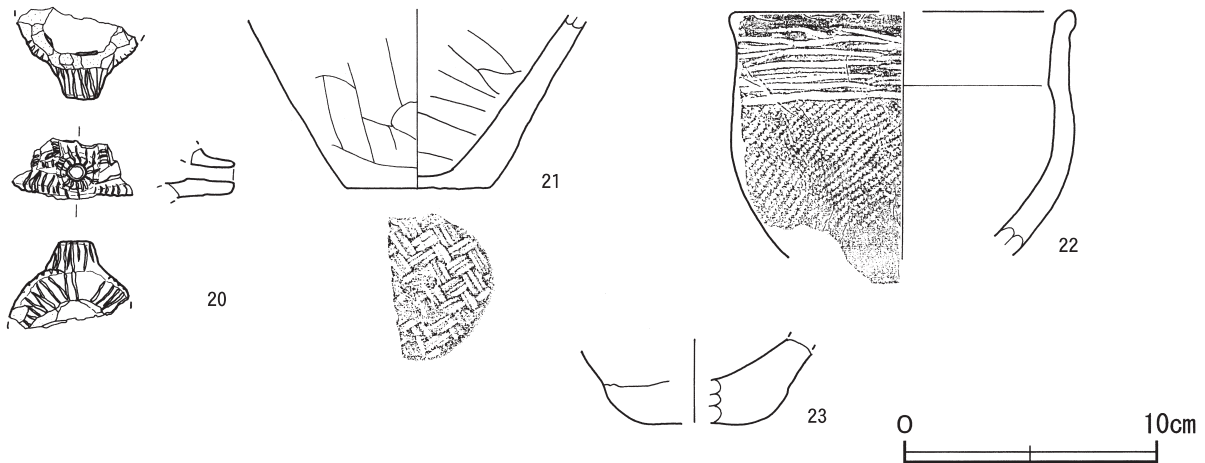
第25図 B区トレンチ出土遺物実測図(4)



第26図 B区トレンチ出土遺物実測図(5)



第27図 B区トレンチ出土遺物実測図(6)



第28図 B区トレンチ出土遺物実測図(7)

第2節 C区の遺構と遺物

C区は標高26mの台地上に位置し、北側は桜川低地へ、南側はB区の小支谷に向かって、ゆるやかに傾斜をしている。遺構確認作業によって、竪穴住居跡、土坑などが確認されたが、調査が完了したのはC区の西側部分だけであり、完了面積1,101㎡である。ここでは、調査が完了した遺構と遺物について記述し、未調査部分の遺構確認状況については全体図に掲載する。

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、陥し穴1基、土坑15基である。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第29図)

位置 調査区北部D 4 b1区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号溝、第43号土坑に掘り込まれている。第2号ピット群のP 4・P 6と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 南東部は調査区域外に延びているため、南北軸5.88m、東西軸は1.90mだけが確認された。平面形は楕円形と推測され、南北軸方向はN-38°-Eである。壁高は24~36cmで、緩やかに立ち上がっている。

床 中央部に向かってやや傾斜しているが、特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 5か所。P 1~P 5は深さ11~22cmで、本跡に伴うピットと考えられるが、明確ではない。

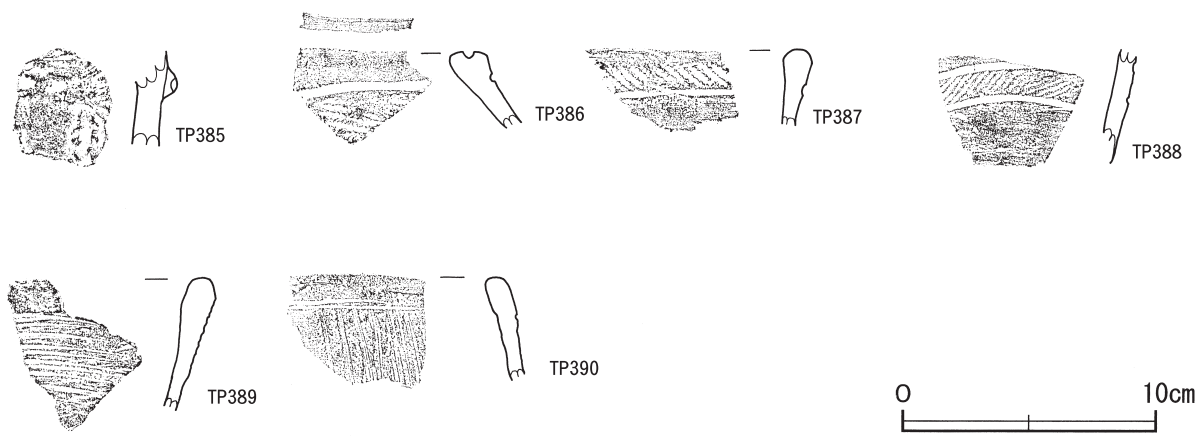
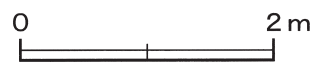
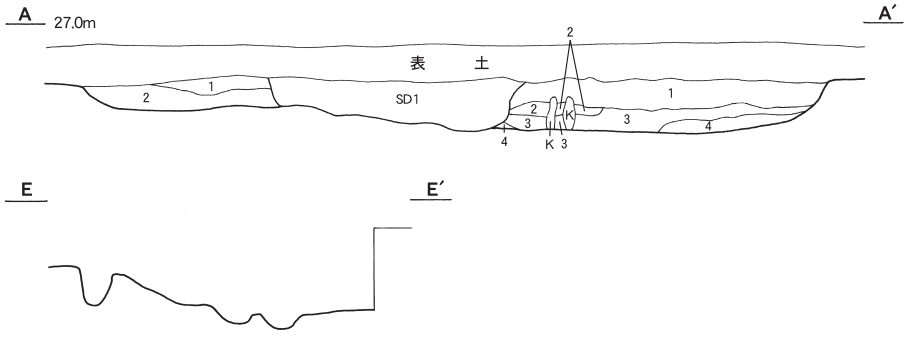
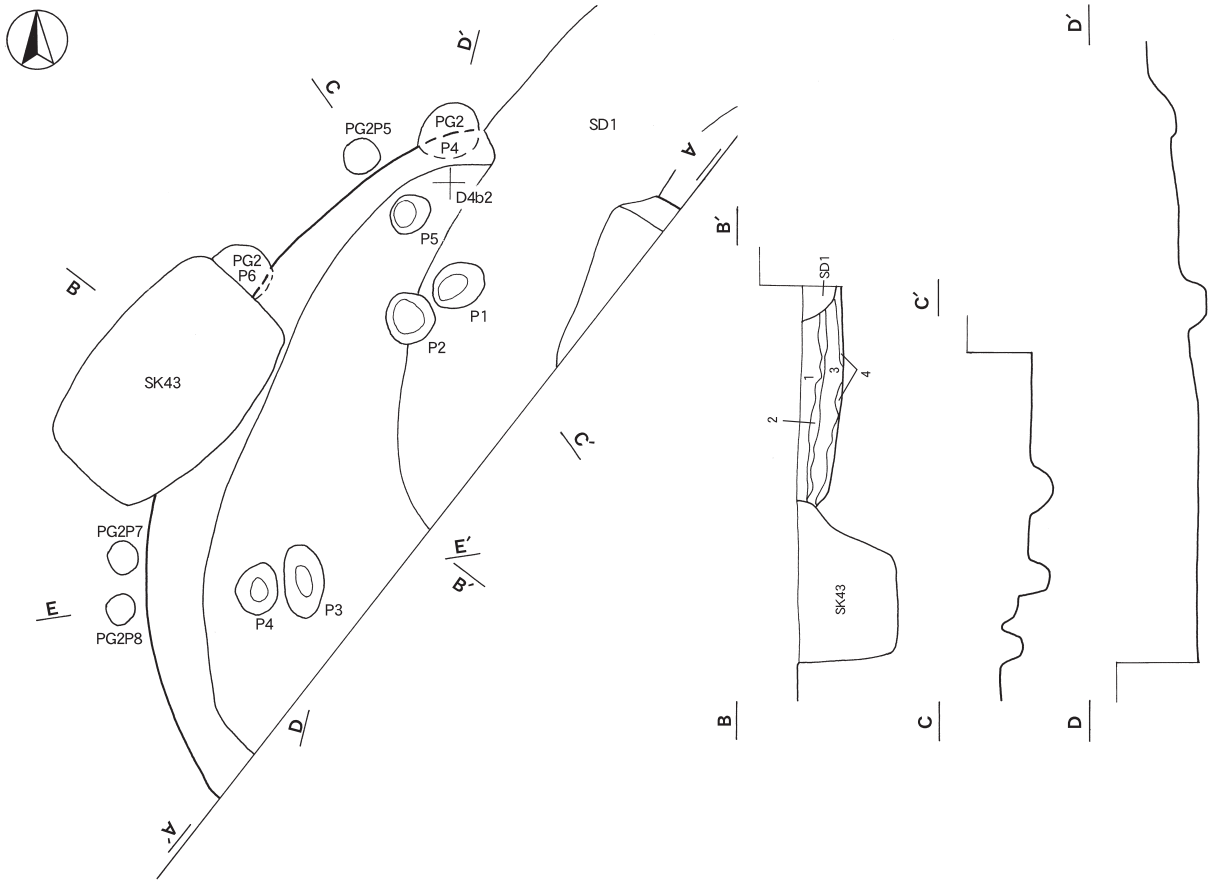
覆土 4層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|-------|-----------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片117点(第Ⅲ群A類4点・C類3点・C 4類49点・E 1類7点、後期細片54点)が覆土中から出土している。土器片はほとんどが細片である。

所見 時期は、C 4類土器が主体に出土していることから縄文時代後期後半と考えられる。



第29图 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP385	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部に隆線の貼付文 懸垂する沈線文	称名寺2	覆土中	
TP386	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	弧状の沈線 単節縄文 RL の充填施文	加曾利B 精製	覆土中	
TP387	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	横位の沈線 口唇部に単節縄文 RL の充填施文	加曾利B 精製	覆土中	
TP388	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明褐	普通	2条の沈線 単節縄文 LR の充填施文	加曾利B 精製	覆土中	
TP389	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	口縁部に弧状の条線文	加曾利B 粗製	覆土中	
TP390	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部に縦位の条線文	安行1 粗製	覆土中	

第2A号住居跡（第30・31図）

位置 調査区中央部D 3g6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2B号住居、第1号井戸、第2号溝、第88・94・95・98・99号土坑に掘り込まれている。第86号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 壁が検出されなかったため、規模及び形状は不明である。覆土の一部と土器埋設ピット、柱穴と考えられるピットが確認されたことから住居跡と判断した。柱穴の配置から平面形は円形もしくは楕円形と推測されるが、明確ではない。

床 残存部は、ほぼ平坦である。特に硬化した部分は認められなかった。

ピット 第2B号住居と含めて、51か所確認された。P1～P5は深さ51～105cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。また、P1・P4・P5からは、後期前葉の土器が出土しており、土器埋設ピット出土土器と同時期のものと考えられる。その他、P16・P20・P23・P26・P29・P30・P39・P40・P47からも後期前葉の土器が出土しており、本跡に帰属するピットの可能性があるが、明確ではない。

土器埋設ピット 北東部の床面を38cm掘り込んで、胴部下半を欠く深鉢が正位で埋設されていた。第94・95号土坑に掘り込まれており、南北径45cm、東西径58cmだけが確認されている。平面形は楕円形と推測される。

土層解説

- 1 暗褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 3 暗褐 色 ロームブロック中量
2 暗褐 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

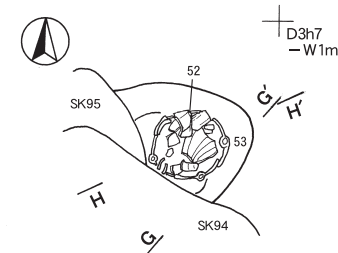
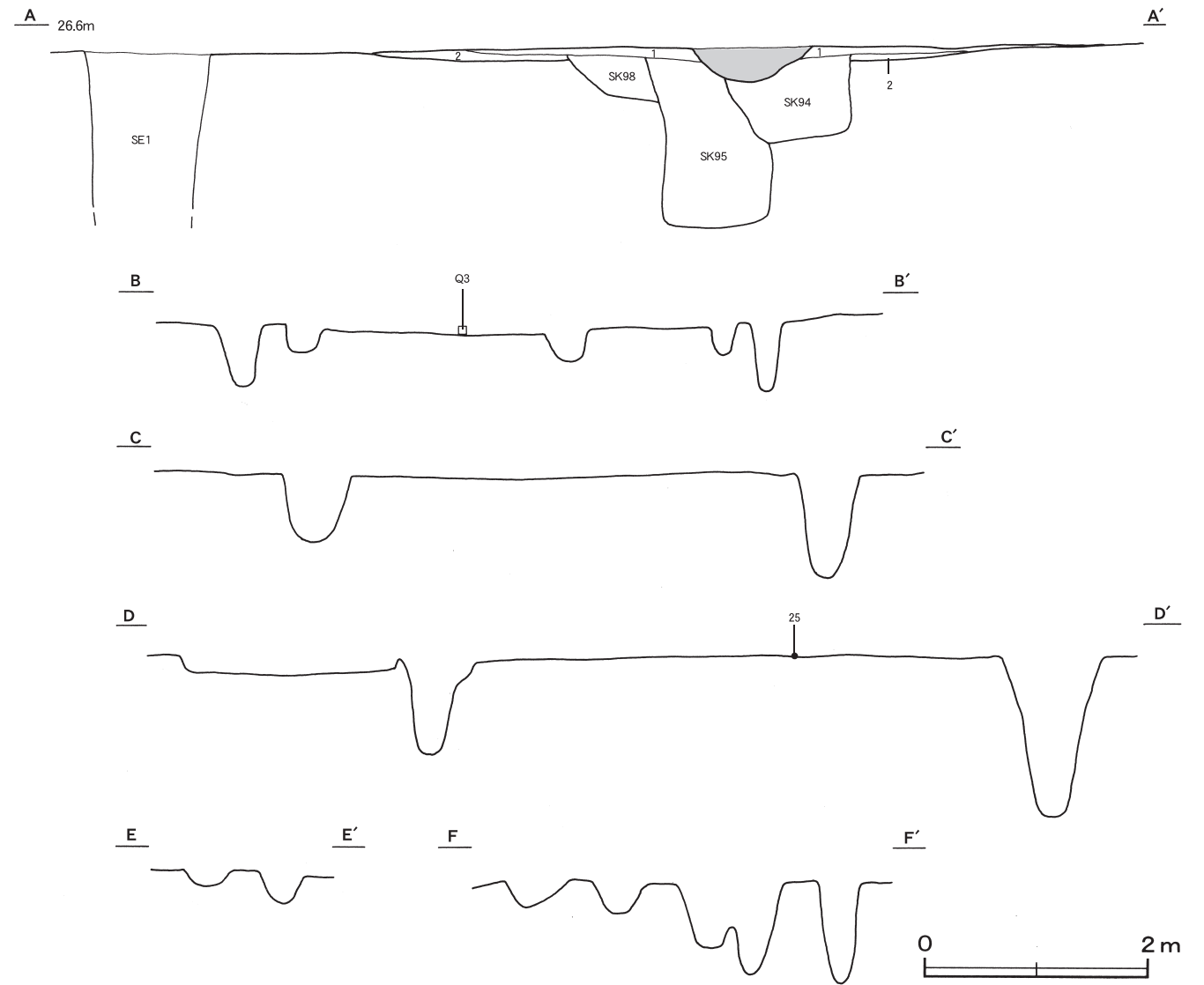
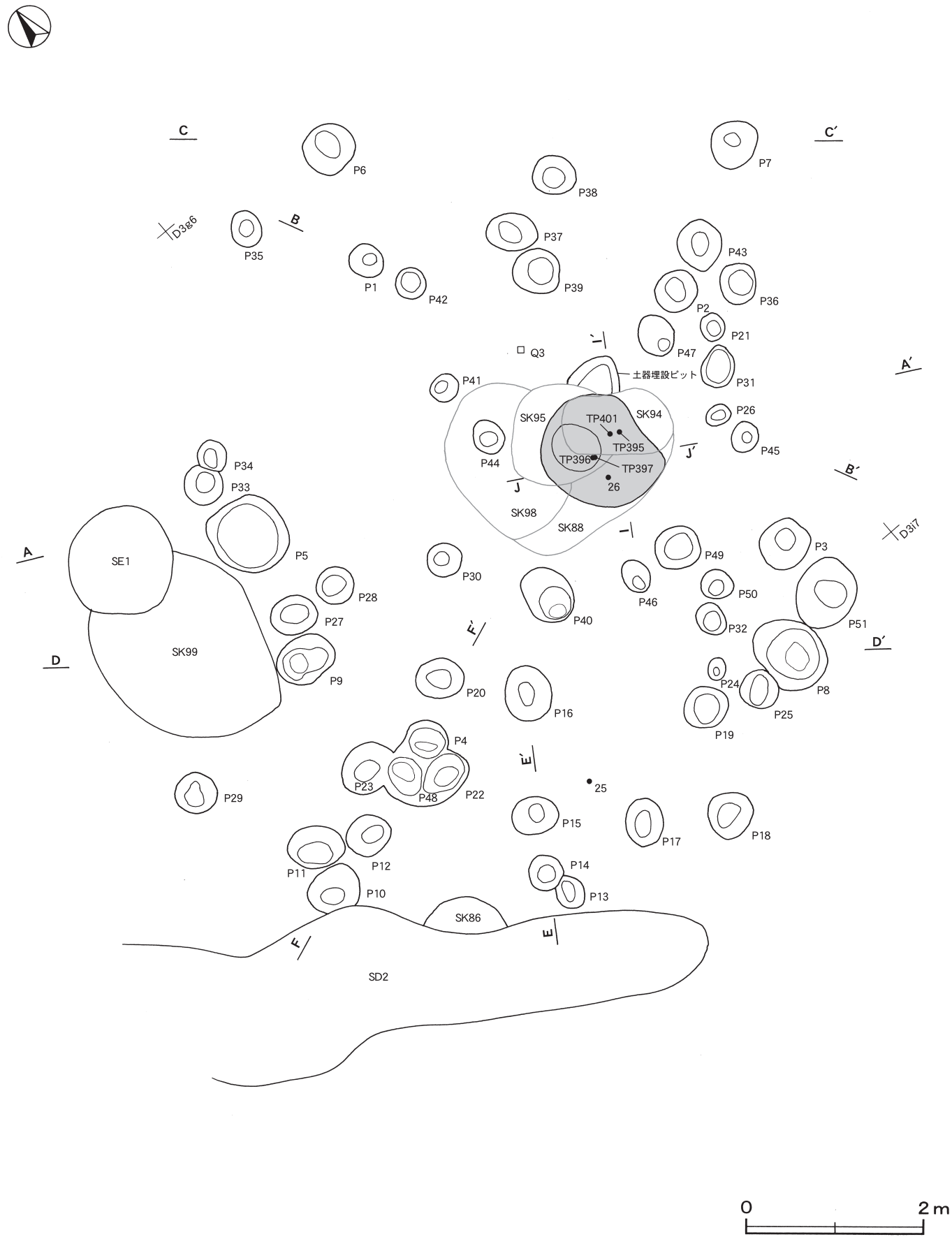
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。第2層が堆積した時点で、第88・94・95・98号土坑に掘り込まれており、これらの土坑が埋没した後に、第1層が堆積したのと考えられる。

土層解説

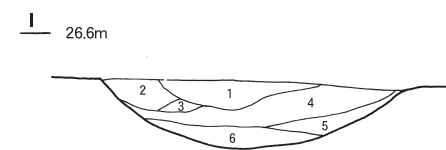
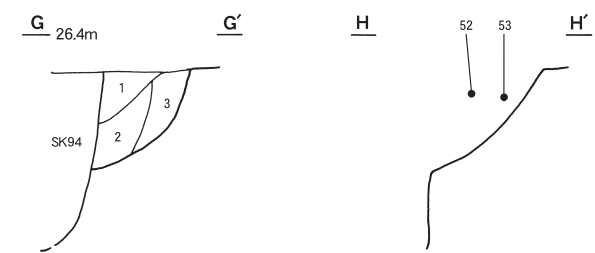
- 1 黒褐 色 ローム粒子微量 2 褐 色 ローム粒子中量

遺物出土状況 第2B号住居と含めて、縄文土器片789点（第Ⅱ群1点、第Ⅲ群A類225点・B類5点・C類2点・E類550点、第Ⅳ群A類4点、第Ⅴ群2点）、石器3点（石皿・磨石・凹石）、剥片26点が出土している。53は土器埋設ピットから正位で出土しており、52の深鉢は53の内側から出土した破片が接合したものである。またTP391・TP392は、P5の覆土中から出土している。Q3は、床面から出土している。

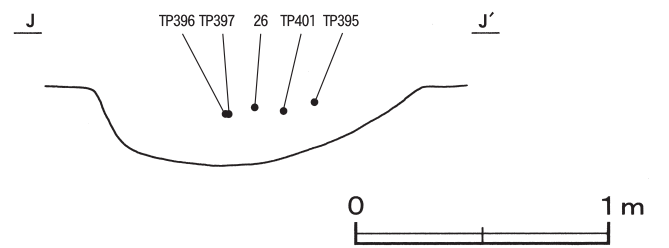
所見 時期は、出土土器から縄文時代後期前葉（称名寺式期）と考えられる。



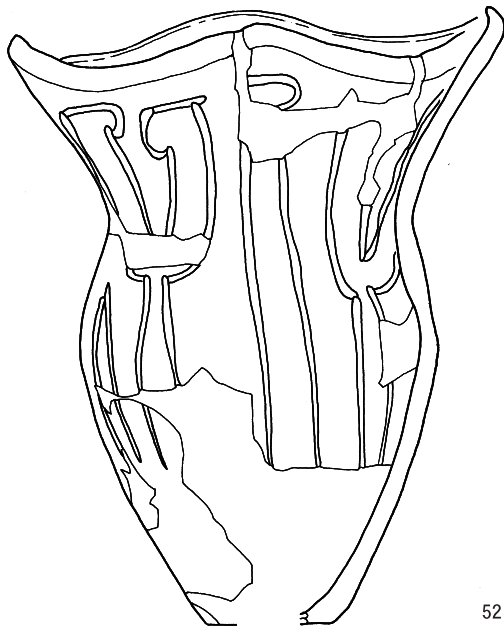
第2 A号住居跡土器埋設ピット



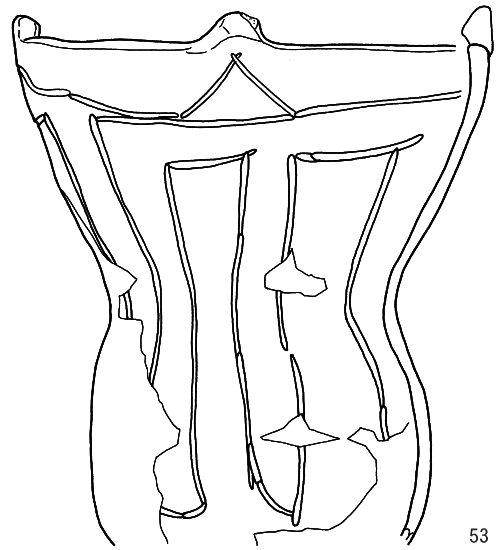
第2 B号住居跡炉



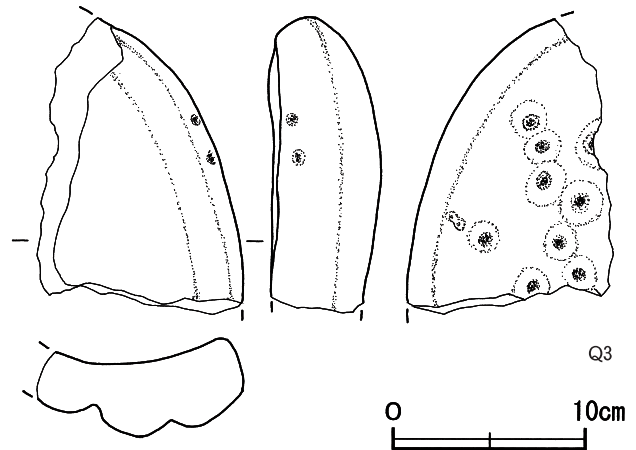
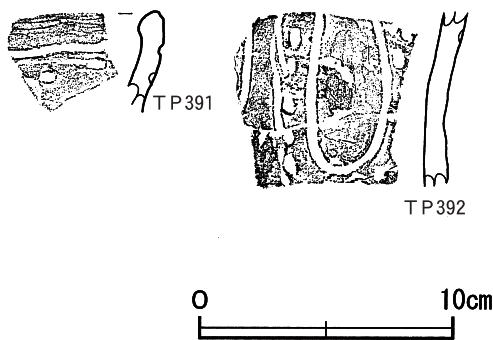
第30図 第2 A・2 B号住居跡実測図



52



53



第31図 第2 A号住居跡出土遺物実測図

第2 A号住居跡出土遺物観察表 (第31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徵	時期	出土位置	備考
52	縄文土器	深鉢	[24.6]	32.2	[6.6]	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	L字・矢印状文の沈線の施文 地文は無文	称名寺2	土器埋設 ピット	60% PL12
53	縄文土器	深鉢	25.0	(27.9)	—	長石・石英・雲母・細礫	黒褐	普通	L字状の沈線の施文 地文は無文	称名寺2	土器埋設 ピット	70% PL12

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徵	時期	出土位置	備考
TP391	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	口縁部横位の沈線文 刺突文	称名寺	P31覆土中	
TP392	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐	普通	沈線文 刺突文	称名寺	P31覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q3	凹石石皿	(15.4)	(10.7)	5.7	(792.0)	安山岩	裏に数個の深い凹みあり	床面	PL17

第2 B号住居跡 (第30・32図)

位置 調査区中央部D 3 g6区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2 A号住居跡と第88・94・95・98号土坑の埋没後に, 本跡が構築されている。第1号井戸, 第2

号溝，第99号土坑に掘り込まれている。第86号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状 確認面が床面であったため，壁は確認されていない。炉と柱穴の配置から住居跡と判断した。平面形は楕円形，もしくは南西側に張り出しているP10～P15を出入り口部と想定すれば柄鏡形と推測されるが，正確な規模及び形状は不明である。

炉 中央部のやや東に位置している。長径140cm，短径124cmの不整楕円形で，床面を32cm掘り込んだ地床炉である。

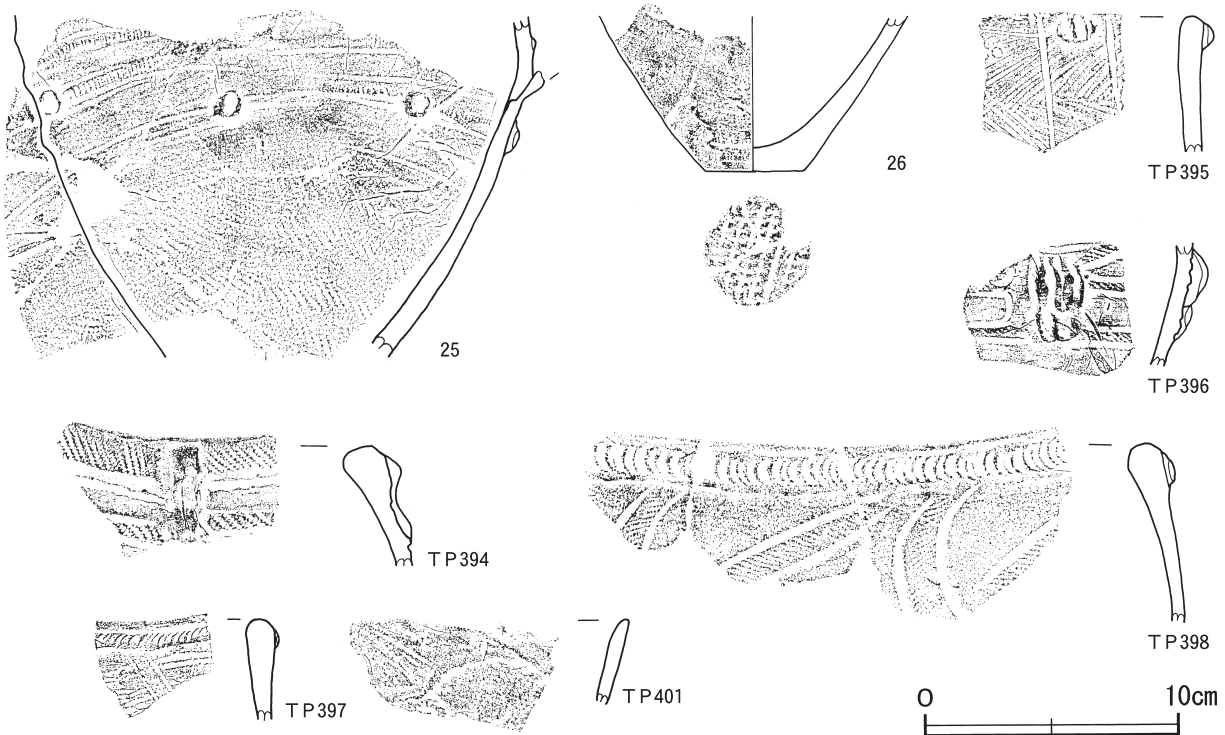
炉土層解説

- | | |
|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量 | 6 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量 | |
| 4 暗赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック中量，炭化粒子微量 | |

ピット P6～P9は深さ56～143cmで，規模と配置から支柱穴と考えられる。P10～P15は深さ14～31cmで，規模と配置から，出入り口施設に伴うピットと考えられるが，明確ではない。P11からは後期後葉の土器が出土しており，その他，P27・P33・P44からも後期後葉の土器が出土していることから，本跡に帰属するピットの可能性も考えられるが，明確ではない。

遺物出土状況 25は床面と判断した確認面から出土している。26・TP395～TP398・TP401は炉の覆土から出土しており，時期決定の指標となる土器である。

所見 本跡は，確認面が床面であり，ほぼ同位置で第2A号住居跡と重複している。本跡の覆土は認められず，土層の切り合いから第2A号住居跡との重複関係は判断できないが，出土土器に時期差があることから，住居2軒の重複と判断した。本跡の時期は，出土土器から縄文時代後期後葉（安行2式期）と考えられる。



第32図 第2B号住居跡出土遺物実測図

第2 B号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
25	縄文土器	注口土器	—	(13.7)	—	長石・石英・雲母	褐	普通	胴部刻目のある隆帯3条貼 り瘤 胴部下部単節縄文RL	安行2 精製	床面	20% PL12
26	縄文土器	深鉢	—	(6.1)	4.0	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	胴部下部無文 底部網代痕	安行2 粗製	炉覆土中	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP394	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母 ・赤色粒子	明赤褐	普通	帯縄文 貼付文	安行1 精製	覆土中	
TP395	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	極暗褐	普通	地文矢羽根状沈線 平行沈線文 刻目のある貼付文	安行2 精製	炉覆土	
TP396	縄文土器	深鉢	長石・雲母	橙	普通	縄文帯 刻目のある貼付文	安行2 精製	炉覆土	
TP397	縄文土器	深鉢	長石・雲母・赤色 粒子	明赤褐	普通	紐線文 横位の条線文 斜位の平行沈線文	後期安 行粗製	炉覆土	
TP398	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	紐線文 地文単節縄文LR 弧状の2条の沈線を施文	後期安 行粗製	炉覆土中	
TP401	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	無文	晩期無文	炉覆土	

表2 縄文時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考 重複関係 (古→新)
								主柱穴	出入口	ピット	炉				
1	D 4 b1	N-38°-E	[楕円形]	(5.88)×(1.90)	24~36	平坦	—	—	—	5	—	人為	縄文土器	後期 後半	本跡→SK43, SD1 PG2P4・P6との 新旧関係は不明
2 A	D 3 g6	—	[楕円形]	—	—	平坦	—	5	—	42	—	—	縄文土器・石 皿・磨石・凹 石・剥片	後期 前葉	本跡→SK88→ SK98→SK95→ SK94→SI2B→ SK99, SE1
2 B	D 3 g6	—	[楕円形]	—	—	平坦	—	4	—	—	1	—	縄文土器・剥 片	後期 後葉	SI2A→SK88→ SK98→SK95→ SK94→本跡→ SK99, SE1

(2) 陥し穴

第1号陥し穴(SK5) (第33・34図)

位置 調査区北部C 3 j0区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.86m, 短軸1.58mの隅丸長方形で, 長軸方向はN-3°-Wである。深さは82cmで, 底面は平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

ピット 1か所。P1は径11cmの円形で, 深さは14cmである。逆茂木を立てた痕跡と考えられる。

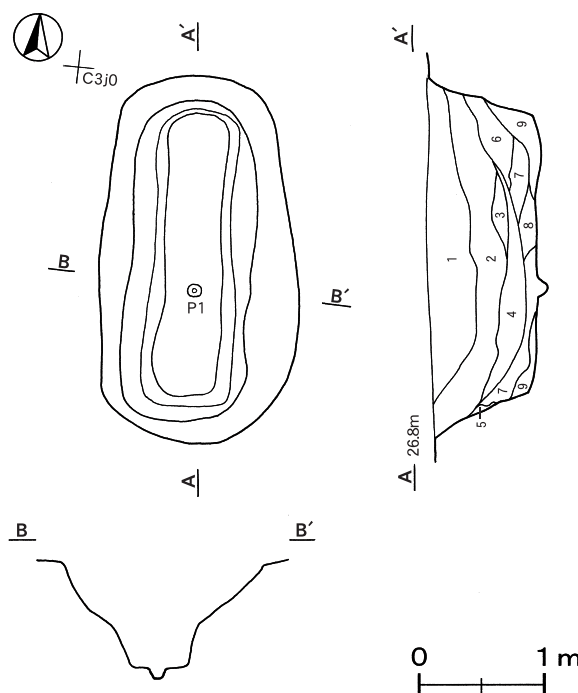
覆土 9層に分層される。第1・2層はレンズ状の堆積状況を示す自然堆積, 第3~9層はブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子中量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量
- 8 褐色 ロームブロック中量
- 9 褐色 ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片38点(第Ⅲ群A類13点・B類10点・E1類5点・E3類10点)が覆土中から出土している。土器片はほとんどが細片である。

所見 時期は, 形状から縄文時代と考えられる。



第33図 第1号陥し穴実測図



第34図 第1号陥し穴出土遺物実測図

第1号陥し穴出土遺物観察表 (第34図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP409	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	2条の沈線文 円形の刺突文	堀之内1	覆土中	
TP410	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	縄文帯	安行1 精製	覆土中	
TP411	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	縄文帯 沈線による区画	安行1 精製	覆土中	

(3) 土坑

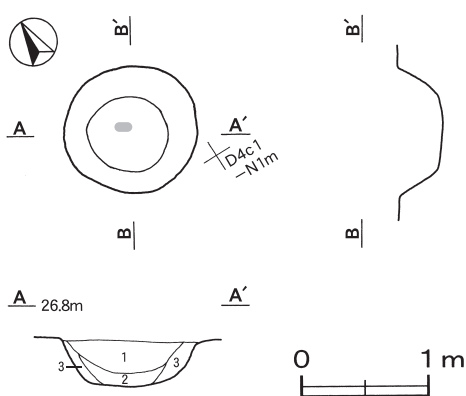
ここでは、平面形や断面形等形状に特徴の見られる土坑と完形に近い土器や獣骨・貝等が出土しているなど出土遺物に特徴のある土坑15基について記述する。

第10号土坑 (第35図)

位置 調査区北部D3b0区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.08mの円形で、深さは34cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。



土層解説
 1 暗褐色 ロームブロック少量
 2 暗褐色 ローム粒子中量
 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 第2層からヤマトシジミ (49.4g) がブロック状にまとまって検出されている。その他の遺物は確認されなかった。

所見 本跡の埋没過程でヤマトシジミが投棄されたものと考えられる。時期は、出土土器がないため明確にできないが、縄文時代と考えられる。

第35図 第10号土坑実測図

第18号土坑 (第36図)

位置 調査区北部D3d0区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.08mの円形で、深さは184cmである。底面は平坦で、壁は直立しているが、下位から中位にかけて若干内傾している。

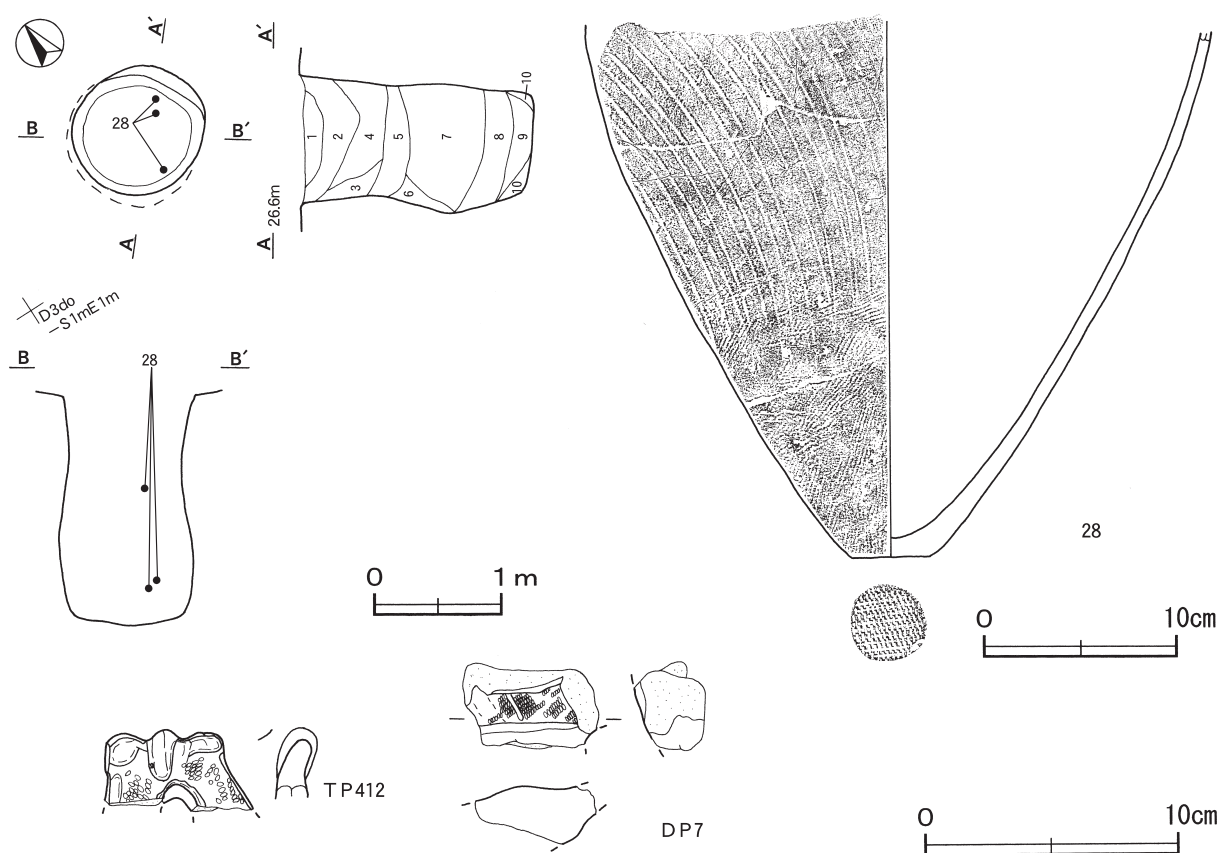
覆土 10層に分層される。上層は、焼土粒子を含む、やや締まった覆土である。中層から下層は、粘土ブロックや黒色土ブロックを含む、締まりの弱い覆土である。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|----------|---------------------|--------|-------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 褐色 | ロームブロック中量, 粘土粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 | 7 暗褐色 | 黒色土ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量 | 8 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子微量 | 10 暗褐色 | ローム粒子中量, 粘土ブロック少量 |

遺物出土状況 縄文土器片148点（第Ⅲ群E 1類3点・E 3類145点）、土製品1点（土偶）が、覆土中層から下層にかけて出土している。28の深鉢は、覆土下層と中層から出土した破片が接合したものである。

所見 本跡の廃絶後、埋め戻される過程で土器が廃棄されたと考えられる。また覆土下層と中層の土器片が接合関係にあることから、短期間に埋め戻されたものと推測される。時期は、出土土器から縄文時代後期後葉（安行1・2式期）と考えられる。



第36図 第18号土坑・出土遺物実測図

第18号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
28	縄文土器	深鉢	—	(28.0)	4.0	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	斜位の条線文 単節縄文 LR 底部網代痕	安行1 粗製	覆土中・下層	40% PL12
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考			
TP412	縄文土器	深鉢	長石・雲母	灰褐	普通	口縁部に貼付文 地文単節縄文 LR	安行1 精製	覆土中				
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考			
DP7	土偶	(3.5)	(5.4)	(2.8)	(35.2)	長石・石英	沈線の施文 縄文 LR の施文 木菟土偶	覆土中				

第50号土坑 (第37図)

位置 調査区南部 E 3 e3区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.24m, 短径0.74mの長楕円形で, 長径方向はN-59°-Eである。深さは22cmで, 底面は皿状である。壁は緩やかに立ち上がっている。

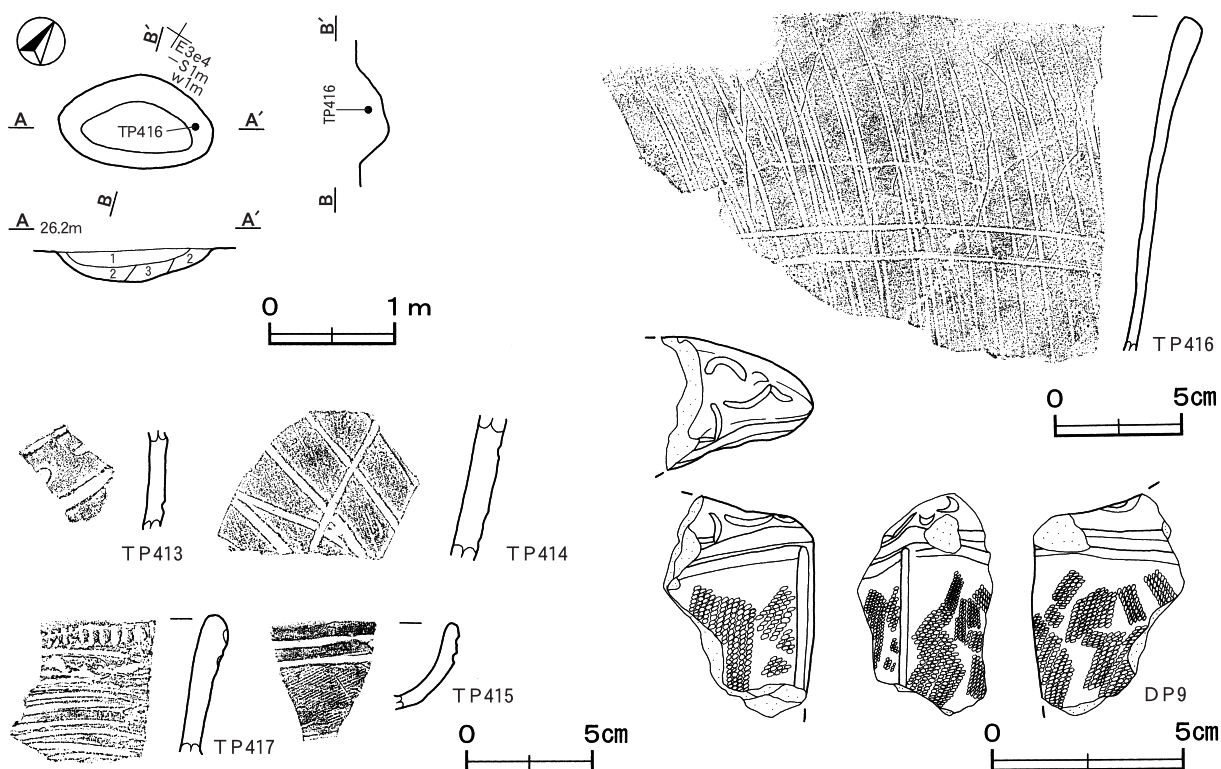
覆土 3層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 縄文土器片48点(第Ⅲ群A類17点・B類1点・C類4点・C4類25点・E3類1点), 土製品1点(土偶)が出土している。TP416は, 東壁際の覆土中層から出土しており, 同位置から同一個体と考えられる土器片が出土しているが, 接合しないため, 図示できたのは一部である。TP413・TP414は本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。また, DP9は覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土土器から縄文時代後期後半と考えられる。



第37図 第50号土坑・出土遺物実測図

第50号土坑出土遺物観察表 (第37図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP413	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	2条の沈線 連続刺突の施文	称名寺	覆土中	
TP414	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通	交叉した斜位の沈線の施文	堀之内	覆土中	
TP415	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	横位2条の沈線を施文 単節縄文LRの施文	加曾利B1精製	覆土中	
TP416	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐色	普通	縦位の条線文 横位2条の沈線	加曾利B粗製	覆土中層	PL11
TP417	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	横位の条線文	後期安行粗製	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP9	土偶	(5.8)	(4.0)	(3.5)	(55.6)	長石・赤色粒子	沈線の施文 縄文RLの施文 木菟土偶	覆土中	

第53号土坑 (第38図)

位置 調査区の北部D 3 g8区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第52号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南北径1.16m, 東西径0.46mだけが確認されており, 平面形は楕円形と推測される。円筒状に掘り込まれており, 深さは200cmで, 底面は平坦である。壁は直立している。

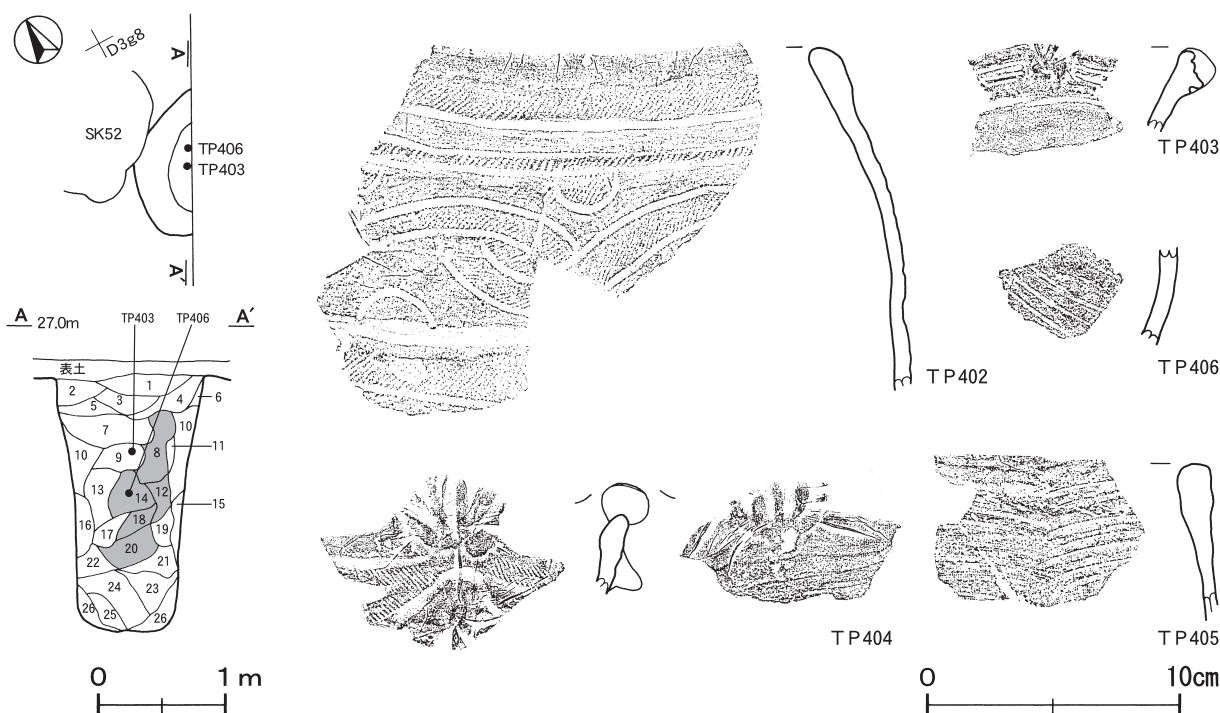
覆土 26層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子微量	14 黒褐色	混貝土層, 炭化粒子少量, ロームブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量	15 褐色	ローム粒子多量
3 黒褐色	焼土ブロック中量, ロームブロック・炭化物微量	16 にぶい黄褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	17 黒褐色	焼土ブロック・炭化物少量, ロームブロック微量
5 暗褐色	焼土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量	18 黒褐色	混貝土層, ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量
6 黒褐色	ローム粒子微量	19 暗褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
7 暗褐色	ロームブロック・炭化物中量, 焼土ブロック少量	20 暗褐色	混貝土層, ロームブロック中量, 焼土ブロック・炭化粒子微量
8 黒褐色	混貝土層, ロームブロック少量, 炭化物・焼土粒子微量	21 黒褐色	炭化物中量, ロームブロック少量
9 黒褐色	ローム粒子中量, 炭化物少量, 焼土粒子微量	22 暗褐色	炭化物中量, ロームブロック・焼土粒子少量
10 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	23 暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物少量
11 褐色	ロームブロック多量	24 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物少量
12 黒褐色	混貝土層, ロームブロック少量, 炭化粒子微量	25 灰黄褐色	灰中量, ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
13 暗褐色	ロームブロック中量, 焼土ブロック少量, 炭化粒子微量	26 褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片194点 (第Ⅲ群C類6点・C4類71点・E類2点・E3類79点, 第Ⅳ群A類2点・A5類34点), 剥片3点が出土している。第8・12・14・18・20層からは貝が検出されており, 貝種はヤマトシジミ (96.1%) がほとんどで, その他ハマグリ (3.8%) ・ヒタチチリメンカワニナ・オオタニシ・ヒダリマキマイマイが若干検出されている。その他, シカ・イノシシ等の獣骨片も検出されている。TP403は第9層から, TP406は第14層の混貝土層から出土している。

所見 本跡の埋没過程で貝や獣骨が投棄されたものと考えられる。出土土器は加曾利B式土器から安行3b式土器までが出土しているが, 土坑内貝層の形成時期は, TP406が伴うことから縄文時代晩期前葉と考えられる。



第38図 第53号土坑・出土遺物実測図

第53号土坑出土遺物観察表（第38図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徵	時期	出土位置	備考
TP402	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	縄文帯 2条の沈線による入組文 単節縄文LRの充填施文	加曾利B3精製	覆土中	PL11
TP403	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	区画状の沈線を施文 貼付文	安行1精製	覆土第9層	
TP404	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	縄文帯に貼付文 突起に刻目の施文	安行2精製	覆土中	
TP405	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	弧状の条線文	後期安行粗製	覆土中	
TP406	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	斜位の条線文	晩期安行粗製	覆土第14層	

第54号土坑（第39～42図）

位置 調査区中央部D 3 i6区，標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.12m，短径1.78mの楕円形で，深さは352cmである。長径方向はN-22°-Eで，底面は皿状を呈し，中央部がさらに43cm掘り込まれている。壁は中位まで直立し，上位は外傾して立ち上がっている。北西部に深さ98cmの円筒状の掘り込みを確認したが，土坑に付属するかどうかは不明である。

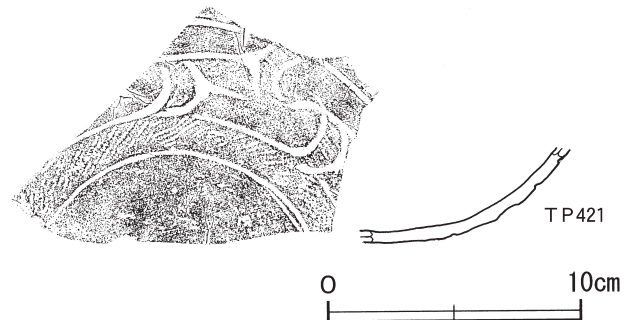
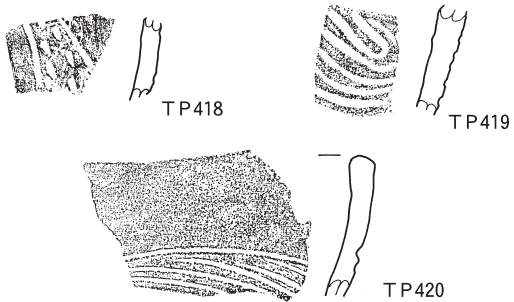
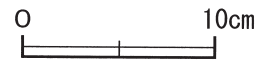
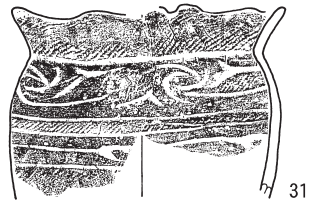
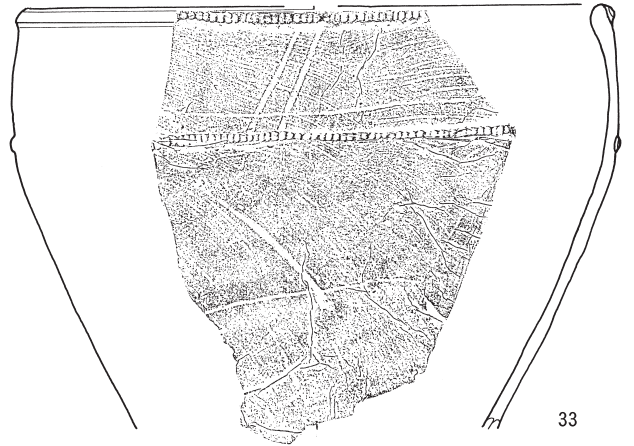
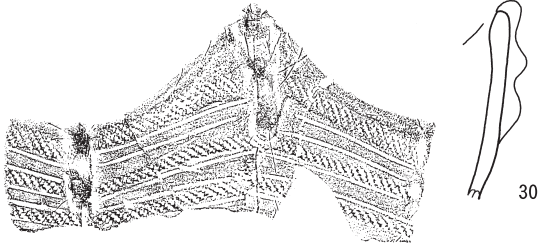
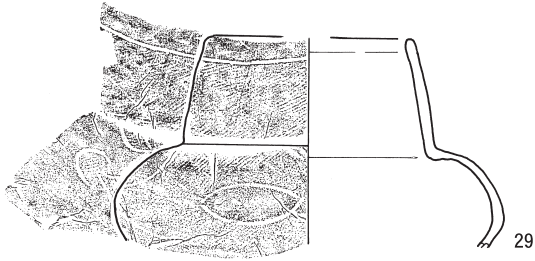
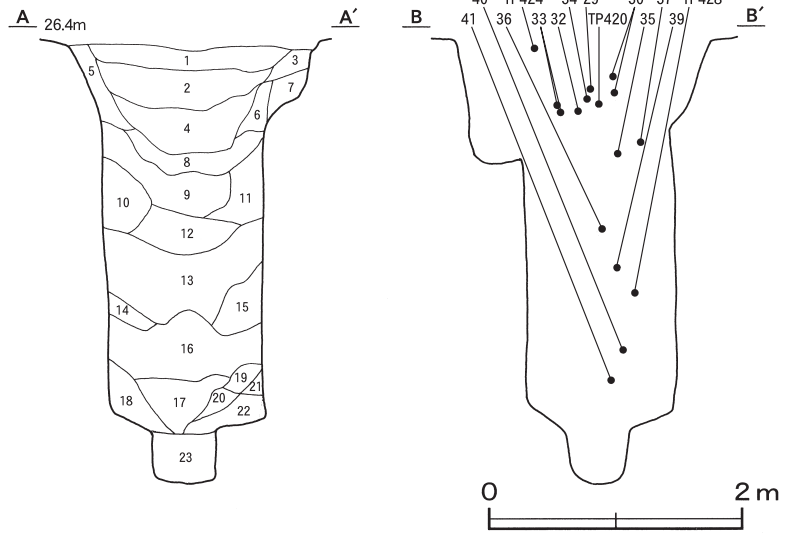
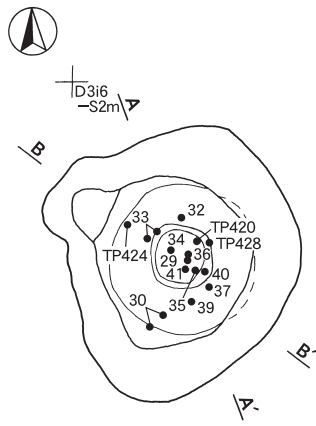
覆土 23層に分層される。上層と比較して，中層から下層は焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子を多く含む締まりの弱い覆土である。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

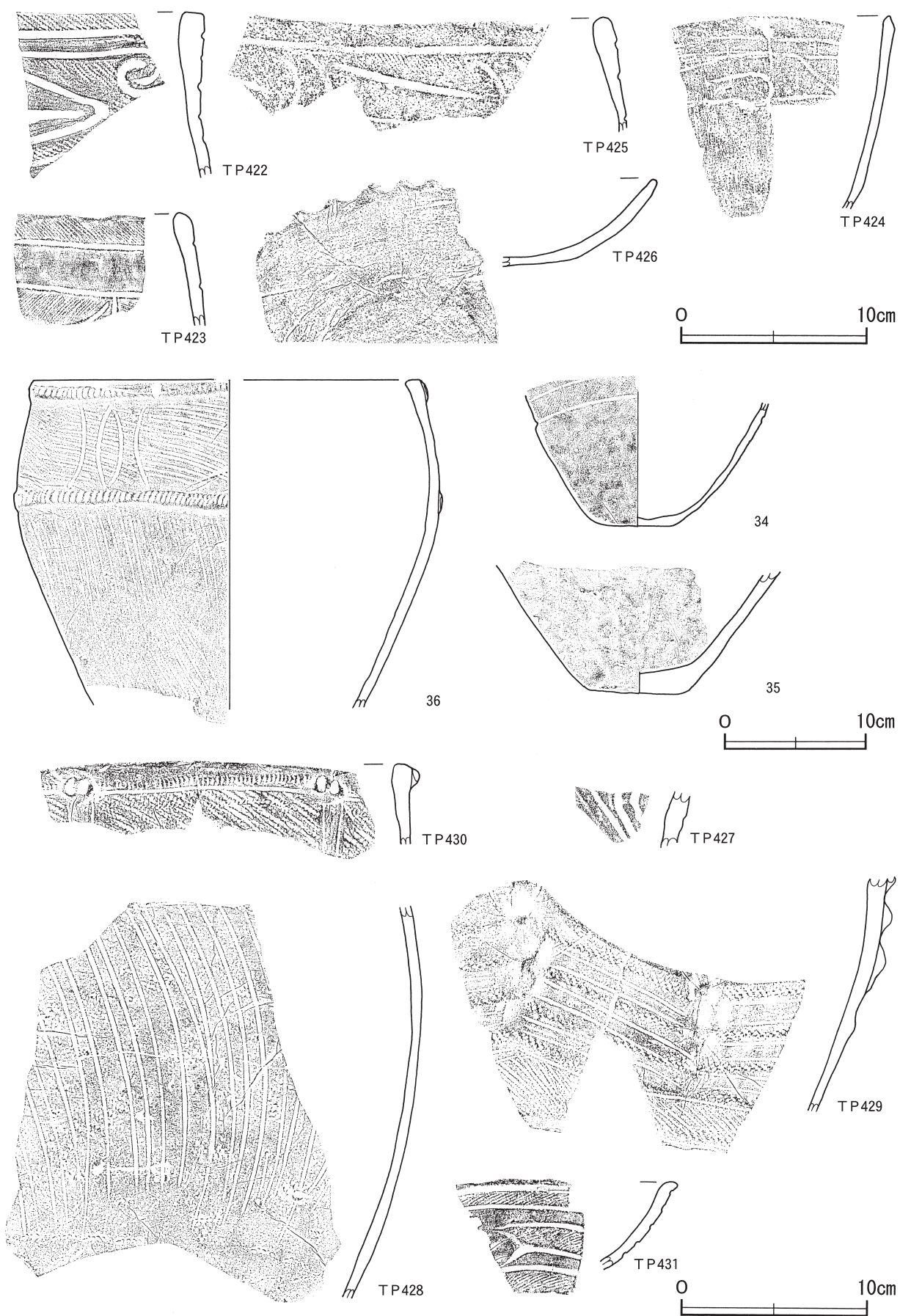
1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	14 暗褐色	ローム粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	15 褐色	ローム粒子中量，炭化粒子微量
3 褐色	ローム粒子中量，黒色土ブロック微量	16 暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量，炭化物微量	17 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量	18 灰黄褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，粘土粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック多量	19 にぶい黄褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
7 褐色	ローム粒子少量	20 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
8 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子微量	21 灰黄褐色	粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
9 暗褐色	ローム粒子少量	22 暗褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック中量	23 黒褐色	粘土粒子中量，炭化粒子少量，ローム粒子微量
11 褐色	ローム粒子中量		
12 暗褐色	炭化物・粘土ブロック・ローム粒子少量，焼土粒子微量		
13 暗褐色	ロームブロック中量，炭化物微量		

遺物出土状況 縄文土器片1,753点（第Ⅲ群A類2点・B類2点・C類188点・C4類119点・E類140点・E3類109点，第Ⅳ群A類22点・A5類56点，第Ⅴ群233点，後期底部片3点，後期細片847点，晩期底部片12点，晩期細片20点），石器1点（磨石），剥片3点が出土している。その他，第1・2・8・9・12・20層からはイノシシ・シカ等の獣骨も出土している。29～34，TP418～TP426は覆土上層から出土している。接合しない破片が多く，廃棄されたような状態で出土している。35～37，TP427～TP431は覆土中層から出土している。37はほぼ完形の浅鉢であり，第8層から正位で出土している。39～41，TP432は覆土下層から出土している。40はほぼ完形の注口土器であり，第16層から斜位で出土している。TP433は，底面付近の第23層から出土している。

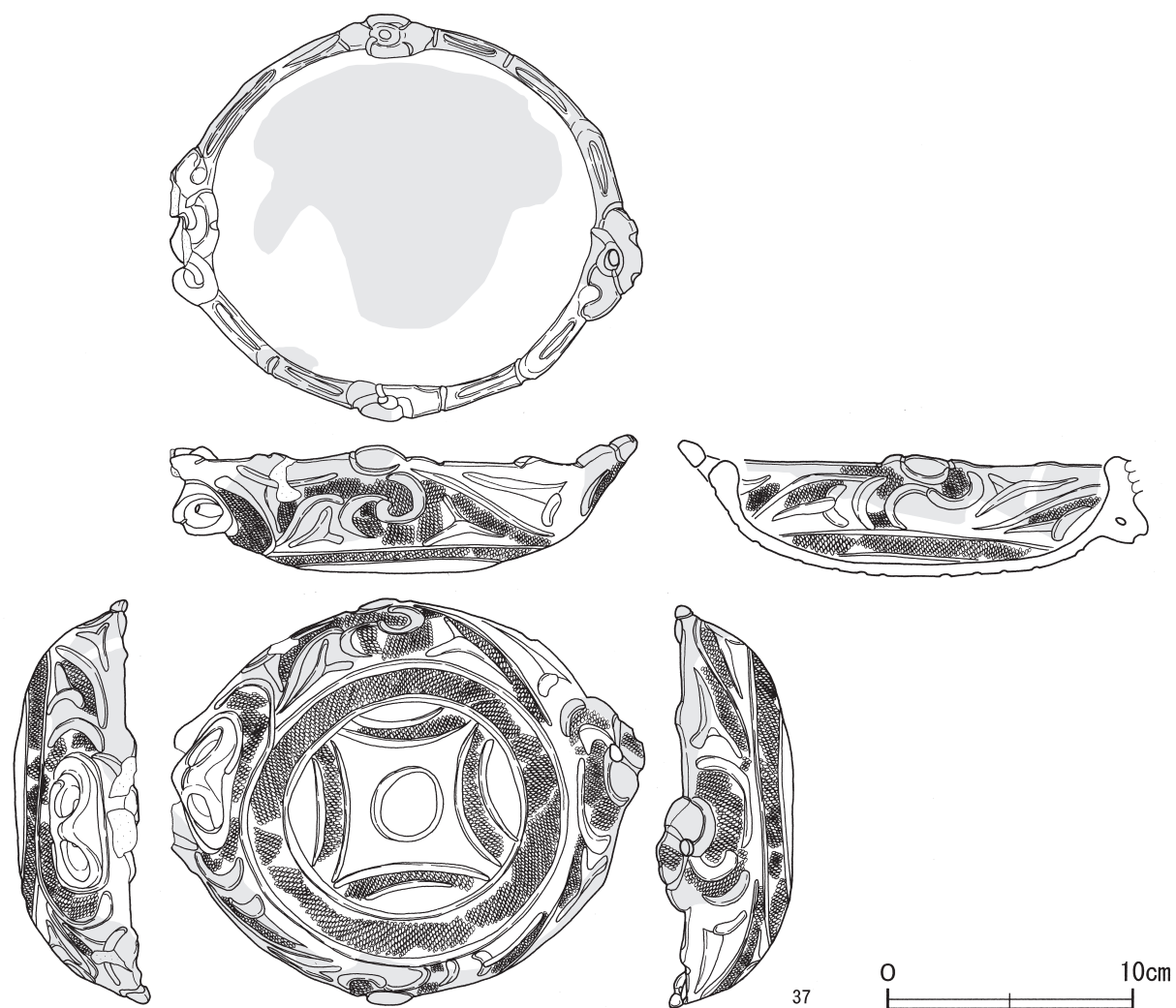
所見 覆土上層の出土土器は，後期前葉から晩期初頭のものが入混在しており，本跡の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。中層から下層にかけて37・40の完形に近い土器が出土していることから，これらは本跡に埋納された土器の可能性が大きい。時期は，出土土器から縄文時代後期後葉から晩期初頭と考えられる。



第39图 第54号土坑・出土遺物実測図

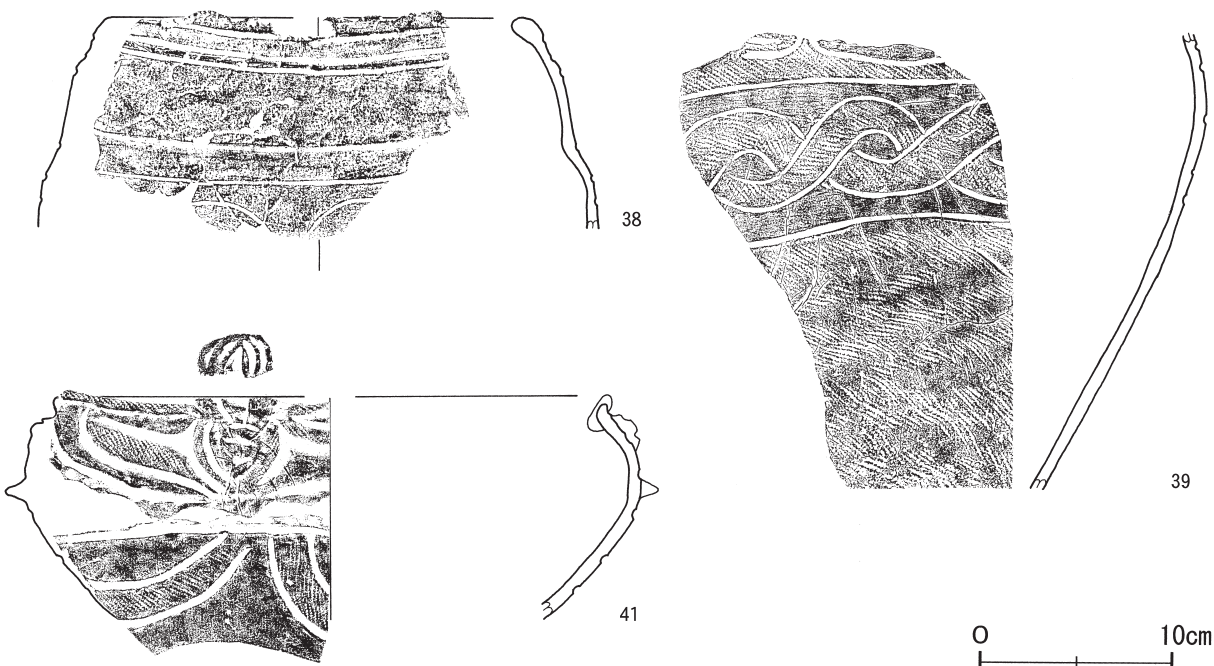


第40图 第54号土坑出土遺物実測図(1)



37

0 10cm



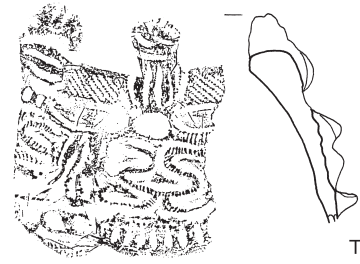
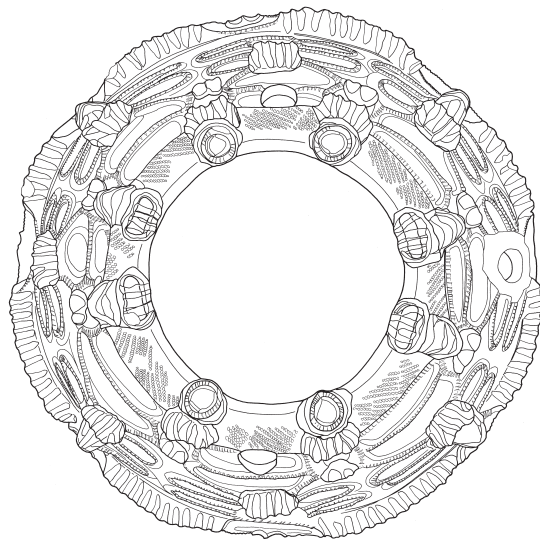
38

39

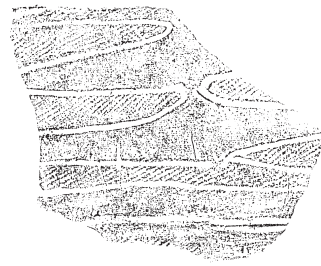
41

0 10cm

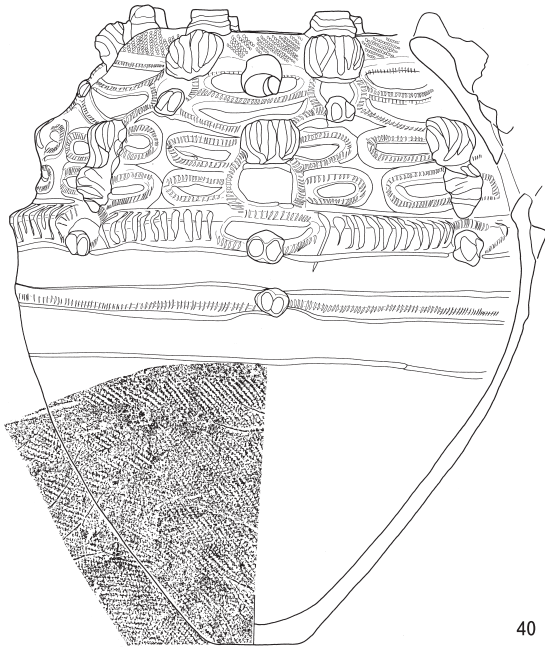
第41图 第54号土坑出土遗物实测图(2)



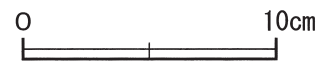
TP432



TP433



40



第42図 第54号土坑出土遺物実測図(3)

第54号土坑出土遺物観察表(第39~42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
29	縄文土器	注口土器	[10.6]	(10.7)	—	長石・石英	褐灰	普通	弧状の沈線の施文 地文は単節縄文LR	加曾利B3精製	覆土上層	40% PL14
30	縄文土器	深鉢	—	(10.5)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	波状口縁 縄文帯 貼付文	安行1精製	覆土上層	10%
31	縄文土器	深鉢	[14.1]	(9.9)	—	長石・石英・雲母	灰褐	普通	小波状の口縁 縄文帯 三叉文入組文 単節縄文LRの充填施文	安行3a精製	覆土上層	30% PL14
32	縄文土器	深鉢	[28.4]	(15.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口辺部横位の条線文 胴部縦位の条線文	晩期安行粗製	覆土上層	10%
33	縄文土器	深鉢	[31.0]	(22.1)	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	紐線文 弧状の条線文 斜位2条の沈線の施文	後期安行粗製	覆土上層	30%
34	縄文土器	深鉢	—	(9.8)	5.7	長石・石英	黄灰	普通	横位2条の沈線 単節縄文LRの充填施文	加曾利B3精製	覆土上層	20% PL14
35	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	6.9	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	無文	後期安行粗製	覆土上層	15%
36	縄文土器	深鉢	[27.2]	(23.3)	—	長石・石英	にぶい黄褐	普通	紐線文 弧状・斜位の条線文 弧線文	晩期安行粗製	覆土中層	20% PL12
37	縄文土器	浅鉢	(18.3)	5.6	5.9	長石・石英・雲母	黒褐	普通	三叉文 入組文 弧線文 単節縄文LRの充填施文 動物造形の貼付文	安行3a精製	覆土中層	90% PL14
38	縄文土器	深鉢	[22.0]	(11.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	横位・弧状の沈線文	加曾利B3精製	覆土下層	10%
39	縄文土器	深鉢	—	(23.8)	—	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	普通	2条の入組文 単節縄文RLの充填施文	安行1精製	覆土下層	20%
40	縄文土器	注口土器	11.1	25.2	3.2	長石・石英	褐灰	普通	紐線文 刻目をもつ貼付文 楕円状に区画する紐線文	安行2精製	覆土下層	90% PL12
41	縄文土器	浅鉢	[28.7]	(11.7)	—	長石・雲母・赤色粒子	暗赤褐	普通	三叉文 2条の沈線 単節縄文RLの充填施文	安行3a精製	覆土下層	20% PL13

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP418	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	沈線の施文 連続刺突の充填施文	称名寺	覆土上層	
TP419	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐	普通	数条の沈線の施文	堀之内	覆土上層	
TP420	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	矢羽根状沈線文	加曾利B2精製	覆土上層	
TP421	縄文土器	浅鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	縄文帯 三叉・弧状の沈線の施文 単節縄文LRの充填施文	安行3a精製	覆土上層	PL11
TP422	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	地文は単節縄文RL 入組文	安行3b精製	覆土上層	
TP423	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	細密沈線文	安行3c精製	覆土上層	
TP424	縄文土器	深鉢	長石・石英・白色粒子	にぶい黄褐	普通	横位3条の沈線と弧状の沈線の施文	安行3c精製	覆土上層	
TP425	縄文土器	深鉢	長石・石英	浅黄橙	普通	弧状・斜位の沈線文 単節縄文LRの充填施文	安行3b粗製	覆土上層	
TP426	縄文土器	浅鉢	長石・石英	橙	普通	小波状口縁	晩期	覆土上層	
TP427	縄文土器	深鉢	長石	橙	普通	数条の沈線の施文	堀之内	覆土中層	
TP428	縄文土器	深鉢	石英	にぶい橙	普通	斜位の条線文	加曾利B粗製	覆土中層	
TP429	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	4条の縄文帯 貼付文 斜位の沈線文	安行1精製	覆土中層	PL11
TP430	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	刻文帯 地文単節縄文RL 貼付文 懸垂する2条の沈線の施文	安行2精製	覆土中層	PL11
TP431	縄文土器	浅鉢	長石・石英	にぶい褐	普通	縄文帯 三叉文 単節縄文LRの充填施文	安行3a精製	覆土中層	
TP432	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	縄文帯 刻目をもつ貼付文 M字状の細かい紐線文の施文	安行2精製	覆土下層	
TP433	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	稲妻状の沈線の施文 単節縄文LRの充填施文	安行2精製	覆土下層	PL11

第62号土坑 (第43・44図)

位置 調査区中央部D3j4区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.30mの円形で, 深さは172cmである。底面は平坦で, 壁は直立している。

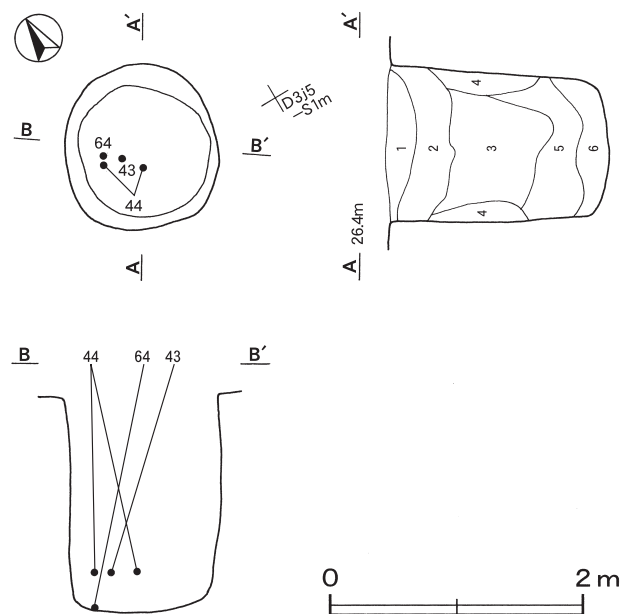
覆土 6層に分層される。上層と比較して, 中層から下層は, 炭化物や粘土粒子を多く含み, 締まりの弱い覆土である。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

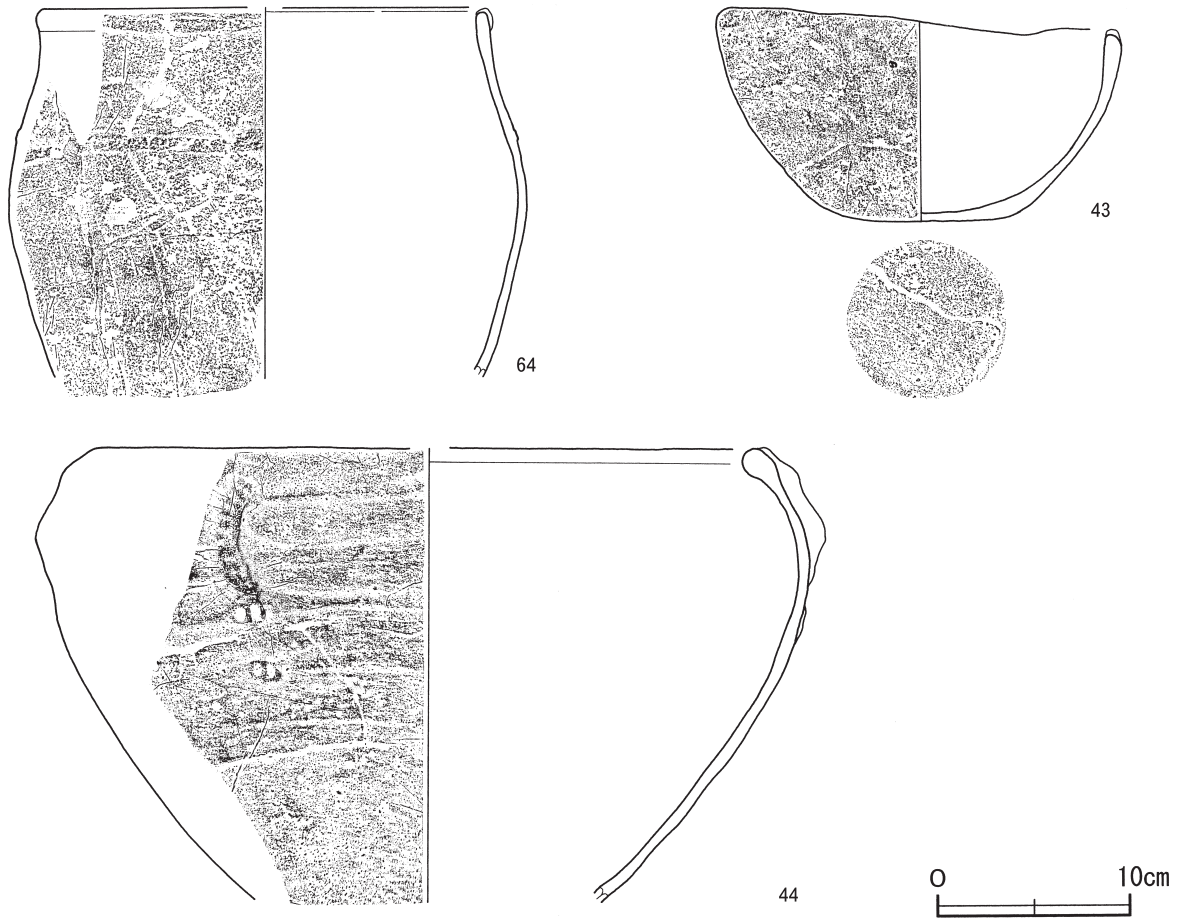
- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子少量 | 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック中量 | 6 暗褐色 ロームブロック・炭化物少量, 粘土粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片255点(第Ⅲ群A類4点・C類8点・C4類12点・E1類7点・E3類28点, 後期底部片4点, 後期細片177点, 第Ⅴ群15点)が出土している。64は底面, 43は正位で覆土下層から, それぞれ出土している。覆土上層では遺物の集中がみられるが, 小破片が多いことから, 廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は, 出土土器から縄文時代後期後葉(安行1・2式期)と考えられる。本跡の廃絶後, 埋没過程で土器が廃棄されたと考えられる。



第43図 第62号土坑実測図



第44図 第62号土坑出土遺物実測図

第62号土坑出土遺物観察表（第44図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
43	縄文土器	浅鉢	20.0	11.2	8.5	長石・石英・赤色 粒子	橙	普通	無文	晩期安 行粗製	覆土下層	85% PL13
44	縄文土器	浅鉢	[35.3]	(23.8)	—	長石・石英・雲母	橙	普通	紐線文 貼付文 弧状の隆線 の施文	晩期安 行粗製	覆土下層	30%
64	縄文土器	深鉢	[23.0]	(19.2)	—	長石	褐	普通	紐線文 器面荒れのため調整不明	晩期安 行粗製	底面	20% 二次焼成

第68号土坑（第45図）

位置 調査区中央部E 3a5区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.28mの円形で、深さは160cmである。底面は平坦で、壁は中位まで直立し、上位は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 暗褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片348点（第Ⅲ群A類99点・C類3点・E類31点・E3類212点、第Ⅳ群A類1点・A5類2点）、石器1点（磨石）、剥片1点が覆土中から出土している。覆土中層から下層にかけて45、TP441・TP443～TP445、Q4が出土しており、時期決定の指標となる土器である。TP437～TP440は本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。また、第5層から腐朽した獣骨が出土したが、シカの頭蓋骨であることが確認された。

所見 時期は，出土土器から縄文時代後期後葉から晩期前葉と考えられる。本跡の廃絶後，埋没過程で土器や獣骨が廃棄されたと考えられる。



第45図 第68号土坑・出土遺物実測図

第68号土坑出土遺物観察表（第45図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
45	縄文土器	鉢	—	(7.9)	3.6	長石・石英・雲母	褐灰	普通	無文	後期安 行粗製	覆土下層	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP437	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰白	普通	沈線文 列点文	称名寺	覆土下層	
TP438	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	刻文帯 地文は撚糸文 斜位の条線文	加曾利B粗製	覆土中	
TP439	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	地文は撚糸文 縦位の条線文	加曾利B粗製	覆土上層	
TP440	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	地文は単節縄文 RL 縦位の条線文	加曾利B粗製	覆土下層	
TP441	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	縄文帯 区画帯に斜位の沈線文 貼付文	安行1精製	覆土中層	
TP442	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	貼付文 単節縄文 RL	安行2精製	覆土上層	
TP443	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	縄文帯に2条の弧状の沈線施文 口唇部に貼付文	安行3b精製	覆土中層	
TP444	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	斜位の条線文	晩期安行粗製	覆土下層	
TP445	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁は弧状 胴部は斜位の条線文	晩期安行粗製	覆土中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q4	磨石	7.9	6.8	3.8	238.0	安山岩	側面を使用	覆土下層	PL17

第69号土坑 (第46・47図)

位置 調査区中央部E 3c4区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

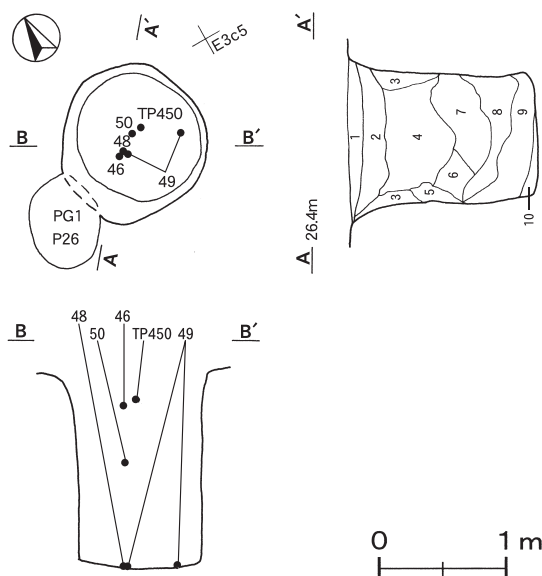
重複関係 第1号ピット群のP26と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と形状 長径1.28m, 短径1.15mの楕円形で, 長径方向はN-41°-Eである。深さは152cmで, 底面は平坦である。壁は直立している。

覆土 10層に分層される。各層に焼土粒子や炭化粒子を含み, ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。底面には, 灰が薄く堆積した状況が確認されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|---------|-------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量, ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 褐色 | ローム粒子中量 | 10 灰黄褐色 | 灰中量, 炭化物・ローム粒子少量 |



第46図 第69号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片622点 (第II群B類2点, 第III群A類2点・B類3点・C類64点・C4類217点・E類57点・E3類173点, 第IV群A類3点・A5類100点, 晩期底部片1点), 土製品3点 (土器片錘・土器円盤・不明土製品), 剥片2点が出土している。覆土上層では大形破片が多量に出土している。48・49は底面から出土しており, 時期決定の指標となる土器である。

所見 時期は, 出土土器から縄文時代後期後葉から晩期前葉と考えられる。覆土上層から中層にかけて出土した土器は, 時期の異なるものが混在しており, 本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。



第47図 第69号土坑出土遺物実測図

第69号土坑出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
46	縄文土器	浅鉢	[19.6]	(6.8)	—	長石・石英・雲母	赤褐	普通	胴部2条の縄文帯と底部に単節縄文LRの充填施文	加曾利B3精製	覆土上層	30% PL13
47	縄文土器	浅鉢	14.0	(8.4)	—	長石・石英・雲母	褐灰	普通	3条の縄文帯・2条の沈線間に単節縄文RLを充填施文	安行I精製	覆土下層	50% PL14
48	縄文土器	深鉢	—	(22.2)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	無文	後期安行粗製	底面	20%
49	縄文土器	深鉢	—	(17.6)	5.8	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	無文 底部に網代痕	後期安行粗製	底面	20%
50	縄文土器	深鉢	—	(22.6)	—	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	弧状・斜位の条線文	後期安行粗製	覆土中層	10%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP450	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	対向する弧状の沈線 単節縄文RLの充填施文 口唇部に貼付文	加曾利B3精製	覆土上層	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徵	時期	出土位置	備考
TP452	縄文土器	深鉢	長石・石英	明赤褐	普通	紐線文 弧状の条線文	加曾利B粗製	覆土中	
TP453	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐	普通	縄文帯に貼付文	安行1精製	覆土中	
TP454	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	紐線文 弧状の条線文 斜位に2条の沈線の施文	後期安行粗製	覆土下層	
TP456	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	三叉文 入組文 単節縄文LRの充填施文	安行3b精製	覆土中	

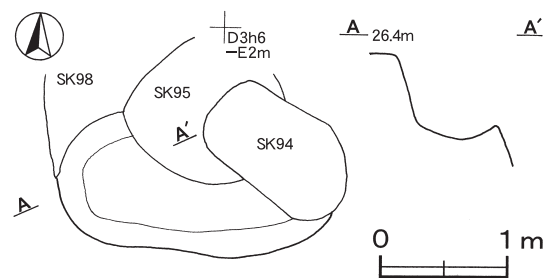
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特 徴	出土位置	備考
DP10	中空土製品か	(7.6)	(7.1)	(1.8)	(60.6)	長石・赤色粒子	放射状に6～7条の集合沈線 竹管による刺突文 注 口土器の可能性あり	覆土中	
DP11	土器片鏟	4.7	2.2	0.9	10.8	長石・赤色粒子	長方形 上下に刻みあり	覆土中	
DP12	土器片円盤	5.4	4.4	0.9	24.3	長石・石英・赤色粒子	周縁部を研磨	覆土中	

第88号土坑 (第48図)

位置 調査区中央部D 3h6区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2B号住居の床下に, 本跡を含め4基の土坑と第2A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2A号住居跡を掘り込み, 第94・95・98号土坑に掘り込まれている。本跡の埋没後に第2B号住居の床が構築されている。



第48図 第88号土坑実測図

規模と形状 南北径1.02m, 東西径1.52mだけが確認されており, 平面形は楕円形と推測される。深さは65cmで, 底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

所見 時期は, 出土土器がないため明確ではないが, 重複関係から縄文時代後期と考えられる。

第93号土坑 (第49図)

位置 調査区中央部E 3a6区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.57m, 短径0.50mの楕円形で, 長径方向はN-49°-Eである。深さは56cmで, 底面は皿状である。壁は外傾して立ち上がっている。

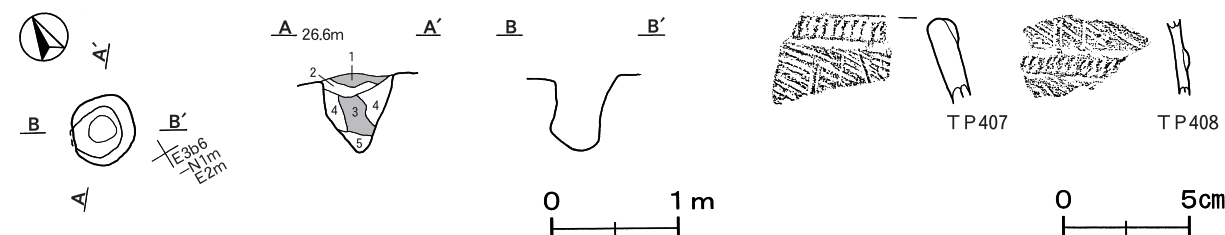
覆土 5層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------|
| 1 黒褐色 混土貝層, ロームブロック少量 | 4 暗褐色 ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック中量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 混土貝層, ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 第1・3層からヤマトシジミ2140.0gが出土している。その他, 縄文土器片10点(第Ⅲ群B類1点・E2類2点, 第Ⅳ群A5類2点, 後期細片5点)が覆土中から出土している。

所見 本跡の埋没過程で貝が投棄されたものと考えられる。時期は, 出土土器から縄文時代後期と考えられる。



第49図 第93号土坑・出土遺物実測図

第93号土坑出土遺物観察表（第49図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP407	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄褐	普通	紐線文 地文斜位の条線文 懸垂する2条の沈線を施文	晩期安 行粗製	覆土中	
TP408	縄文土器	深鉢	長石・石英・赤色 粒子	にぶい黄褐	普通	紐線文 地文斜位の条線文 懸垂する2条の沈線を施文	晩期安 行粗製	覆土中	

第94号土坑（第50図）

位置 調査区中央部D 3h6区，標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2 B号住居の床下に，本跡を含め4基の土坑と第2 A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2 A号住居跡，第88・95号土坑を掘り込み，本跡の埋没後に第2 B号住居の床が構築されている。

規模と形状 長径1.26m，短径0.72mの隅丸長方形で，長径方向はN-53°-Wである。深さは70cmで，底面は平坦である。壁は若干外傾して立ち上がっている。

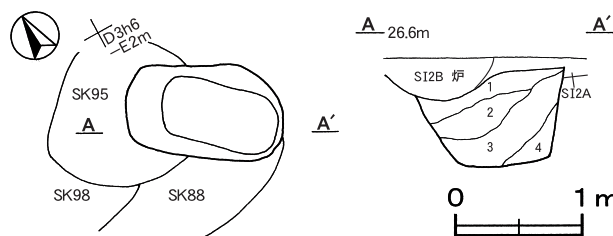
覆土 4層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量，焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 縄文土器片1点が出土している。

所見 時期は，出土土器が細片のため明確ではないが，重複関係から縄文時代後期と考えられる。



第50図 第94号土坑実測図

第95号土坑（第51図）

位置 調査区中央部D 3h6区，標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2 B号住居の床下に，本跡を含め4基の土坑と第2 A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2 A号住居跡，第88・98号土坑を掘り込み，第94号土坑に掘り込まれている。本跡の埋没後に第2 B号住居の床が構築されている。

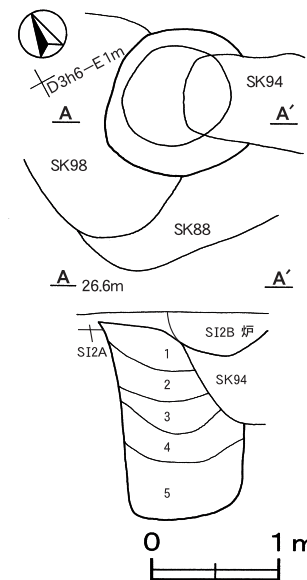
規模と形状 径1.20mの円形で，深さは152cmである。円筒状に掘り込まれており，底面は皿状で，壁は直立している。

覆土 5層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック微量

所見 時期は，出土土器がないため明確ではないが，重複関係と形状から，縄文時代後期と考えられる。



第51図 第95号土坑実測図

第96号土坑（第52図）

位置 調査区中央部E 3a5区，標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径1.20mの円形で、深さは72cmである。底面はほぼ平坦で、壁は直立している。

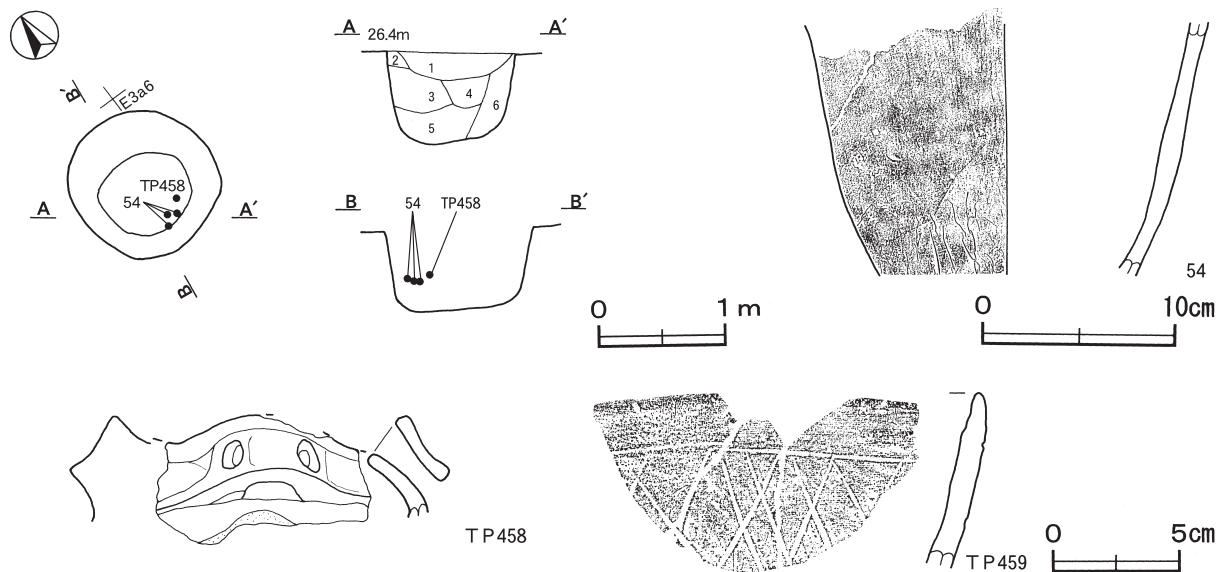
覆土 6層に分層される。ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 6 褐色 | ロームブロック中量 |

遺物出土状況 縄文土器片31点（第Ⅱ群B類1点、第Ⅲ群B類1点・E3類1点、後期細片28点）が出土している。覆土中層に土器片の集中が見られるが、小破片が多い。54の深鉢は覆土中層から出土している。TP458・TP459は、本跡の埋没過程で混入したものと考えられる。

所見 本跡の埋没過程で土器が廃棄されたと考えられる。時期は、出土土器から縄文時代後期と考えられる。



第52図 第96号土坑・出土遺物実測図

第96号土坑出土遺物観察表（第52図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
54	縄文土器	深鉢	—	(13.1)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	無文	後期安行粗製	覆土中層	10%
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考			
TP458	縄文土器	把手	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	刺突をもつ把手	加曾利E4	覆土中層				
TP459	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	交叉する斜位の沈線文	堀之内1	覆土中	PL11			

第97号土坑（第53図）

位置 調査区中央部E3a6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.35m、短径1.06mの楕円形で、長径方向はN-52°-Wである。深さは63cmで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。各層にロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

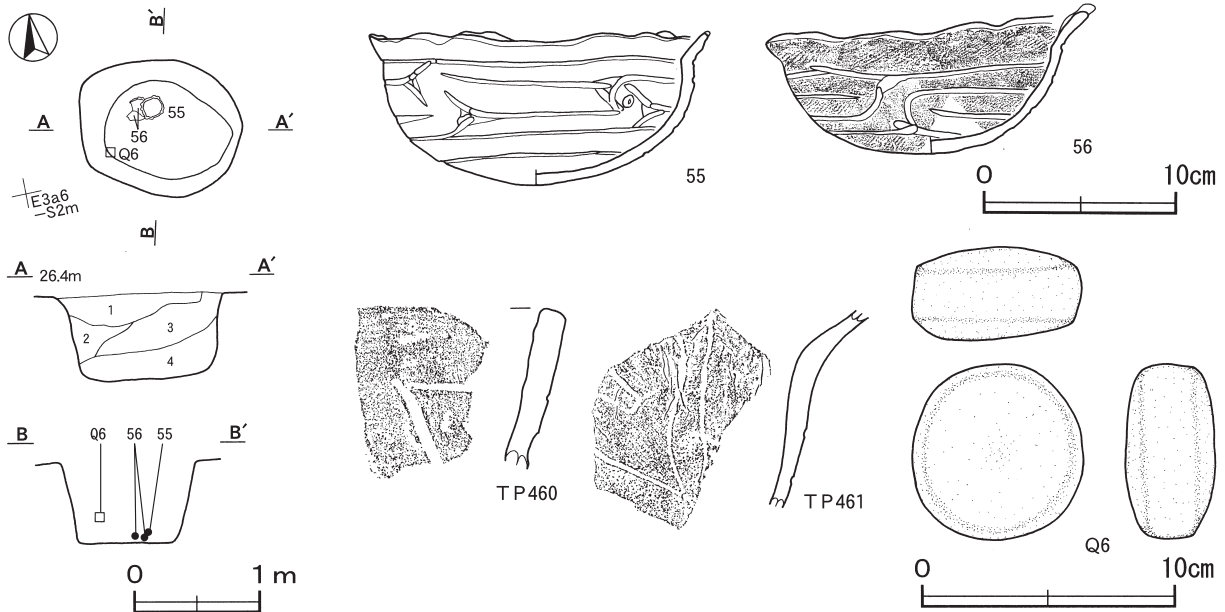
土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 縄文土器片23点（第Ⅲ群A類18点、第Ⅳ群A1類2点・A2類2点・A3類1点）、石器1点

(磨石)が出土している。55・56は、底面に近い覆土下層から重なって出土している。

所見 時期は、出土土器から縄文時代晩期初頭(安行3a式期)と考えられる。



第53図 第97号土坑・出土遺物実測図

第97号土坑出土遺物観察表(第53図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
55	縄文土器	浅鉢	17.7	8.1	—	長石・石英・赤色 粒子・細礫	にぶい黄橙	普通	横位の沈線文 玉抱き三叉文	安行3a 精製	覆土下層	100% PL13
56	縄文土器	浅鉢	16.8	7.8	—	長石・石英	橙	普通	入組三叉文 単節縄文LRの充填施文	安行3a 精製	覆土下層	95% PL13

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP460	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	L字状の沈線	称名寺	覆土中	
TP461	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	沈線文	称名寺	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q6	磨石	7.0	6.8	3.7	251.0	安山岩	側面を使用	覆土中層	

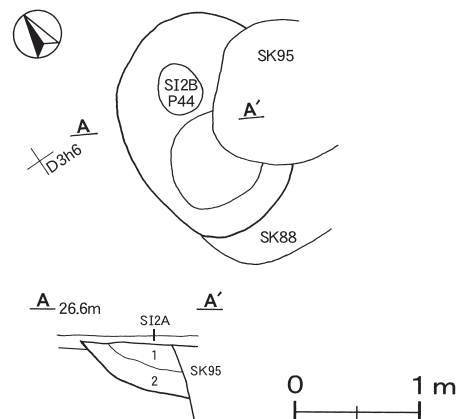
第98号土坑 (第54図)

位置 調査区中央部D3h6区、標高26mの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2B号住居の床下に、本跡を含め4基の土坑と第2A号住居跡が確認されている。

重複関係 第2A号住居跡、第88号土坑を掘り込み、第95号土坑、第2B号住居のP44に掘り込まれている。本跡の埋没後に第2B号住居の床が構築されている。

規模と形状 長径1.72m、短径0.70mだけが確認されており、平面形は楕円形で、長径方向はN-14°-Eである。深さは36cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。



第54図 第98号土坑実測図

覆土 2層に分層される。周囲からの土砂の流入を示す自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子中量

所見 時期は、出土土器がないため明確ではないが、重複関係から、縄文時代後期と考えられる。

表3 縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
10	D 3 b0	—	円形	1.08	34	外傾	平坦	人為	ヤマトシジミ	
18	D 3 d0	—	円形	1.08	184	直立	平坦	人為	縄文土器・土偶	
50	E 3 e3	N-59°-E	長楕円形	1.24 × 0.74	22	緩斜	皿状	人為	縄文土器・土偶	
53	D 3 g8	—	[楕円形]	(1.16) × (0.46)	200	直立	平坦	人為	ヤマトシジミ・縄文土器・剥片	本跡→SK52
54	D 3 i6	N-22°-E	楕円形	2.12 × 1.78	352	直立 外傾	皿状	人為	縄文土器・磨石・剥片・獣骨	
62	D 3 j4	—	円形	1.30	172	直立	平坦	人為	縄文土器	
68	E 3 a5	—	円形	1.28	160	直立 外傾	平坦	人為	縄文土器・磨石・剥片・鹿骨 (頭蓋骨)	
69	E 3 C4	N-41°-E	楕円形	1.28 × 1.15	152	直立	平坦	人為	縄文土器・土器片錘・土器円 盤・剥片	PG1P26 との新旧関係 不明
88	D 3 h6	—	[楕円形]	(1.52) × (1.02)	65	外傾	平坦	—	—	SI2A → 本跡 → SK98 → SK95 → SK94 → SI2B
93	E 3 a6	N-49°-E	楕円形	0.57 × 0.50	56	外傾	皿状	人為	ヤマトシジミ・縄文土器	
94	D 3 h6	N-53°-W	隅丸長方形	1.26 × 0.72	70	直立 外傾	平坦	人為	縄文土器	SI2A → SK88 → SK95 → 本跡 → SI2B
95	D 3 h6	—	円形	1.20	152	直立	皿状	人為	—	SI2A → SK88 → SK98 → 本跡 → SK94 → SI2B
96	E 3 a5	—	円形	1.20	72	直立	平坦	人為	縄文土器	
97	E 3 a6	N-52°-W	楕円形	1.35 × 1.06	63	外傾	平坦	人為	縄文土器・磨石	
98	D 3 h6	N-14°-E	[楕円形]	1.72 × (0.70)	36	緩斜	平坦	自然	—	SI2A → SK88 → 本跡 → SK95 → SI2B

(4) 遺構外出土遺物 (第55~57図, PL13)

縄文土器片14,365点が出土している。縄文時代前期から晩期前半の土器が確認されており、主体となるのは、後期後葉の安行1・2式土器、晩期前葉の安行3a・3b式土器である。精製・粗製土器はほぼ半々である。また、TP番号のついている遺物の説明は、数字番号のみの表記とする。

C区出土土器の点数及び重量

時期	後期											
	前期		中期		称名寺式		堀之内式		加曾利B式			
									精製		粗製	
粗・精の別	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部
出土数	4	16	1	35	22	42	23	79	36	40	71	131
重量(kg)	0.03	0.24	0.01	1.4	0.9	1.67	1.8	2.12	1.32	1.98	1.35	2.82

時期	後期										総点数 総重量	
	曾谷式				安行1・2式				底部片	細片		
	精製		粗製		精製		粗製					
粗・精の別	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部
出土数	11	32	1	8	166	194	117	54	196	8554	9833	
重量(kg)	0.12	0.39	0.02	0.24	4.57	1.77	4.78	2.53	7.65	100.85	138.56	

時期	晩期										総点数 総重量	
	安行3a~3d式				前浦式		大洞式		無文土器	底部片		細片
	精製		粗製									
粗・精の別	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部
出土数	125	149	64	33	4	10	2	53	139	3953	4532	
重量(kg)	3.76	2.2	3.14	1.79	0.02	0.16	0.02	1.03	6.55	27.76	46.43	

第I群 前期の土器群

A類 黒浜式 462・464は胎土に繊維を含む。462は単節縄文RL，464は単節縄文LRとRLの羽状縄文が施文されている。

第III群 後期の土器群

A類 称名寺式 465・466は称名寺1式である。L字文が施文され、磨消縄文がみられる。467・468・470・472は称名寺2式で、沈線区画文を施し、470にはJ字文が施されている。

B類 堀之内式 473・474・476は堀之内1式である。473は口縁部に懸垂する隆線、胴部に交叉する斜位の沈線が施文される。474は地文が単節縄文LR，数条の沈線が施文されている。476は交叉する斜位の沈線が施文されている。477は堀之内2式で、磨消縄文（単節縄文LR）で2条の沈線が施文されている。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式 P57，479・480である。P57は横位に数条の沈線が施文される。479・480は地文が単節縄文LRで、横位の沈線に交叉する蛇行沈線文などがみられる。

C2類 加曾利B2式 481である。地文は斜位の条線文で、頸部に横位2条の沈線が施文されている。

C3類 加曾利B3式 482～484である。口唇部に連続刺突あるいは刻文帯を有し、弧線あるいは連弧文が描かれている。482・484は沈線による波状区画がみられる。

C4類 加曾利B式の粗製土器 485～487である。485は口辺部に刻目と縦位の条線文，紐線文が施文されている。486は紐線文がみられ，地文が撚糸文で斜位の条線文が施文されている。487は地文が単節縄文RLで斜位の沈線が施文されている。

E類 安行1・2式

E1類 安行1式 489～492である。3条の縄文帯あるいは刻文帯に無文の貼付がみられる。492は波状口縁に円孔が認められる。

E2類 安行2式 P59，493～495である。縄文帯と刻目のある貼付文をもつものが多い。493は連続刺突文が沿った縄文帯がみられる。494は刻目のある突起を有し，P59は異形台付土器である。

E3類 安行1・2式の粗製土器 496は連続刺突が施文され，弧状に条線文が施文されている。

第IV群 晩期の土器群

A類 安行3a～3d式

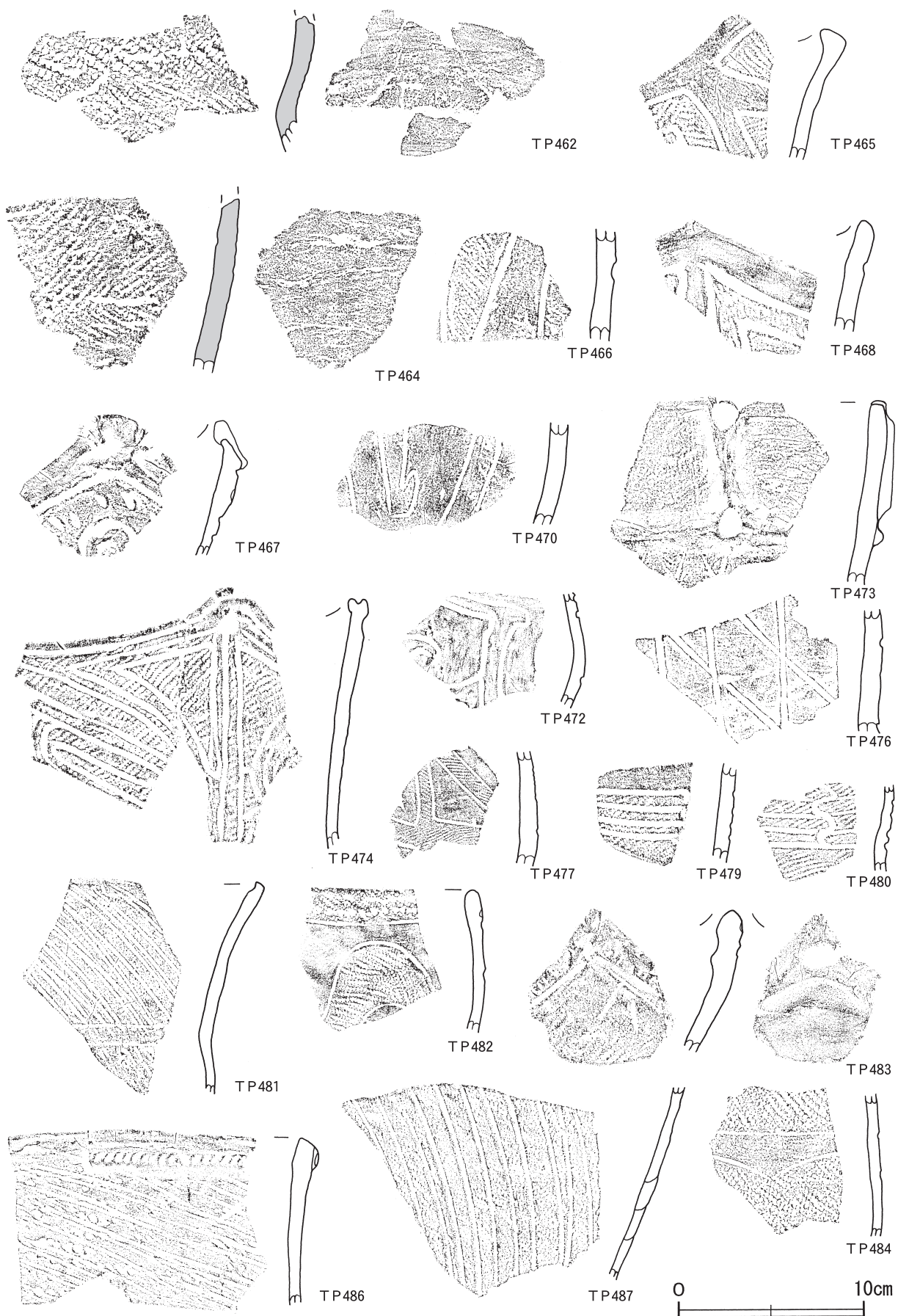
A1類 安行3a式 P63，497～499である。497～499は三叉文がみられ，P63は注口土器の注口部である。

A2類 安行3b式 P58，500～504である。500・502は入組文，501は内面に3条の沈線，口唇部に貼付文がみられる。503は細密沈線文，504は弧線状の文様が施され，どちらも「姥山式」である。P58は入組三叉文をもつ浅鉢である。

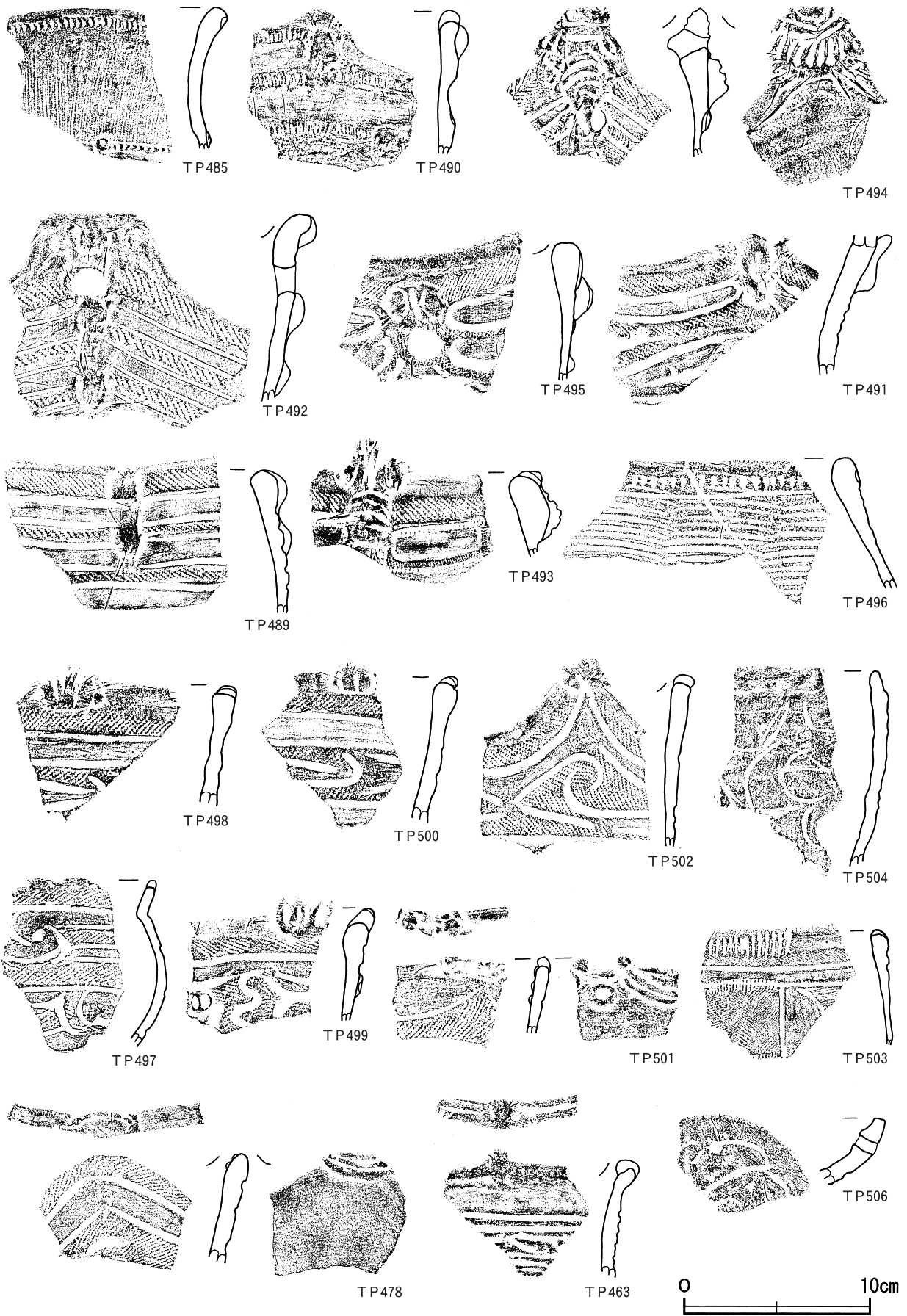
A3類 安行3c式 P60，478・505～507である。478は口唇部に貼付文，505は沈線文と連続刺突文の充填施文が施されている。506は沈線文と円孔が認められる。507は沈線による区画文，P60は底部に沈線による文様が施されたミニチュア土器である。463は大洞C2式の壺である。

第V群 その他の土器群

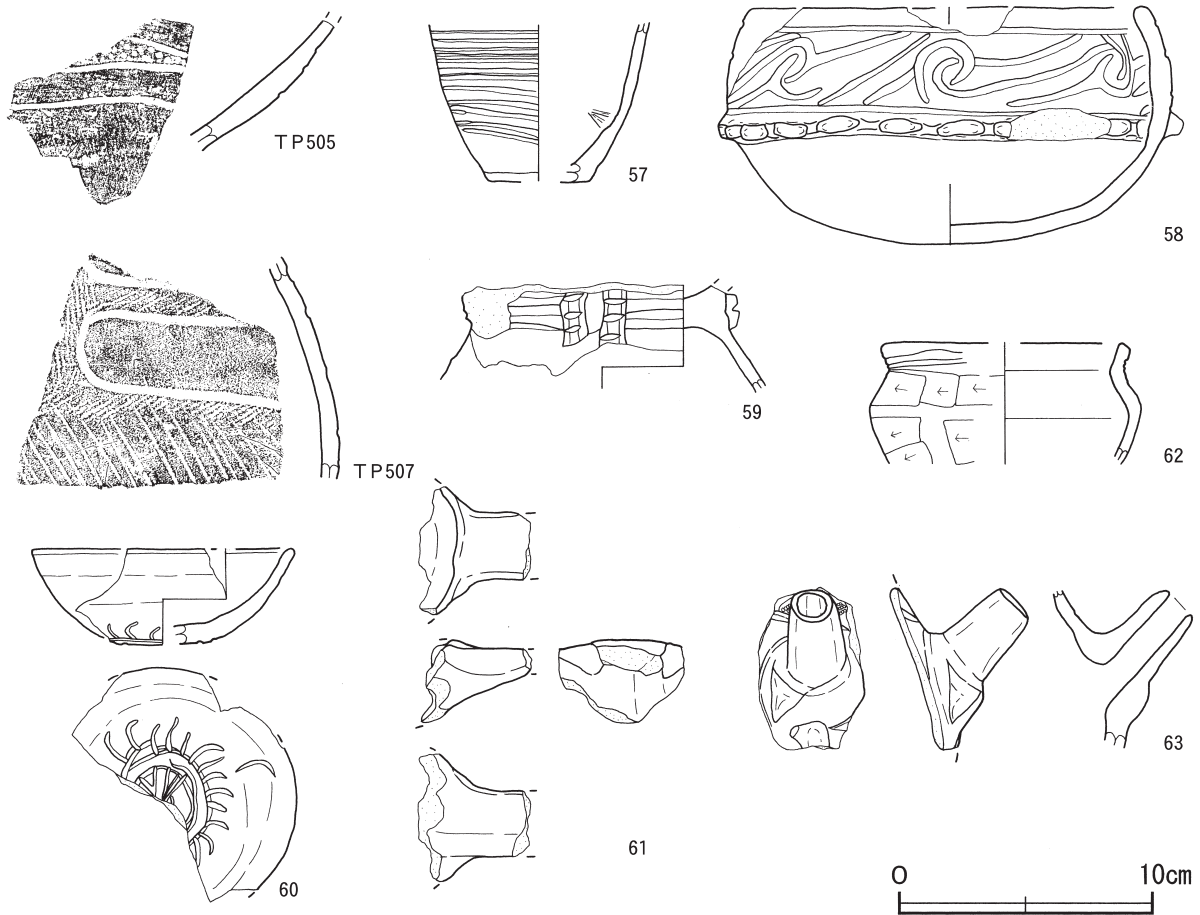
P61は把手，P62はミニチュア土器である。



第55图 C区遺構外出土遺物実測図(1)



第56图 C区遺構外出土遺物実測図(2)



第57図 C区遺構外出土遺物実測図(3)

2 その他の遺構と遺物

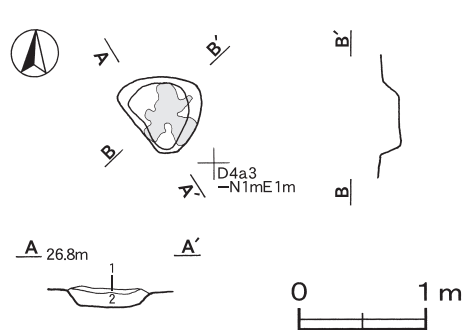
焼土遺構1か所、井戸跡1基、溝跡3条、土坑78基、ピット群2か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 焼土遺構

第1号焼土遺構 (第58図)

位置 調査区北部C4j3区、標高26mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径0.68m、短径0.58mの不整楕円形で、長径方向はN-69°-Wである。深さは13cmで、底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。底面や壁に火を受けて赤変硬化した痕跡は確認されなかった。



第58図 第1号焼土遺構実測図

覆土 2層に分層される。ロームブロックや焼土ブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量

所見 時期は、出土土器がないため不明である。本跡の周囲にはピットや硬化面が検出されなかったことから、住居に伴う炉や屋外炉ではないと判断し、焼土遺構とした。

(2) 井戸跡

第1号井戸跡 (第59図)

位置 調査区中央部D3g5区, 標高26mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2A・2B号住居跡, 第99号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 径1.23mの円形で, 円筒状に掘り込まれている。確認面から218cm掘り下げた時点で, 崩落のおそれがあることから, 下部の調査を断念した。

覆土 9層に分層される。各層に粘土ブロックやロームブロックを含む不均質な堆積状況を示す人為堆積である。

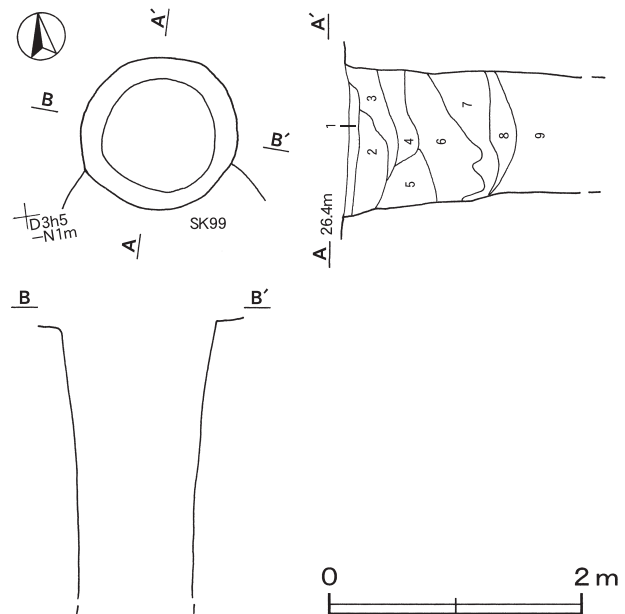
土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化物・粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・粘土粒子少量
- 4 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 粘土ブロック少量, ローム粒子微量
- 6 暗褐色 粘土ブロック中量, ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量, 粘土ブロック微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック微量
- 9 黒褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量

遺物出土状況 縄文土器片123点が出土している。

ほとんどが細片で, 破断面が摩滅していることから流れ込んだものと考えられる。

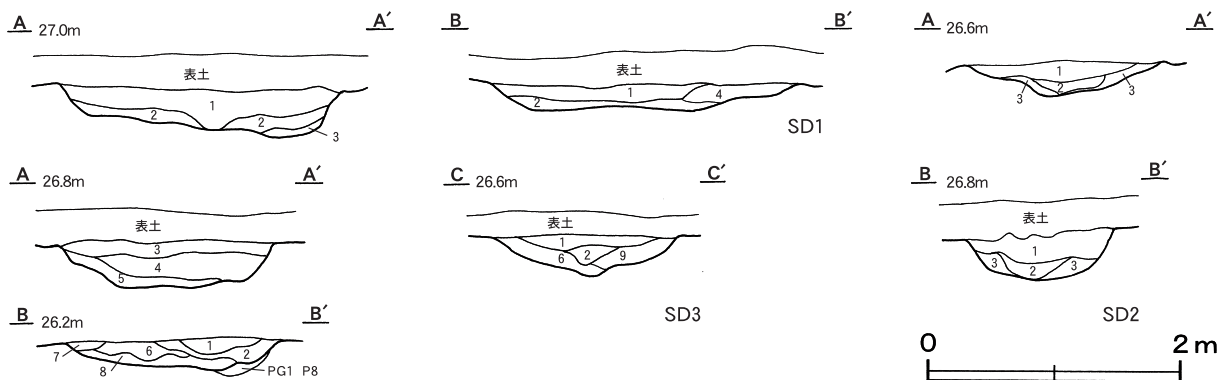
所見 形状から井戸と判断した。時期は不明である。



第59図 第1号井戸跡実測図

(3) 溝跡 (第60図・付図)

ここでは, 時期及び性格が不明な溝跡3条について, 実測図と一覧表で掲載する。



第60図 第1～3号溝跡実測図

第1号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第3号溝跡土層解説

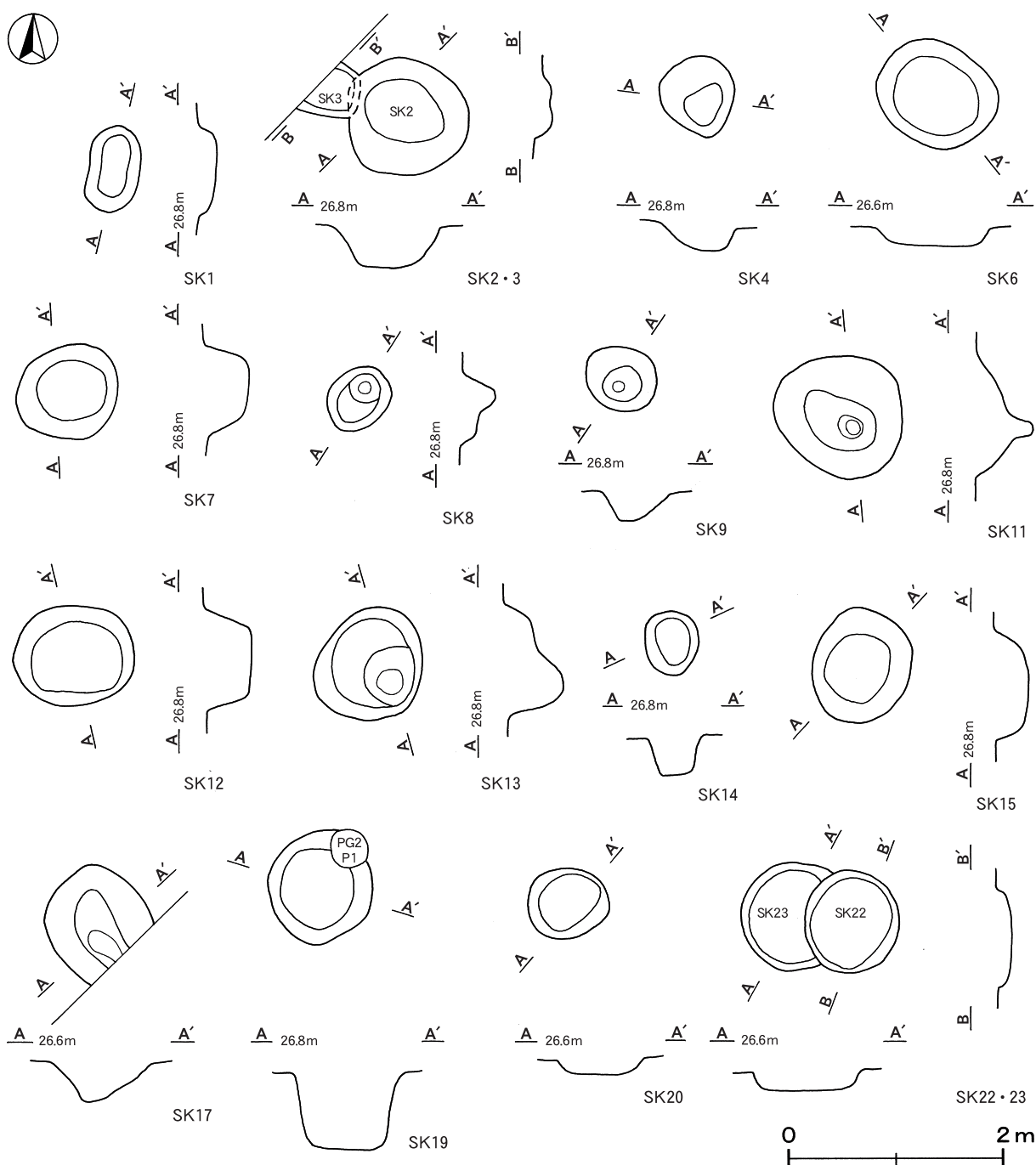
- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量
- 6 黒褐色 ローム粒子微量
- 7 黒褐色 ロームブロック中量
- 8 暗褐色 ロームブロック多量
- 9 暗褐色 ロームブロック中量

表4 時期不明溝跡一覧表

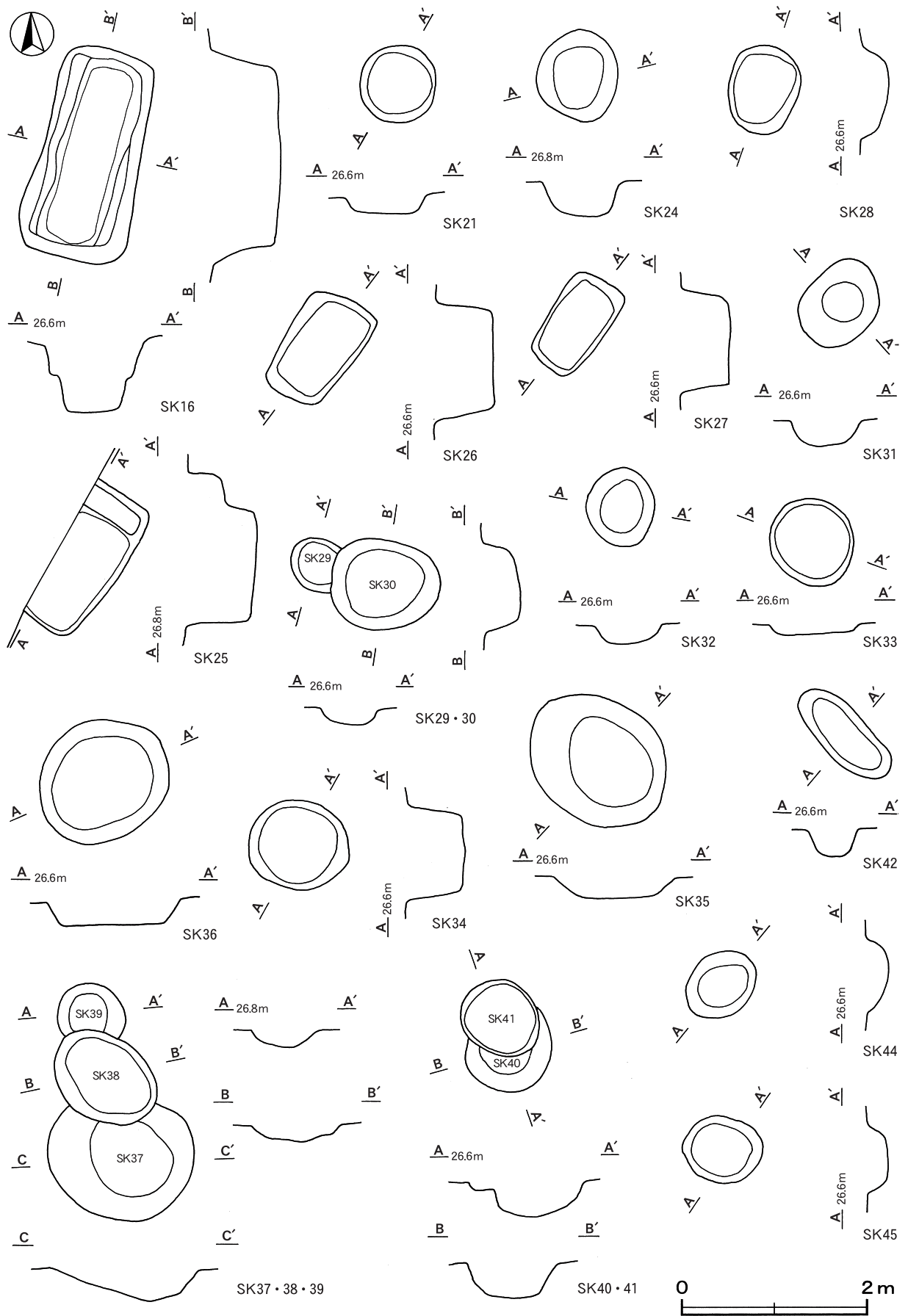
番号	位置	方向	形状	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 重複関係 (古→新)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	D4a2~D4b1	N-40°-E	曲線状	(6.30)	1.28~2.42	0.68~1.34	20~39	外傾	皿状 平坦	自然	縄文土器	SI1→本跡
2	D3h4~D3i5	N-53°-W	直線状	(8.48)	1.00~1.44	0.22~0.52	29~36	外傾	皿状	自然	縄文土器, 土師器, 土師質土器, 陶磁器	SI2A・2B, SK86→本跡
3	D3i3~E2h0	N-29°-E N-52°-W	L字状	(43.38)	0.24~1.86	0.12~0.42	30~36	外傾	皿状	人為	縄文土器	PG1P8→ 本跡

(4) 土坑

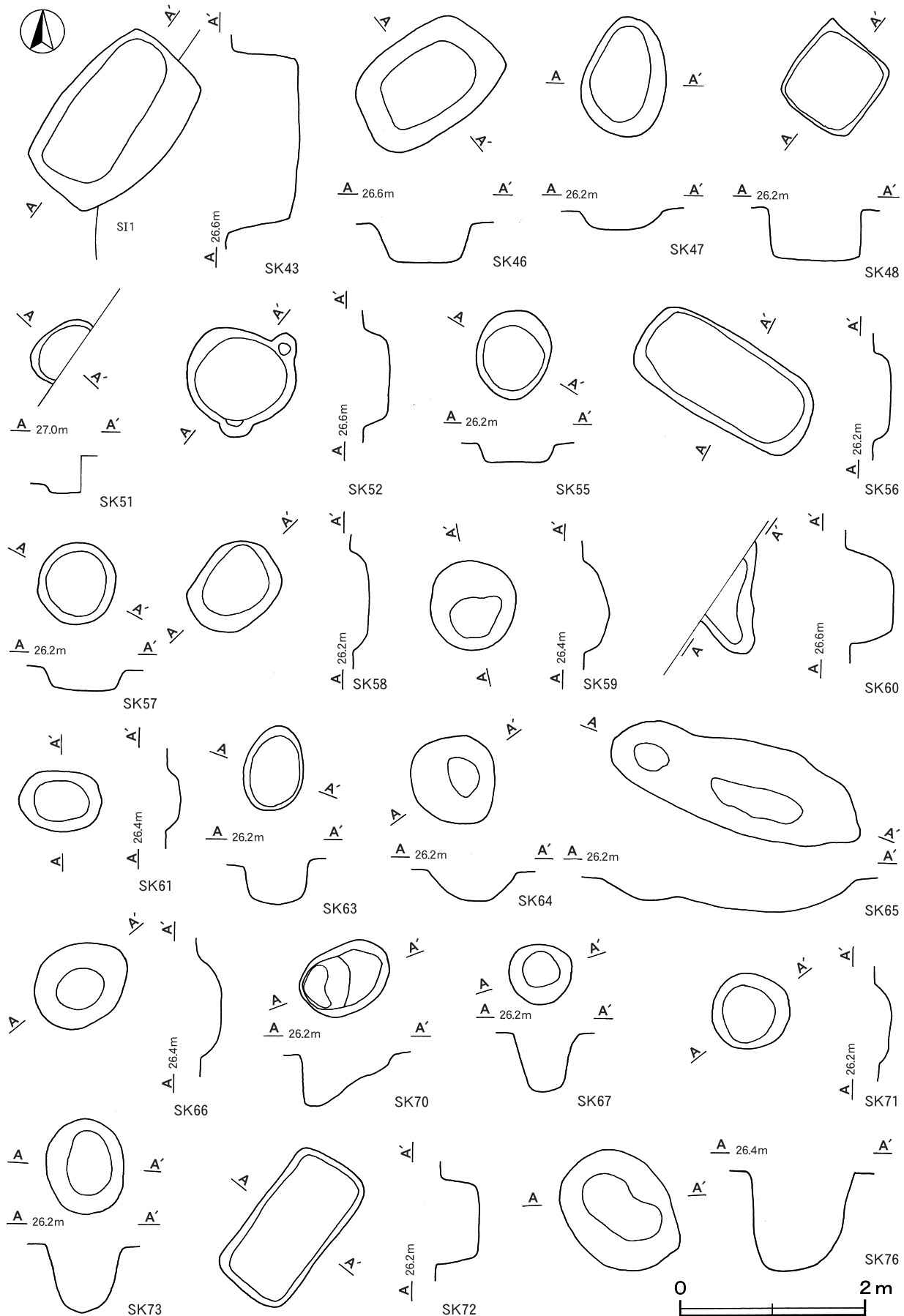
ここでは、時期及び性格が不明な78基の土坑について実測図(第61~64図)及び一覧表を掲載する。



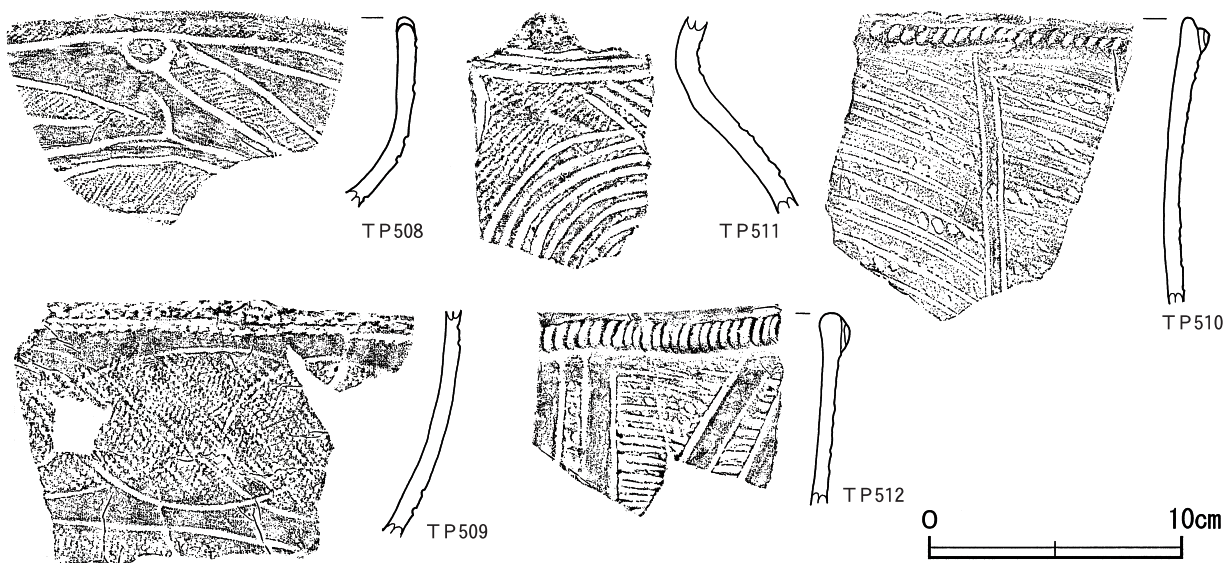
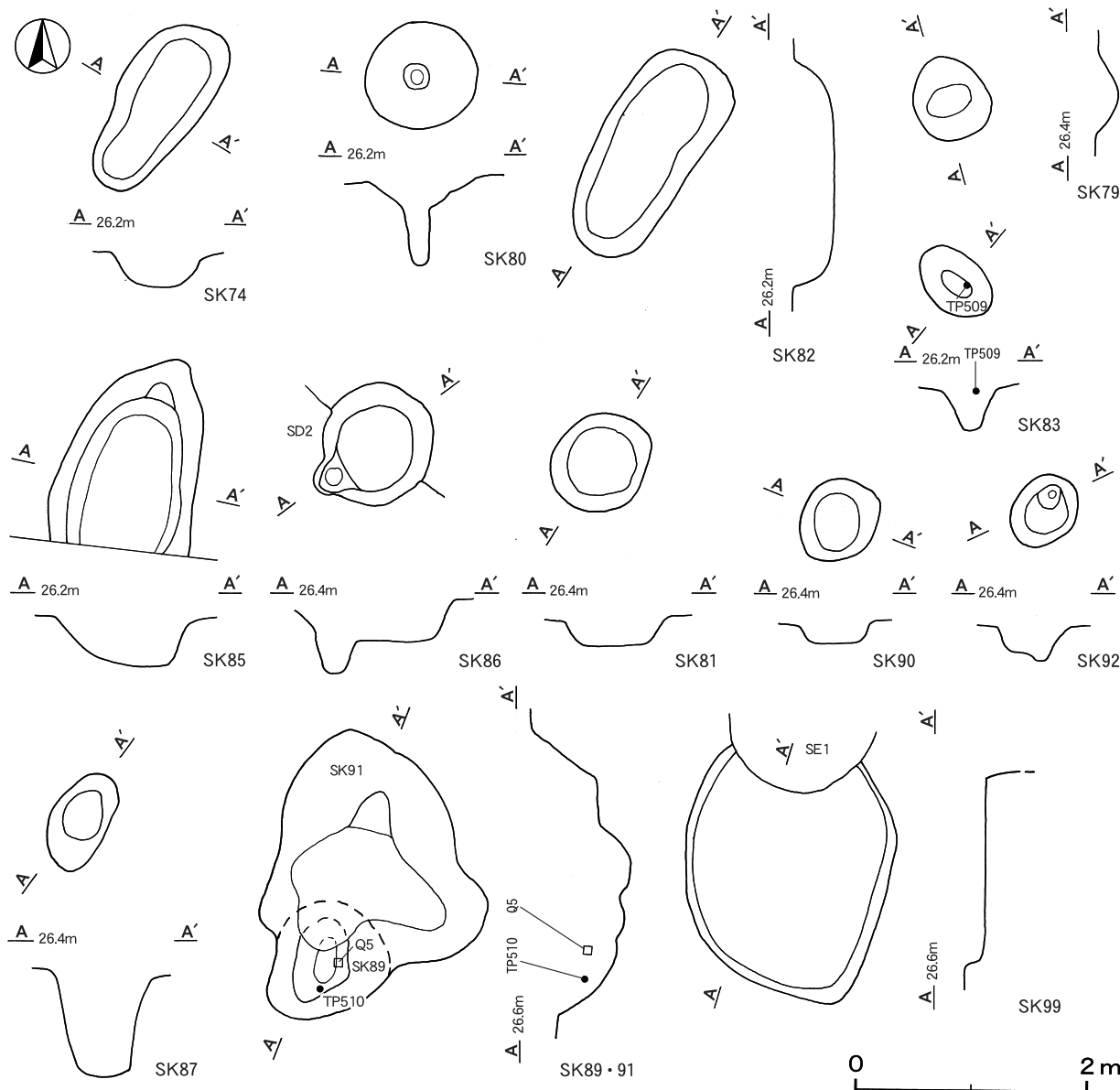
第61図 時期不明土坑実測図(1)



第62图 时期不明土坑実測図(2)



第63図 時期不明土坑実測図(3)



第64图 时期不明土坑, 第64·83·89·91号土坑出土遗物实测图

第64・83・89・91号土坑出土遺物観察表（第64図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP508	縄文土器	深鉢	長石・石英	灰褐	普通	入組三叉文 単節縄文 LR の充填施文	安行3a	SK64 覆土中	PL11
TP509	縄文土器	深鉢	長石・石英	黒褐	普通	刻文帯 対向する弧状の沈線 単節縄文 RL の充填施文	後期後半	SK83 覆土上層	PL11
TP510	縄文土器	深鉢	長石・雲母	にぶい赤褐	普通	紐線文 地文は撚糸文 斜位の条線文 懸垂する2条の沈線の施文	後期後半	SK89 覆土中層	PL11
TP511	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・細礫	にぶい赤褐	普通	地文は単節縄文 RL 沈線文	堀之内	SK91 覆土中	
TP512	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子・細礫	にぶい赤褐	普通	紐線文 地文は撚糸文 弧状の条線文 斜位・懸垂する2条の沈線の施文	後期後半	SK91 覆土中	PL11

表5 時期不明土坑一覧表

番号	位置	平面形	長径方向	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	C4j2	楕円形	N-9°-E	0.82 × 0.48	17	緩斜	平坦	自然	—	
2	C3i0	円形	—	1.15 × 1.11	33	緩斜	平坦	自然	—	SK3 と新旧不明
3	C3i0	[楕円形]	N-43°-E	0.58 × (0.30)	7	緩斜	皿状	自然	—	SK2 と新旧不明
4	C3i0	不整楕円形	N-15°-W	0.77 × 0.68	23	外傾 緩斜	皿状 平坦	自然	—	
6	D3d0	楕円形	N-40°-W	1.10 × 0.96	19	外傾	平坦	自然	縄文土器	
7	D3b0	楕円形	N-85°-E	0.98 × 0.88	40	外傾	平坦	自然	縄文土器	
8	D3b0	楕円形	N-28°-E	0.66 × 0.54	16	外傾	平坦	自然	—	
9	D3b0	楕円形	N-75°-E	0.70 × 0.62	28	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
11	D3a0	不整楕円形	N-55°-W	1.24 × 1.12	52	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
12	D3a0	楕円形	N-90°-E	1.14 × 0.92	41	外傾	平坦	人為	縄文土器・剥片	
13	D3b0	楕円形	N-31°-E	1.12 × 0.97	50	外傾	皿状	自然	縄文土器	
14	D4b1	楕円形	N-5°-W	0.58 × 0.50	40	外傾	皿状	人為	—	
15	D3a8	楕円形	N-18°-E	1.04 × 0.92	26	緩斜	平坦	人為	縄文土器	
16	D3d0	隅丸長方形	N-12°-E	2.32 × 1.08	72	外傾	平坦	人為	縄文土器	
17	D3d0	[隅丸長方形]	N-48°-E	0.94 × (0.88)	36	緩斜	皿状	人為	縄文土器	
19	D3a8	円形	—	1.02 × 1.00	74	外傾	平坦	人為	縄文土器	PG 2 P1 → 本跡
20	D3d8	円形	—	0.70 × 0.68	15	緩斜	皿状	自然	—	
21	D3d7	円形	—	0.86 × 0.84	20	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
22	D3d7	円形	—	0.98 × 0.90	14	緩斜	平坦	自然	縄文土器	SK23 → 本跡
23	D3d7	[円形]	—	1.04 × (0.66)	20	緩斜	平坦	自然	縄文土器	本跡 → SK22
24	D3b9	楕円形	N-14°-W	1.00 × 0.88	40	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
25	D3d6	[長方形]	N-33°-E	1.66 × (0.72)	84	直立	平坦	自然	—	
26	D3d6	隅丸長方形	N-36°-E	1.28 × 0.78	64	直立	平坦	自然	—	
27	D3d6	隅丸長方形	N-37°-E	1.12 × 0.62	52	直立	平坦	自然	—	
28	D3e8	楕円形	N-18°-E	0.98 × 0.76	28	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
29	D3e8	[楕円形]	N-17°-E	0.58 × (0.48)	16	緩斜	平坦	自然	—	本跡 → SK30
30	D3e8	楕円形	N-78°-E	1.96 × 1.20	38	緩斜	平坦	自然	縄文土器	SK29 → 本跡
31	D3e6	長楕円形	N-25°-E	1.12 × 0.74	22	緩斜	平坦	自然	—	
32	D3e6	楕円形	N-15°-E	0.86 × 0.72	20	緩斜	皿状	自然	縄文土器	
33	D3e6	円形	—	0.94 × 0.92	12	緩斜	平坦	自然	—	
34	D3e7	円形	—	1.10 × 1.09	66	直立	平坦	人為	縄文土器	
35	D3c8	楕円形	N-47°-W	1.66 × 1.32	24	緩斜	平坦	自然	縄文土器・剥片	
36	D3c9	楕円形	N-49°-E	1.50 × 1.22	30	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
37	D4a1	円形	—	1.52 × 1.48	34	緩斜	皿状	人為	縄文土器	本跡 → SK38
38	D4a1	楕円形	N-55°-W	1.24 × 0.90	18	緩斜	凹凸	自然	—	SK37・39 → 本跡
39	C3j1	円形	—	0.72 × 0.70	18	緩斜	皿状	自然	—	本跡 → SK38
40	D3e7	[楕円形]	N-20°-W	1.06 × (0.96)	38	緩斜	平坦	人為	縄文土器・剥片	本跡 → SK41
41	D3e7	楕円形	N-52°-W	0.90 × 0.80	8	緩斜	平坦	自然	—	SK40 → 本跡
42	D3e8	長楕円形	N-48°-W	1.24 × 0.50	28	外傾	皿状	自然	—	
43	D4b1	長方形	N-35°-E	1.96 × 1.28	72	外傾	平坦	人為	縄文土器	SI 1 → 本跡
44	D3f6	楕円形	N-39°-E	0.82 × 0.68	21	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
45	D3f5	円形	—	0.80 × 0.76	25	外傾	平坦	自然	縄文土器	
46	D3f5	長方形	N-54°-E	1.63 × 1.08	42	緩斜	平坦	自然	縄文土器・剥片	
47	D3j3	楕円形	N-12°-E	1.28 × 0.93	22	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
48	D3j2	方形	—	1.02 × 0.95	56	直立	平坦	人為	縄文土器	
51	D3f8	[楕円形]	N-50°-E	0.80 × (0.36)	8	緩斜	平坦	自然	縄文土器・石器	
52	D3g8	円形	—	1.22 × 1.04	28	外傾	平坦	人為	縄文土器	SK53 → 本跡
55	E2f0	楕円形	N-6°-E	1.00 × 0.80	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	
56	E3d1	隅丸長方形	N-60°-W	2.04 × 0.96	20	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
57	E2e0	楕円形	N-6°-E	0.92 × 0.81	22	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
58	E3c1	楕円形	N-39°-E	1.10 × 0.82	10	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
59	D3i5	円形	—	0.98 × 0.96	16	緩斜	皿状	人為	縄文土器	
60	D3h3	不定形	N-32°-W	(0.70) × (0.60)	50	直立	平坦	人為	縄文土器	
61	D3i4	楕円形	N-85°-W	0.88 × 0.66	14	緩斜	平坦	自然	—	

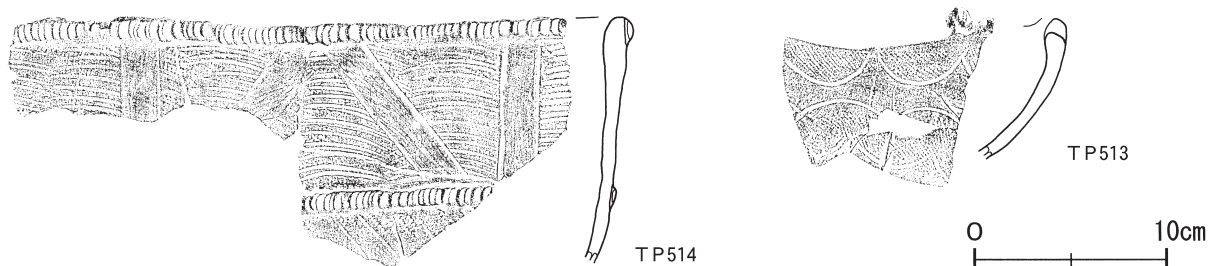
番号	位置	平面形	長径方向	規模(m,深さはcm)		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新旧関係(古→新)
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
63	E2g0	楕円形	N-10°-E	0.92 × 0.65	46	直立	皿状	自然	—	
64	E3b2	円形	—	0.98 × 0.95	32	外傾	皿状	自然	—	
65	E3e1	不整楕円形	N-70°-W	2.86 × 1.02	34	緩斜	皿状	自然	—	
66	E3c4	楕円形	N-48°-E	1.09 × 0.86	24	外傾	皿状	自然	—	
67	E3d3	円形	—	0.69 × 0.69	64	外傾	皿状	人為	—	
70	E3f3	楕円形	N-69°-E	0.98 × 0.72	54	直立 緩斜	平坦	人為	—	
71	E3g3	円形	—	0.86 × 0.84	16	緩斜	平坦	人為	—	
72	E3f3	隅丸長方形	N-35°-E	1.74 × 0.88	44	直立	平坦	人為	—	
73	E3f2	楕円形	N- 2°-W	1.03 × 0.83	72	外傾	皿状	人為	—	
74	E3g3	楕円形	N-40°-E	1.62 × 0.76	24	緩斜	平坦	人為	—	
76	E3b5	楕円形	N-51°-W	1.46 × 1.12	108	外傾	平坦	人為	—	
79	E3a4	楕円形	N-34°-W	0.74 × 0.66	18	緩斜	皿状	人為	—	
80	E2g9	円形	—	0.98 × 0.96	78	緩斜	平坦	人為	—	
81	E3a5	円形	—	0.94 × 0.88	26	緩斜	平坦	自然	—	
82	E2f9	長楕円形	N-33°-E	1.96 × 0.38	32	緩斜	平坦	人為	—	
83	E3c3	楕円形	N-49°-W	0.74 × 0.50	35	外傾	平坦	自然	—	
85	E2h9	[楕円形]	N-15°-E	(1.66) × 1.26	81	緩斜	平坦	人為	—	
86	D3i5	楕円形	N-10°-E	1.08 × 0.94	36	緩斜	平坦	自然	—	SI2A・2B→本跡→SD 2
87	E3e3	楕円形	N-24°-E	0.90 × 0.50	89	外傾	平坦	人為	—	
89	E3b6	楕円形	N-32°-E	1.10 × 0.96	46	緩斜	皿状	人為	—	SK91→本跡
90	E3c4	楕円形	N-23°-E	0.80 × 0.64	19	緩斜	平坦	人為	—	
91	E3a6	不定形	N-59°-W	2.03 × (1.33)	66	外傾	皿状	人為	—	本跡→SK89
92	E3c4	楕円形	N-30°-W	0.66 × 0.54	22	外傾	平坦	自然	—	
99	D3g5	不整長方形	N-13°-E	1.84 × 1.80	17	外傾	平坦	人為	—	SI2A・2B→本跡→SE 1

(5) ピット群 (第65図・付図)

C区調査範囲に径0.3～1.0mほどの平面形状が円形または楕円形のピットが36基確認されている。これらピットは、調査区中央部に28基のピットが集中する第1号ピット群と調査区北部にピット8基が散在する第2号ピット群として報告するが、いずれも建物跡を想定できるような配置ではなく、時期及び性格は不明である。ここでは、実測図を遺構全体図で示し、一覧表とピット計測表を掲載する。

第1号ピット群ピット計測表

ピット番号	形状	規模(cm)		ピット番号	形状	規模(cm)		ピット番号	形状	規模(cm)	
		長径×短径	深さ			長径×短径	深さ			長径×短径	深さ
1	楕円形	90 × 78	115	11	楕円形	75 × 65	115	21	楕円形	74 × 60	114
2	円形	50 × 48	50	12	楕円形	80 × 70	130	22	楕円形	66 × 54	71
3	円形	34 × 29	22	13	楕円形	80 × 52	75	23	円形	97 × 93	90
4	円形	42 × 41	12	14	円形	62 × 51	119	24	楕円形	56 × 48	69
5	円形	45 × 43	56	15	楕円形	70 × 51	52	25	楕円形	72 × 66	75
6	楕円形	50 × 43	70	16	楕円形	97 × 77	53	26	楕円形	76 × 59	55
7	円形	52 × 52	58	17	円形	43 × 38	32	27	楕円形	40 × 35	60
8	[円形]	[52] × [46]	42	18	円形	62 × 62	63	28	円形	50 × 46	54
9	楕円形	77 × 64	55	19	楕円形	79 × 65	76				
10	円形	68 × 59	54	20	楕円形	54 × 38	50				



第65図 第1号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表 (第65図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	時期	出土位置	備考
TP513	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	対向する連弧状の沈線 単節縄文RLの充填施文	後期後半	P 9 覆土中	PL11
TP514	縄文土器	深鉢	長石・石英	橙	普通	紐線文 地文は単節縄文RL 弧状の条線文 斜位・縦位の沈線区画内を磨消	後期後半	P 9 覆土中	

第2号ピット群ピット計測表

ピット番号	形状	規模 (cm)		ピット番号	形状	規模 (cm)		ピット番号	形状	規模 (cm)	
		長径×短径	深さ			長径×短径	深さ			長径×短径	深さ
1	楕円形	42×35	57	4	円形	50×46	22	7	円形	26×25	25
2	円形	45×40	28	5	楕円形	32×26	25	8	円形	26×24	26
3	楕円形	73×58	102	6	楕円形	46×(31)	40				

表6 時期不明ピット群一覧表

番号	位置	範囲		柱穴数	柱穴平面形	規模			主な出土遺物	備考 重複関係(古→新)
		東西(m)	南北(m)			長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)		
1	E 3 a0～E 3 g2	23.0	27.0	28	円形 楕円形	34～97	29～93	12～130	縄文土器	
2	D 3 a8～D 3 f6	21.0	20.0	8	円形 楕円形	26～73	24～58	22～102	縄文土器	本跡→SD 1

第3節 D区の調査と遺物

D区は、標高25mの台地縁辺部に位置し、北側は桜川低地へ、東側は谷津へ向かって緩やかに傾斜している。西側はB区に隣接する。調査範囲は南北44m、東西32mで、確認調査面積は729.8㎡である。

1 遺構の確認状況

確認面の観察により堅穴住居跡、土坑と見られる遺構が確認された。確認面の観察だけで掘り込みを行っていないため詳細は不明であり、確認状況だけを全体図に示す。

2 遺物 (第66図)

縄文土器片514点が採集している。後期初頭から晩期中葉までの土器が確認されている。主体となるのは加曾利B式土器および安行3a～3d式土器であるが、少量であるため詳細は不明である。TP番号の土器の説明は、数字番号のみの表記である。

D区出土土器の点数及び重量

時期	前期		中期		後期							
					称名寺式		堀之内式		加曾利B式			
									精製		粗製	
部位	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部
出土数	0	0	0	0	0	1	0	0	14	11	0	2
重量 (kg)	0	0	0	0	0	0.03	0	0	0.34	0.34	0	0.04

時期	後期										総点数 総重量	
	曾谷式				安行1・2式				底部片	細片		
	精製		粗製		精製		粗製					
部位	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部	口辺部	胴部				
出土数	0	0	0	0	2	0	4	0	1	290	325	
重量 (kg)	0	0	0	0	0.10	0	0.17	0	0.05	3.45	4.52	

時期	晩 期											
土器型式	安行 3 a ~ 3 d 式				前浦式		大洞式		無文土器	底部片	細片	総点数 総重量
粗・精の別	精 製		粗 製		口辺部	胴部	口辺部	胴部				
部位	口辺部	胴部	口辺部	胴部					口辺部	胴部	口辺部	胴部
出土数	10	5	1	2	0	1	0	0	0	6	164	189
重量 (k g)	0.21	0.10	0.04	0.06	0	0.02	0	0	0	0.10	1.55	2.08

第Ⅲ群 後期の土器群

A類 称名寺式 515は称名寺2式で、沈線文、連続刺突の充填施文が施されている。

C類 加曾利B式

C1類 加曾利B1式 517は横位の沈線が施文されている。

C2類 加曾利B2式 518は斜格子目文が施文されている。

C3類 加曾利B3式 516は連続刺突が施され、円形の区画内に単節縄文LRが充填施文されている。

E類 安行1・2式

E2類 安行2式 519・520は縄文帯に刻目のある貼付文がみられる。520には蛇行沈線文が施されている。

E3類 安行1・2式の粗製土器 526は横位の条線文が施されている。

第Ⅳ群 晩期の土器群

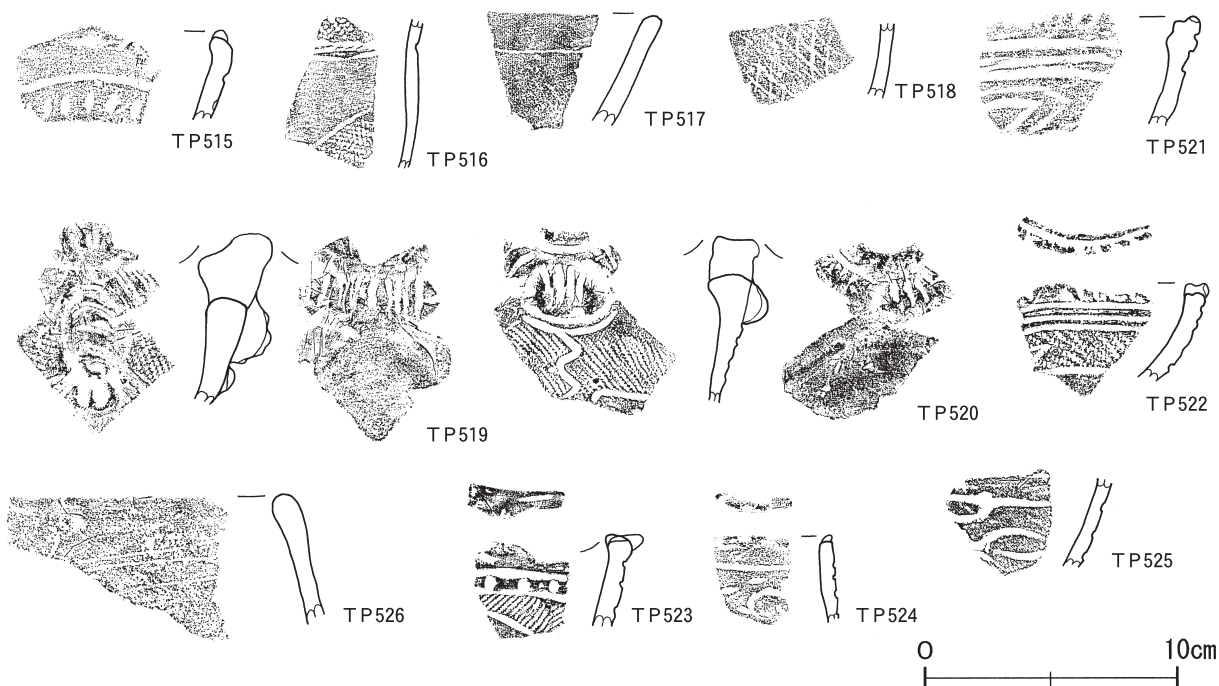
A類 安行3a～3d式

A1類 安行3a式 522は横位の沈線文と単節縄文RLを施し、口唇部に刻目が施されている。523は単節縄文LRと連続刺突が施文されている。

A2類 安行3b式 525は入組三叉文が施されている。

A3類 安行3c式 524は横位・弧状の沈線、連続刺突の充填施文が施され、口唇部に貼付文がある。

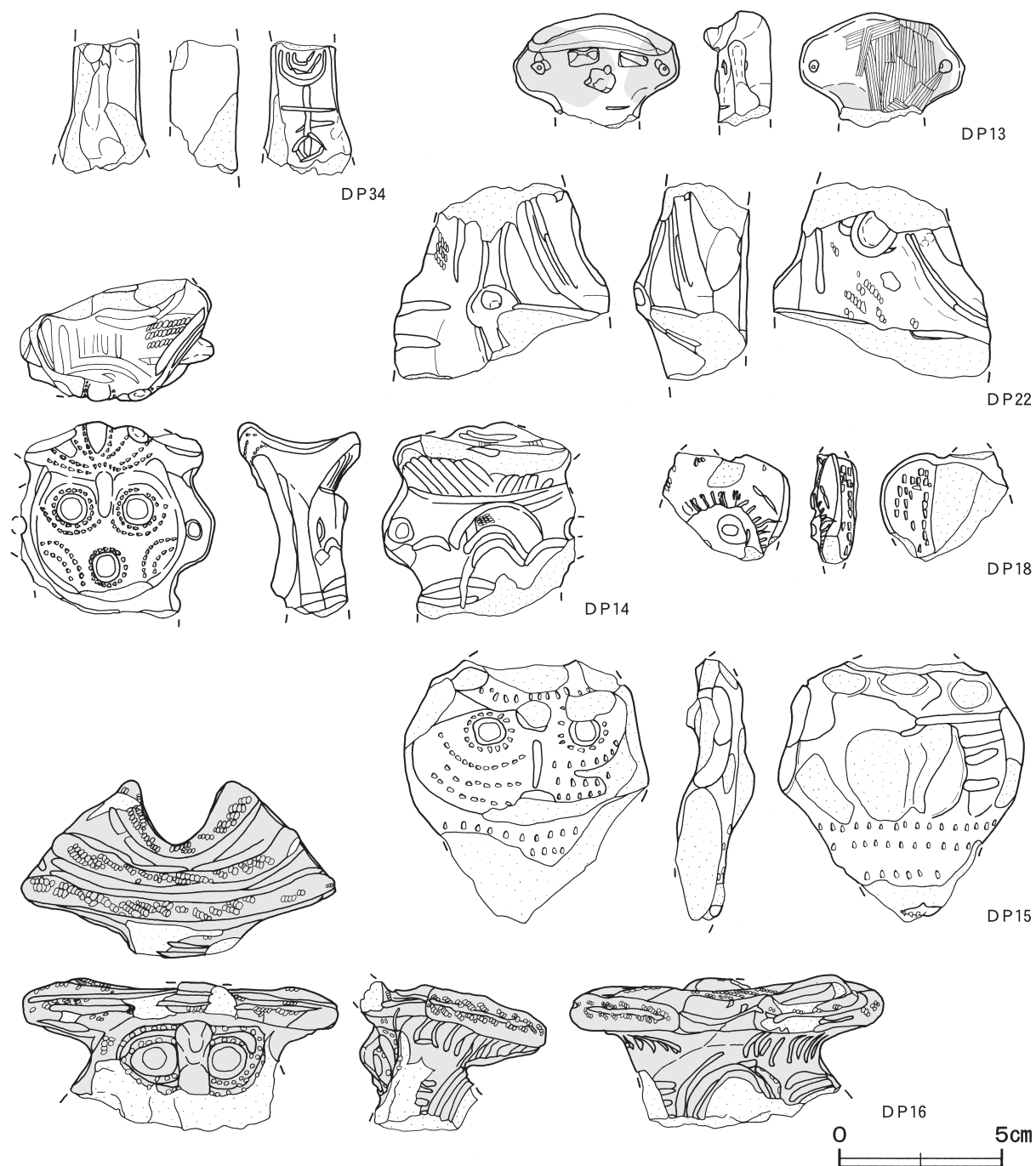
C類 前浦式 521は太い沈線による区画文と口唇部内面に沈線が施されている。



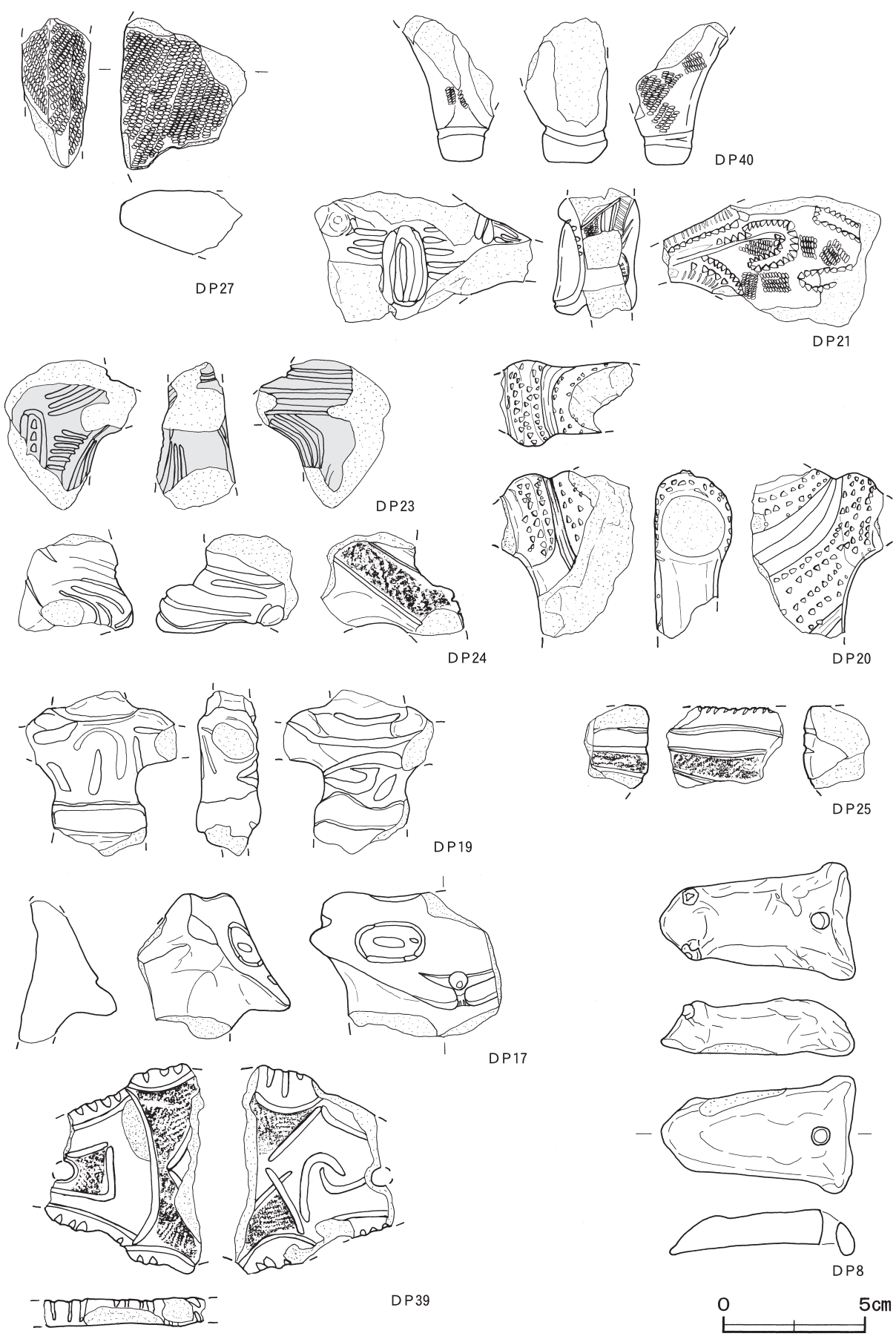
第66図 D区遺構外出土遺物実測図

第4節 特殊遺物

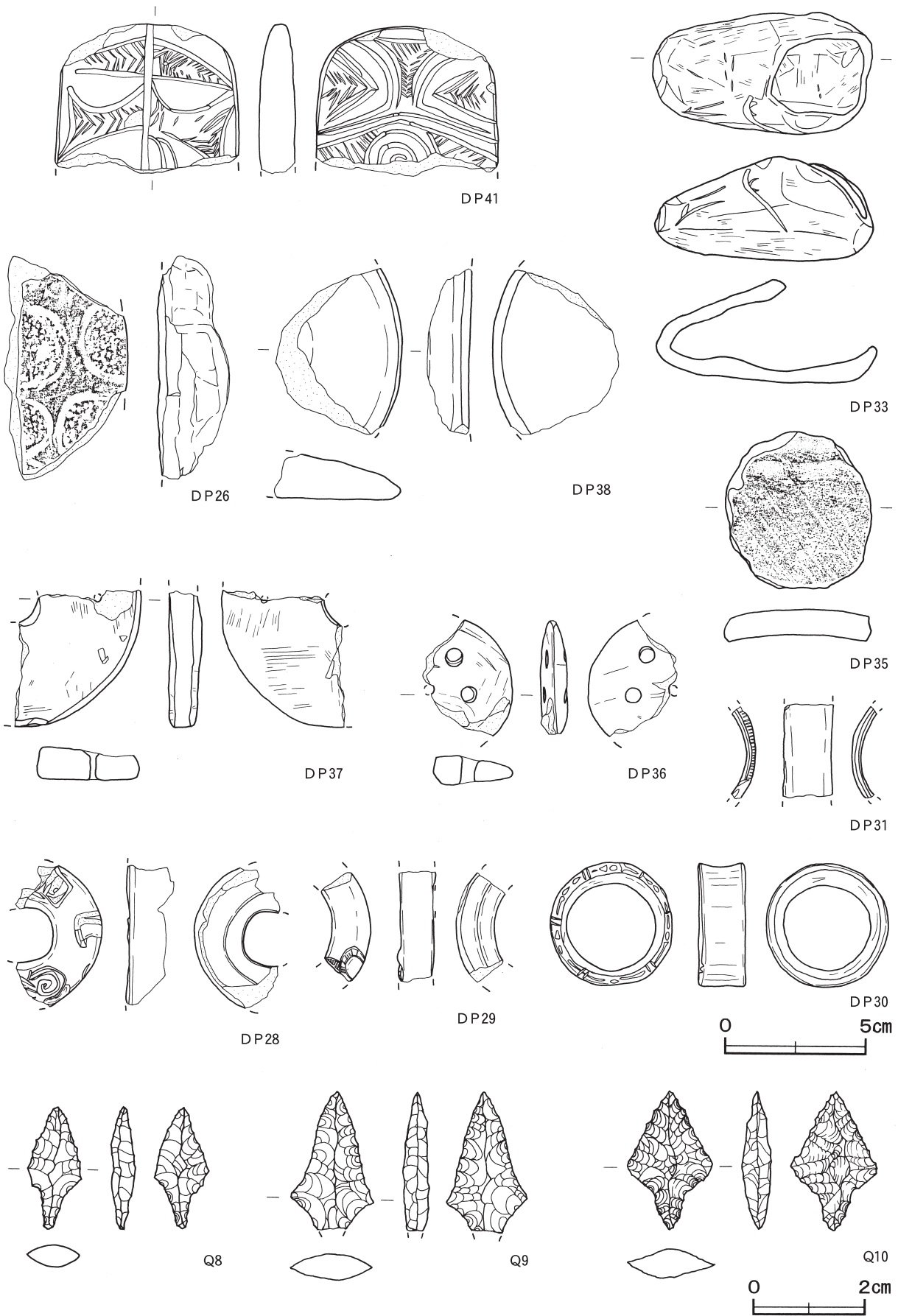
B・C・D区の調査では縄文土器のほか、特殊遺物（土製品、石器・石製品、骨角器、貝製品、剥片）が出土している。B区では土製品17点（土偶7・土版1・耳飾り2・靴形土製品カ1・土製円盤2・土器片錘3・不明土製品1）、石器・石製品30点（搔器1・磨製石斧4・磨石8・凹石5・敲石5・石錘2・石棒5）、骨角器1点（ヤス）、剥片46点が出土している。C区では土製品14点（土偶4・土版1・耳飾り1・動物形土製品2・土製円盤5・不明土製品1）、石器・石製品32点（石鏃3・石錐1・磨製石斧3・打製石斧1・磨石11・凹石5・敲石2・石棒5・石剣1）、剥片69点が出土している。D区では土製品2点（土偶）が出土している。これらの遺物について実測図と観察表で紹介する。



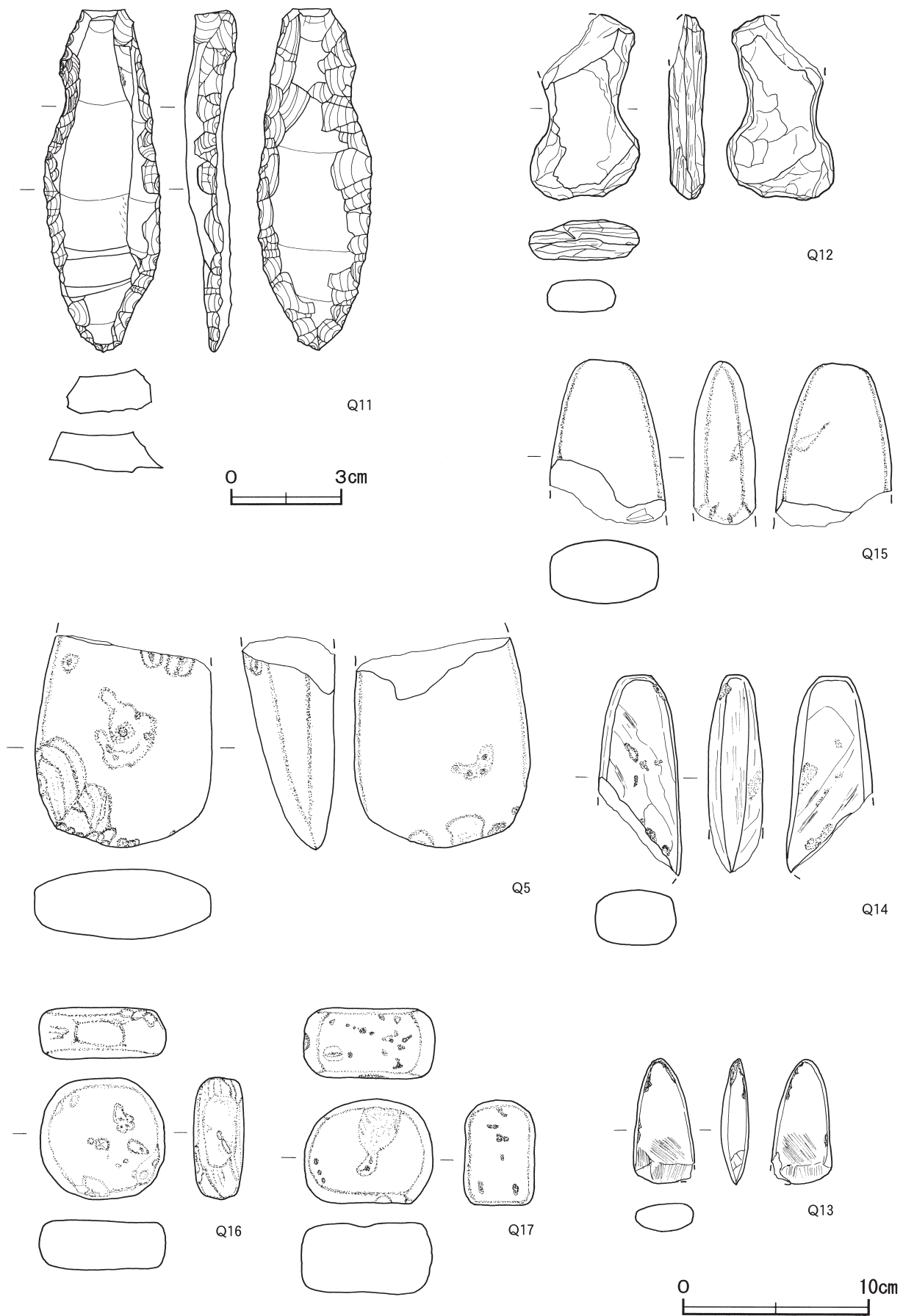
第67図 特殊遺物実測図(1)



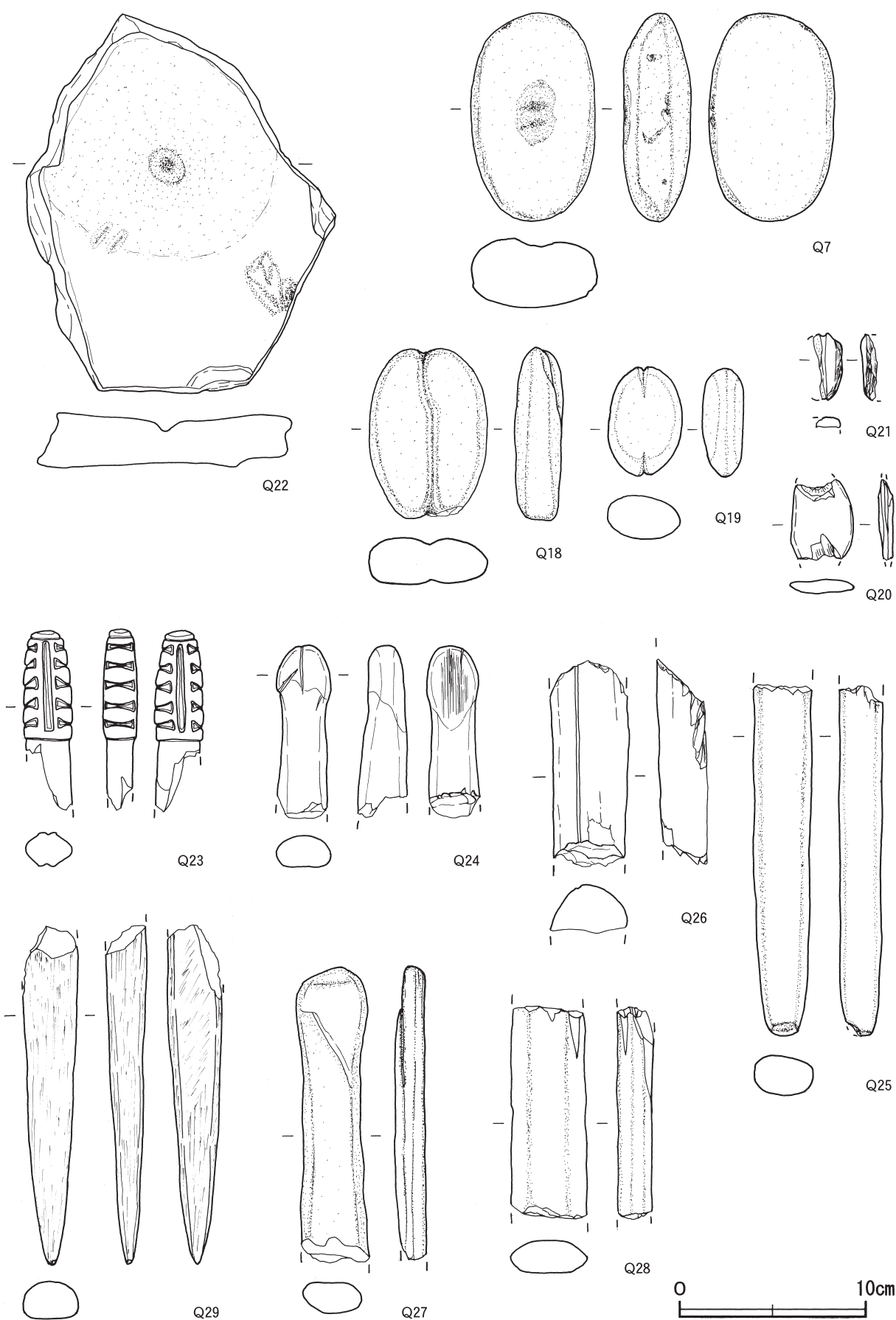
第68图 特殊遺物実測図(2)



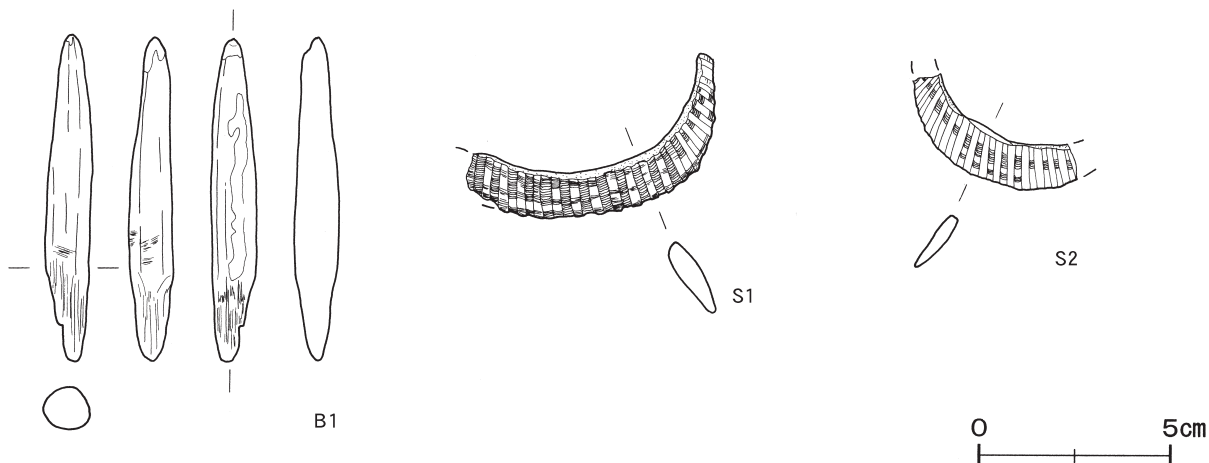
第69图 特殊遺物実測図(3)



第70图 特殊遺物実測図(4)



第71图 特殊遺物実測図(5)



第72図 特殊遺物実測図(6)

特殊遺物観察表(第67~72図)

番号	器種	長さ(径)	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP8	動物形土製品	7.0	4.3	2.1	41.7	長石・石英	対向する突起 穿孔1か所 四肢動物を表現カ	SK89 覆土中	PL15
DP13	土偶	(3.6)	5.2	2.1	(30.8)	長石・石英	眉は粘土紐の貼付 目・口・耳を刺突で表現 山形土偶	B区第6号トレンチ	
DP14	土偶	(6.0)	(6.0)	(3.8)	(81.2)	長石・石英	目・口・鼻はボタン状貼付 耳を刺突で表現 頭頂部は平坦 木菟土偶	C区確認面	PL15
DP15	土偶	(8.1)	(7.6)	2.5	(105.6)	長石	刺突文 目・鼻はボタン状貼付で表現 木菟土偶	B区北部確認面	PL15
DP16	土偶	(4.8)	9.8	5.9	(112.0)	長石・石英	刺突文 目はボタン状貼付で表現 ハート状に平坦な頭部に3条の縄文帯 木菟土偶	B区確認面	PL15
DP17	土偶	(5.2)	(6.8)	(5.5)	(79.4)	長石・石英・雲母	目は沈線 口は刺突で表現 中空 遮光器土偶カ	D区確認面	
DP18	土偶	(3.5)	(3.9)	(1.5)	(15.2)	長石・石英	頭部 目はボタン状貼付で表現 刻目文 側面と裏面に刺突文 表面に単節縄文 LR 木菟土偶	C区確認面	
DP19	土偶	(5.9)	(5.3)	2.4	(54.0)	長石・石英・雲母・赤色粒子	胸部 表面に沈線文 裏面に入組文	D区確認面	PL15
DP20	土偶	(6.0)	(4.7)	2.8	(52.8)	長石・石英・赤色粒子	右肩部 表裏に刺突文	B区確認面	
DP21	土偶	(4.7)	(7.8)	3.1	(78.1)	長石・赤色粒子	表面に沈線文と貼付文 裏面に縄文と刺突文 木菟土偶	B区第5号トレンチ	PL15
DP22	土偶	(6.1)	(6.7)	(3.6)	(104.7)	長石・石英・雲母・赤色粒子	腰部 沈線文 腹部は貼付文に刺突で表現 裏面は縄文と沈線文	C区確認面	PL15
DP23	土偶	(5.3)	(4.7)	(2.9)	(45.4)	長石・雲母・赤色粒子	左上半身 腹部は隆線に刺突文で表現 表裏面に沈線文 木菟土偶	C区確認面	
DP24	土偶	(3.4)	(5.2)	(4.1)	(50.8)	長石・石英・雲母・赤色粒子	右腰部 沈線文 裏面に縄文帯 木菟土偶	表採	
DP25	不明土製品	(3.0)	(4.2)	2.4	(27.0)	長石・石英・赤色粒子	刻目文 沈線による区画帯に単節縄文 LR 施文	B区確認面	
DP26	土版	(7.9)	(4.5)	(2.6)	(71.9)	長石・石英・赤色粒子	弧線内に刺突を充填施文	C区第1号トレンチ	PL15
DP27	土偶	(5.4)	(4.5)	(2.4)	(40.4)	長石・石英	脚部 単節縄文 RL 施文	B区確認面	
DP28	耳飾り	[5.7]	(1.8)	1.8	(14.5)	長石・雲母	L字状隆線 渦巻や四角形の沈線 内面に抉り	B区第1号トレンチ	PL16
DP29	耳飾り	[5.8]	1.3	1.4	(7.3)	長石・石英・雲母	円状隆線 三叉文 内面に抉り	C区確認面	PL16
DP30	耳飾り	4.4	1.8	0.6	20.6	長石・雲母・黒色	表面に沈線文と刺突文 三叉文 裏面無文 断面が薄い	表採	PL16
DP31	耳飾り	[5.0]	1.8	0.3	(5.1)	長石	刻目文 三叉文 豚鼻状突起 断面が薄い	B区確認面	PL16
DP33	靴形土製品カ	4.4	7.9	3.7	64.4	長石・石英・赤色粒子	無文 長軸方向にヘラ状工具による磨き	B区確認面	PL15
DP34	土偶	(4.2)	(2.7)	(2.0)	(17.8)	長石・石英	胸部 背面に円形と十字形の沈線 ハート形土偶	B区第6号トレンチ	PL15
DP35	土製円盤	5.7	4.3	0.9	38.8	長石・石英・雲母	周囲に研磨痕 反りあり	C区確認面	PL16
DP36	土製円盤	(4.2)	孔径0.5	1.0	(11.6)	長石・石英	表裏に研磨痕 中心孔1か所 小孔2か所とも両面穿孔	C区確認面	PL16
DP37	土製円盤	(4.9)	孔径[1.3]	1.2	(28.0)	長石・石英	表裏に研磨痕 中心孔1か所 小孔1か所とも両面穿孔	B区確認面	
DP38	土製円盤	(6.0)	(4.5)	(1.6)	(36.9)	長石・石英・雲母・赤色粒子	表裏に研磨痕	B区第6号トレンチ	PL16
DP39	手織形土製品カ	(5.7)	(7.4)	(1.1)	(50.0)	長石	表面に沈線文と単節縄文 RL 裏面に入組文と単節縄文 RL 側面に突起 中央部に円孔	表採	
DP40	土偶	(5.2)	(2.9)	(3.3)	(30.6)	長石・石英	脚部 単節縄文 RL 施文	表採	
DP41	土版	(5.4)	6.7	1.3	(58.4)	長石・石英	表裏に弧線文や渦巻文 沈線区画内に細密沈線による矢羽根状文	B区第1号トレンチ	PL15

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q 5	磨製石斧	(11.4)	9.5	5.0	(722.0)	緑色凝灰岩	大形の定角式磨製石斧 両面研磨 刃部敲打痕 基部欠損	SK89 覆土中層	PL16
Q 7	凹石	11.2	6.8	3.6	419.0	安山岩	凹み1か所	SD2 覆土中	PL17
Q 8	石鏃	2.15	0.95	0.45	0.50	チャート	両面押圧剥離 凸基有茎鏃	C区確認面	PL16
Q 9	石鏃	(2.47)	1.44	0.45	(1.20)	黒曜石	両面押圧剥離 凸基有茎鏃 茎部欠損	E 3 e3	PL16
Q10	石鏃	2.50	1.50	0.50	1.10	チャート	両面押圧剥離 凸基有茎鏃	C区確認面	PL16
Q11	搔器	9.2	3.1	1.1	38.8	頁岩	両縁調整剥離	B区第7号 トレンチ	PL16
Q12	打製石斧	10.1	5.9	2.2	(139.1)	ホルンフェルス	分銅形 刃部の一部が欠損	E 3 e3	PL17
Q13	磨製石斧	(6.7)	(3.3)	1.5	(52.5)	蛇紋岩	小形の定角式磨製石斧 両面丁寧な研磨	表採	PL16
Q14	磨製石斧	(10.7)	4.7	3.0	(215.0)	緑色凝灰岩	刃部欠損	C区確認面	PL16
Q15	磨製石斧	(8.8)	6.3	3.4	(302.0)	緑色凝灰岩	刃部欠損	表採	PL16
Q16	磨石	16.5	16.7	2.7	188.0	安山岩	全面に磨痕	B区第1号 トレンチ	
Q17	磨石	5.7	7.1	3.8	244.0	安山岩	全面に磨痕	C区確認面	
Q18	石錘	9.3	6.4	2.5	302.0	安山岩	長軸に溝が全周	表採	PL17
Q19	石錘	5.9	3.9	2.2	73.0	石英斑岩	上下に刻み目	B区確認面	PL17
Q20	石錘	(4.3)	3.5	0.8	(16.4)	粘板岩	上下欠損	B区第7号 トレンチ	
Q21	石錘	(3.5)	(1.6)	0.5	(3.7)	粘板岩	長軸に溝 裏面欠損	表採	
Q22	凹石	20.4	16.7	2.9	1460.0	雲母片岩	全面に磨痕 表面中央部に凹み1か所	C区確認面	
Q23	石棒	(9.7)	2.5	1.8	(59.6)	粘板岩	有頭 表裏面中央部の長軸方向に溝 両側面に横位5 単位のI字文	表採	PL17
Q24	石棒	(9.2)	2.9	2.7	(83.9)	粘板岩	有頭 無文	E 3 b6	
Q25	石棒	(18.9)	3.1	2.4	(193.9)	粘板岩	基部 無文 丁寧な研磨 基部に敲打痕	B区確認面	PL17
Q26	石棒	(11.1)	4.1	(2.5)	(167.7)	粘板岩	柄部 長軸方向に沈線 裏面欠損	表採	
Q27	石剣	(15.9)	3.8	1.6	(183.1)	緑泥片岩	頭部 柄部との明確な区分けがない 表裏面平坦に研 磨 Q 28 と同一個体カ	表採	PL17
Q28	石剣	(11.3)	4.0	1.9	(168.8)	緑泥片岩	柄部 表裏面平坦に研磨 Q 27 と同一個体カ	表採	PL17
Q29	石剣	(18.2)	2.8	2.2	(130.5)	緑泥片岩	鋭角な基部残存 無文 丁寧な研磨	E 3 d5	PL17

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
B1	ヤス	8.5	1.2	1.2	10.0	鹿角	硬直で鋭角	B区確認面	PL17
S1	貝輪	(6.6)	(2.1)	0.5	(14.3)	サルボウ	縁辺部に磨痕 未製品カ	表採	PL17
S2	貝輪	(4.4)	(1.7)	0.3	(6.0)	サルボウ	縁辺部と表裏面に磨痕	表採	PL17

第6章 ま と め

今回の調査では、縄文時代前期から晩期中葉の遺物が検出されており、後期中葉から晩期初頭のもものが主体となっている。遺構は貝塚のほか堅穴住居跡や土坑があり、縄文時代後期初頭から晩期中葉の土器が出土している。ここでは、時期区分と集落の変遷、第二の道具、当遺跡の景観について概略を述べ、まとめとしたい。

1 土器型式による時期区分

縄文時代前期から晩期中葉までの土器が出土しているが、主体となるのは後期から晩期までの土器であり、ここでは主体となる時期を第Ⅰ期から第Ⅵ期に区分し、各時期の概要についてまとめる。

第Ⅰ期（称名寺式期） C区第2A号住居跡の土器埋設ピット出土土器は、深鉢で口縁部に特徴のある突起をもち、胴部には沈線による文様が施されている。また、A・B区の斜面貝層からはL字状の2条の沈線間に刺突文が充填施文されている土器が出土しているが少量である。

第Ⅱ期（堀之内1・2式期） 堀之内1式土器は交叉する沈線文が施文されたものや懸垂を基準に放射状に広がる数条の沈線による文様を施されたものが出土している。また、堀之内2式土器は区画文が2条の沈線で施文されたものが出土している。これらの土器は、A区の第1・2号トレンチとB区の斜面貝層から少量出土している。

第Ⅲ期（加曽利B式・曾谷式） 加曽利B1式土器は内・外面に横位数条の沈線文が施され、沈線間にクランク文などが施文されている。加曽利B2式土器は矢羽根状文や斜格子目文が施された土器であり、精製土器と粗製土器が出土している。加曽利B3式土器は口縁に刻文帯をもち、縄文や弧線文が施文されている。これらの土器は、A・B区の斜面貝層から多量に出土しており、特にB区からの出土量が多い。しかし、C区の遺構内からはほとんど出土していない。曾谷式土器は、口辺部に下向の連弧文、胴部には上下に向かい合う連弧文が施文されているが、当遺跡全体から少量しか確認されていない。

第Ⅳ期（安行1・2式） 安行1式土器は波状口縁もしくは平口縁で、口辺部に横位3～5条の縄文帯上に貼付文が施されたものである。安行2式土器は刻目のある貼付文が施されたものである。粗製土器は、紐線文があり、弧状の条線文が施されているものが多い。これらの土器は、A・B区の斜面貝層、C区の遺構内から多量に出土している。

第Ⅴ期（安行3a・3b式） 安行3a式土器は三叉文が施されたもの、安行3b式土器は入組三叉文が施されたものである。また、区画文内に細密沈線文が施されたものがいわゆる「姥山式」に相当し、同時期のものである。粗製土器は、紐線文が消えて縦位や斜位あるいは弧状に沈線文が施されている。これらの土器は、A・B区の斜面貝層、C区の遺構内から多量に出土している。

第Ⅵ期（安行3c・3d式） 安行3c式土器は沈線と刺突文をもつもの、安行3d式土器は沈線文をもつものが、それぞれ出土している。また、幅広の沈線文をもつ前浦式土器、入組三叉文・羊歯状文・雲形文をもつ大洞式土器も出土している。これらの土器はA・B区のトレンチ内から出土しているが少量である。

2 集落の変遷

ここでは、土器型式による時期区分に基づき、貝塚の形成と終焉及び各時期の集落構成について述べていく。

第Ⅰ期以前（前・中期） 土器が少量確認されているだけで、遺構は検出されていない。猟場の領域であった可能性が想定される。

第Ⅰ期（後期初頭） 称名寺2式期が集落開始期である。第2A号住居跡1軒が検出されており、埋設土器が確認されている。当貝塚全体からの出土遺物は少量であり、貝層は形成されていない。

第Ⅱ期（後期前葉） 堀之内1式期の遺物は少量であり、竪穴住居跡や土坑は検出されていない。堀之内2式期は、A区斜面貝層の堆積開始時期である。土器の出土量は若干増加するが、竪穴住居跡や土坑などの遺構はみられない。

第Ⅲ期（後期中葉） 加曾利B1～3式期では、A区斜面貝層から土器と動物遺存体が多量に出土しており、斜面貝層内から加曾利B2式土器を伴う竪穴住居跡の覆土と考えられる土層1か所が確認されている。また、B区斜面貝層の中層（第3・7・10・11層）からも、この時期の土器が多量に出土しており、貝層形成の最初の盛期と考えられる。C区の遺構確認面からも多量の土器が出土しているが、本時期の遺構は検出されていない。しかし、斜面貝層の広がりや当時期の土器が多量に検出されていることは看過できない。未調査部分に本時期の集落が形成されていた可能性が想定される。

第Ⅳ期（後期後葉） 安行1・2式期は遺構数が増加する時期である。第Ⅲ期に引き続いて、A区斜面貝層から土器や動物遺存体などが出土している。本時期の竪穴住居跡はA区の斜面貝層内に竪穴住居跡の覆土と考えられる土層1か所と、C区で第2B号住居跡が検出されている。土坑は4基検出され、多量の遺物が出土している。B区斜面貝層の主体土器は当時期のものであり、中層（第7・10層）から小片が多量に出土している。

第Ⅴ期（晩期前葉） 安行3a・3b式期の遺構は、C区の第53・54・69・97号土坑が該当する。第53・54・69号土坑では、第Ⅳ期と本時期の土器が混在しており、後期末～晩期前葉と考えられる。A区斜面貝層の終焉はこの時期であるが、多量の土器や動物遺存体が出土しており、大洞式系土器の出土も多い。

第Ⅵ期（晩期中葉） 安行3c・3d式期では、遺構はみられない。貝層直上の遺物包含層から土器が出土しているが、少量である。これ以後の土器は確認できず、当遺跡の終焉は当時期となる。

3 第二の道具について

当遺跡では、土偶、動物形土製品、土製耳飾り、石棒・石剣などが出土している。これらは、日常生活道具とは考えにくい人工物であり、「第二の道具」といえる¹⁾。ここでは、遺物の形態や様相について確認し、当遺跡における第二の道具の特徴について記述する。

土偶 土偶は19点出土している。ここでは、瓦吹堅氏の変遷²⁾をもとに、出土土偶について述べる。当遺跡出土の土偶は、後期前葉から晩期までの時期のものが出土している。DP34はハート形土偶の胴部で、背面に沈線による文様をもっている。DP13は後期中葉に展開する山形土偶で、刺突によって目・口・耳を表現し、ほかは無文である。DP1・DP7・DP9・DP14～DP16・DP18・DP21・DP23・DP24は後期後葉の木菟土偶で、ボタン状の貼付文によって目・口が表現されている。DP17は晩期の土偶で、中空で遮光器土偶の系列の中で関東化したものである。

動物形土製品 動物的造形の土製品2点と浅鉢1点が出土している。ここでは、それらについて、時間的・地域的位置付けを考えてみたい。

DP8は中空の半卵形で、四肢動物を表現したものである。表面に突起があり、耳・足が表現されているが、ほかに文様はみられない。下半身に穿孔があることから、装身具の可能性もある。形態から、栃木県藤岡神社遺跡（後期）、稲敷市福田貝塚（後期）、土浦市神立平遺跡の出土品に類似している。DP3は大半を欠損した海

獣形土製品であり、一部だけが残存している。表面は赤彩されており、側面に鱗状の張り出しがある。文様は磨消縄文と三叉文が施されており、安行3a式期に相当すると考えられる。類例に埼玉県東北原遺跡（晩期）、山形県作野遺跡（晩期）、北海道美々4遺跡（晩期）の海獣形土製品が知られている。P37は赤彩された動物的造形の浅鉢であり、亀と考えられる頭部と尾部が貼付されている。表面は三叉文と丁寧な磨消縄文がみられ、文様の特徵から安行3a式期に相当するものと考えられる。

DP8は、形態と様相から鬼怒川流域に分布する後期の所産とみられる。また、DP3、P37は文様と形態から、晩期前葉の時期と考えられ、特に、中空の海獣形土製品は、北海道から東北、関東地方に分布が認められている。

土製耳飾り 土製耳飾りは、8点出土しているが、残存状況が良好なもの6点を図示した。設楽博己氏の分類基準³⁾を参考にして、形態と様相から分類し、時間的位置付けを考えてみたい。

出土した土製耳飾りには厚手のもの（DP4・DP5・DP28・DP29）と薄手のもの（DP30・DP31）がある。DP4は、環状で厚手に作られた無文のII1A1類である。DP28は「内面に抉りを入れた、断面蕨状」形態の沈線モチーフを有し、DP5は対向する浮文を施したもので、両方ともII2E3類である。短い三叉文を施したDP29はII2F類である。薄手のDP30・DP31は、DP30が三叉文を施したIV2F類（後期末～晩期初）、「豚鼻状突起」を有し、三叉文を施したDP31はVC2類である。

DP4の類例は、栃木県乙女不動原遺跡⁴⁾、DP30・DP31は埼玉県奈良瀬戸遺跡⁵⁾の出土品があり、後期末から晩期初頭のものである。DP5及びDP28は関東地方に広く分布が認められる類型である。その類例は埼玉県真福寺貝塚の出土品⁶⁾にあり、安行3a・3b式期のものである。

石棒・石剣 石棒13点、石剣5点が出土し、残存状況の良好なものだけを図示した。ここでは、形態と様相から、その時間的位置付けについて検討する。

頂部片はQ23・Q24・Q27である。Q23は「I字文」をもつ頂部片であり、側面に左右対称の「I字文」5列を配している。Q24は無文の頂部であり、頂部と柄部は明確に区分されていない。Q27はやや膨らむ無文の頂部で、全体的に平坦な形態である。柄部はQ25・Q26・Q28・Q29で、すべて無文であるが、形態がいずれも多少異なっている。Q25・Q29は無文の基部が残存し、やや鋭角な形態を示している。Q26は頂部と基部が欠損した破片である。縦に沈線が認められ、断面は円形である。Q28は平坦な破片で、Q27と同一個体の可能性がある。

「I字文」の認められるQ23の類例は、常陸大宮市小野天神前遺跡の出土品に、また、無文のQ24～Q29は、頂部と基部の形態から水戸市金洗沢遺跡に類例が求められる。当遺跡の石棒・石剣は鈴木素行氏の言う「小野型石棒」⁷⁾に相当し、晩期前葉から中葉の時期と考えられる。

貝輪 貝輪は2点出土している。素材はサルボウであり、縁辺を短冊状に加工している。S1は、上下が摩滅し、表面は磨きの認められない未製品である。S2は、周囲と表面を平坦に研磨した完成品である。現利根川下流域では、貝輪の出土頻度が高いことが地域的特徴である⁸⁾とされ、当遺跡で出土した貝輪の存在は、利根川下流域が貝輪製作の中心的地域であったことを追認するものといえよう。

4 旭台貝塚の景観と周辺の遺跡

当遺跡は、桜川右岸の低地から入り込む谷津に面する台地縁辺部に位置している。谷津を挟んだ東側の対岸には、中根中谷津遺跡が所在しており、この谷津を囲むように集落が形成され、その隣接地に貝塚が形成されたものと考えられる。貝塚を形成する貝は、河口などの汽水域に棲息するヤマトシジミが90%以上を占

めている。そのほか、ハマグリ・アカニシ・サルボウなどもみられるが、その量は少ない。当時の人々が貝を採取するとき、貝種の選別が行われた可能性も想定されるが、当貝塚の構成貝種は、後・晩期に砂泥域が広がっていた当桜川低地の環境によると考えられる。また、イノシシ・シカ・クマなどの獣骨やタイやスズキの魚骨も出土しており、周辺地域や湾内から捕獲した多様な食料を糧としていたと考えられる。

A区の斜面貝層は、純貝層及び混土貝層であり、土器や動物遺存体は良好な残存状態で多量に出土していることから、人為的な堆積と想定される。しかし、B区の斜面貝層については、そのトレンチ調査によって、流れ込んだ土が2m以上厚く堆積し、土器の小破片が包含されている状況が確認されている。また、土層中にロームの混入があまり見られないことから、B区南側の谷津は自然堆積によって埋没した自然地形であり、その堆積状況から、谷津の古地形は現地表面より2m以上深かったと考えられる。また、B区斜面貝層の貝は破碎率が高く、混土率も高いことから、より高位の北部A区側からその深い谷津に向かって流れ込んだ土による再堆積層と想定される。

こうしたA・B区の斜面貝層の形成は、縄文時代後期前半から晩期前半の時期と考えられる。後期前葉の堀之内2式期に斜面貝層の南側から堆積が始まり、加曽利B式期から安行1・2式期が最盛期となり、安行3a・3b式期で終焉を迎えている。その後、貝層直上の遺物包含層から安行3c・3d式期から前浦式期の土器も確認できることから、貝塚形成の終焉後も集落として継続して利用されたものと想定される。

また、前述したように、当遺跡は称名寺式期が集落の開始時期となるが、その後の遺構はしばらくみられない。その後、加曽利B式期の竪穴住居跡1軒が確認され、主体的に遺構が形成されるのは安行1・2式期から安行3a・3b式期である。一方、貝塚の形成は堀之内2式期から始まり、安行3b式期で終焉となる。このように遺構と貝層形成には時期的なズレがみられる。この点は、谷を挟んで位置する中根中谷津遺跡に注目する必要がある。この中根中谷津遺跡では、堀之内1式期の竪穴住居跡9軒、堀之内2式の竪穴住居跡1軒、土坑内貝層4基が確認されている。また、晩期前葉の住居跡が、調査区北西部のエリア際に1軒（第10号住居跡）確認されており、調査区域外に晩期の住居跡が展開されている可能性が指摘されている⁹⁾。

前田潮氏は、貝塚遺跡を残した縄文人の居住空間が隣接する包蔵地にある可能性を指摘しており¹⁰⁾、川口武彦氏は、当貝塚と旭台貝塚東遺跡（中根中谷津遺跡）との間には微妙な時期差がみられることに注目し、両者に密接な関係があることを指摘している¹¹⁾。当貝塚の空白時期である堀之内1・2式期に中根中谷津遺跡で集落が形成されたと想定できることは、当貝塚と密接な関係を提示している居住空間ということがいえるであろう。また、中根中谷津遺跡の第10号住居跡は、当遺跡の東側で谷津を挟む対岸に位置しており、その出土遺物は当遺跡の貝層及びC区の遺構から出土した遺物と類似性がみられることから関連性が指摘できる。

註

- 1) 小林達雄 『縄文人の世界』 朝日新聞社 1996年7月
- 2) a 瓦吹堅 「茨城県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集』 国立歴史民俗博物館 1992年3月
b 瓦吹堅 『第10回特別展山野を駆ける土偶その移り変わり祈りの道具』 土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場 2005年3月
- 3) 設楽博己 「土製耳飾」『縄文文化の研究 9 縄文人の精神文化』 雄山閣 1995年3月
- 4) 小山市 『小山市史 史料編 原始・古代』 1981年3月
- 5) 柳田敏司・川崎義雄ほか 『奈良瀬戸遺跡』 大宮市教育委員会 1969年
- 6) 甲野勇 『埼玉県柏崎村真福寺貝塚調査報告』 1968年6月
- 7) a 鈴木素行 「ケンタウロスの落とし物 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒について―」『婆良岐考古第24号』 婆良岐考古同人会 2002年5月
b 鈴木素行 『本覚遺跡の研究 ―関東地方東部における縄文時代晩期の石棒製作について―』 2005年3月
- 8) 齋藤弘道 「茨城の縄文時代貝塚(4)」『茨城県立歴史館報第28号』 茨城県立歴史館 2001年3月
- 9) 川村満広 「(仮称)中根・金田台地区特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ 中谷津遺跡Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第139集 1998年3月
- 10) 前田潮 『筑波大学先史学・考古学研究調査報告Ⅵ「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究 昭和63年度～平成2年度文部省特定研究経費による調査研究概要』 筑波大学 1991年
- 11) 川口武彦 「Ⅱ. 縄文時代」『霞ヶ浦町遺跡分布調査報告書―遺跡地図編―』 霞ヶ浦町教育委員会・筑波大学考古学研究室 2001年3月

付 章

旭台貝塚の動物遺体

西本 豊弘

はじめに

旭台貝塚より貝殻とともに多くの動物遺体が採集された。それらは、茨城県教育委員会による試掘の際に出土したものと、2008年度の発掘で出土したものがある。良好な貝層は県による試掘で確認されたものであり、ヤマトシジミを主体としてハマグリ・シオフキ・アカニシを少量含むものであった。2008年度の発掘調査で確認された貝層は、本来は台地の平坦部に形成されていたものが耕作などによって台地下の斜面に2次的に動かされたものであった。台地上には所々に貝殻のブロックが見られたが、その地点に本来の貝層が分布していたのであろう。この攪乱貝層もヤマトシジミを主体とするものであった。動物遺体の内容は表と写真図版に示したとおりであり、その内容を簡単に説明する。

なお、この資料の分類では西本研究室の金憲爽さんと太子タ佳さんの協力を得たことに感謝します。

1 貝類

この遺跡の貝層はヤマトシジミを主体としていた。殻長25mm程度がよく成育したものもあったが、それよりも小さいものが多い。ヤマトシジミに次いで多いのはハマグリであったが、殻長3cm以下の中型から小型のものが多かった。その他に目立ったものはアカニシであり、刺がないタイプと刺が張り出したものと無いものが見られた。その他ではシオフキ・サビシラトリガイ・ウバガイ・ベンケイガイ・オオタニシ・ヒタチチリメンカワニナ・イシガイ科の1種が見られた。ベンケイガイは貝輪の製作のために持ちこまれたものであろう。

2 魚類

マダイ・クロダイ・ボラ・スズキが見られた。そのうちスズキが多いが、骨が大きいので採取されたのであろう。小さな魚類はおそらく貝層に含まれていたと思われるが、内容は不明である。

3 鳥類

ガンカモ類の中で、ヒシクイより少し小さいガン類が少量含まれていた。また、タカの中手骨が1点採集されていた。トビよりもかなり小さなタカで、おそらくハヤブサ程度の大きさのタカと思われる。なお、この他にカラスの骨が5点採集されているが、骨質の保存状態から見て縄文時代のものではなく現代のものであろう。

4 哺乳類

シカとイノシシが主体である。上下の顎骨ではイノシシが多いが四肢骨ではシカが多い。おそらく採取時点で大きな骨が採取されたためのバイアスであろう。シカ・イノシシともに縄文後期の他の関東地方出土の骨格と遜色の無い大きさである。

その他の獣類ではアナグマの下顎骨1点とテンの大腿骨1点、ツキノワグマの指の先端の骨である末節骨が1点みられた。なお、この他にネコの上腕骨が左右1点筒と馬の歯の破片が3個含まれていた。これらはすべて先に述べたカラスの骨と一緒に採集されており、現代のものと同様に推測される。

表1 シカ・イノシシの出土内容

部位	左右	残存部位	シカ	イノシシ	部位	左右	残存部位	シカ	イノシシ
角			落各3 破片:36					(1)	(1)
頭蓋骨	後頭部		後頭部破片:5	後頭部破片:6	脛骨	L	近位部	(1)	(1)
	その他		角+角座:3	頰骨:L2, R2		R	中間部	2(1)	3(1)
環椎			3	4	踵骨	L	遠位部	3	2(2)
軸椎			(1)	2		R	中間部	1	1
肩甲骨	L		3	1(1)	距骨	L	遠位部	2(4)	1(1)
	R		4	7		R	近位部	8	2
上腕骨	L	近位部	2	3(2) [2]	中手骨	L	近位部	3	3(1)
		中間部	2			R	遠位部	7	
	R	遠位部	2(1)			L	近位部	3	
		中間部	2			R	遠位部	3	
橈骨	L	近位部	2	4(1)	中足骨	L	近位部	2	
		中間部	1			R	遠位部	1	
	R	遠位部	3(1)		2(1)	中手・中足骨		5	30(3)
		中間部	3		2	指骨	基節骨	12(1)	4(1)
	遠位部	2	4	中節骨	14(1)				
	遠位部	1	10(1)	末節骨	5				
尺骨	L		1	11	その他	四肢骨	破片:10	破片:7	
	R		3			1	岩臼骨	L	2
寛骨	L	寛骨臼	3	1	R	膝蓋骨	1		
	R	腸骨	1		1	仙椎		5	
大腿骨	L	近位部	(1)	(2)	R	腓骨	遠位部	1	
		中間部	2		2	総計		232	153
	R	遠位部	2(1)		(2)				
		中間部	(2)		2				

*数字は成獣, ()内の数字は若獣, []内の数字は幼獣を示す。
 **Lは左, Rは右を示す。
 ***近位部, 中間部, 遠位部は各部位の心臓に近い順である。

表2 シカ・イノシシの上・下顎骨と残存している歯

獣名	部位	左右	顎骨があるもの				遊離歯					
			L		R		L			R		
			部位	備考	部位	備考	部位	点数	備考	部位	点数	備考
イノシシ	上顎		(XM123)		(P12)		I1	3	3	I1	3	
			(m34)		(XP3X)		C	3	オス2, 不明1	C	4	オス3, 不明1
			(M1)		(M2)		P34	1		P1	1	
			(M123)		(M3)		M2	1		P2	1	
			(XXP23)	メス	(P4M123)		M3	1		M3	1	未出
			(XM12)		(M3)							
	下顎		(P34M12)		(m4M1)	若						
			(XM2)		(m234M1)	幼						
			(M3)		(CXX)	オス						
			(P34M1)									
			(XM12)									
			(IXXXXX) ①		(I1) I2 ①		I1	3		I1	3	
シカ	上顎		(I12XCXX) ②	オス	(I12X) ②	メス	I2	4	若2, 成2	I2	3	若1, 成2
			(I12X) ③		(XX) ③		I3	1		I3	2	
			(XX) ④		(XXXm2X) ④	幼	C	10	オス4, メス3, 不明:3	C	6	メス4, 不明2
			(XXXCP234X) ⑤		(XX) ⑤		P3	1		P2	1	
			(XXXCP23) ⑥	オス	(XXCX) ⑥	オス	P4	1		P4	1	
			(XXX)		(XM3)	亜成	M1	1		M1	2	
	下顎		(M12)	亜成	(M123)	成	M2	1	亜成	M2	2	若1, 成1
			(XP34M123)	亜成	(XM3)	亜成	M3	1	亜成:1, 成:3	M3	3	未出2, 成1
			(XXP4X)	メス	(XM3)	亜成						
			(m4M1)	若	(M12)							
			(M3)	成	(M123)	亜成						
			(P23XX)	成	(M123)							
	(P4)		(M3)									
	(XM1X)		(XXP34M12)	オス								
	(M23)	成	(M3)									
	(M23)	成	(XXP23)									
	(P4M12)	亜成	(P234M1)									
	(M12)	亜成	(M3)									
	(M1)		(M23)	亜成								
	(XP34)		(XM12)	若								
	(XXP4M12)	亜成	(M3)									
	(XP234)	成	(M3)									
			(M23)	成								
			(M23)	成								
			(M23)	成								
			(m4M1)	若								
シカ	上顎		(M12)		(M23)		P3	2		P3	1	
			(XP34M123)		(P2X)		M2	3		M2	2	
下顎		(P4M123)								M3	2	
		(P234)										
		(P2~M3)	亜成	(P23X)	成	I1	2		M2	4		
		(P23 4M123)	成	(P4M1)	亜成	P1	1		M3	4		
		(P234)	成	(P34M123)	成	M3	4	亜成	P4M123	2		
		(XM12)		(M23)	成	P234M123	2					
	(P234M123)	成	(P234)									
	(P234M1)		(M3)	亜成								
	(P234M123)	成	(M23)									
			(M3)									
			(XP3)	成								
			(M1)									

*年齢の幼, 若, 亜成, 成は幼は3ヶ月~6ヶ月, 若は7ヶ月~1.5年, 亜成は1.5年~2.5年, 成は2.5年以上を示す。
 円数字は同じ個体を示す。*()は骨がある部位を示す。
 ****m, P, M, の mは乳歯, Pは前臼歯, Mは後臼歯, Xは歯槽の骨はあるが歯がないものを示す。数字は各歯の歯式を示す。

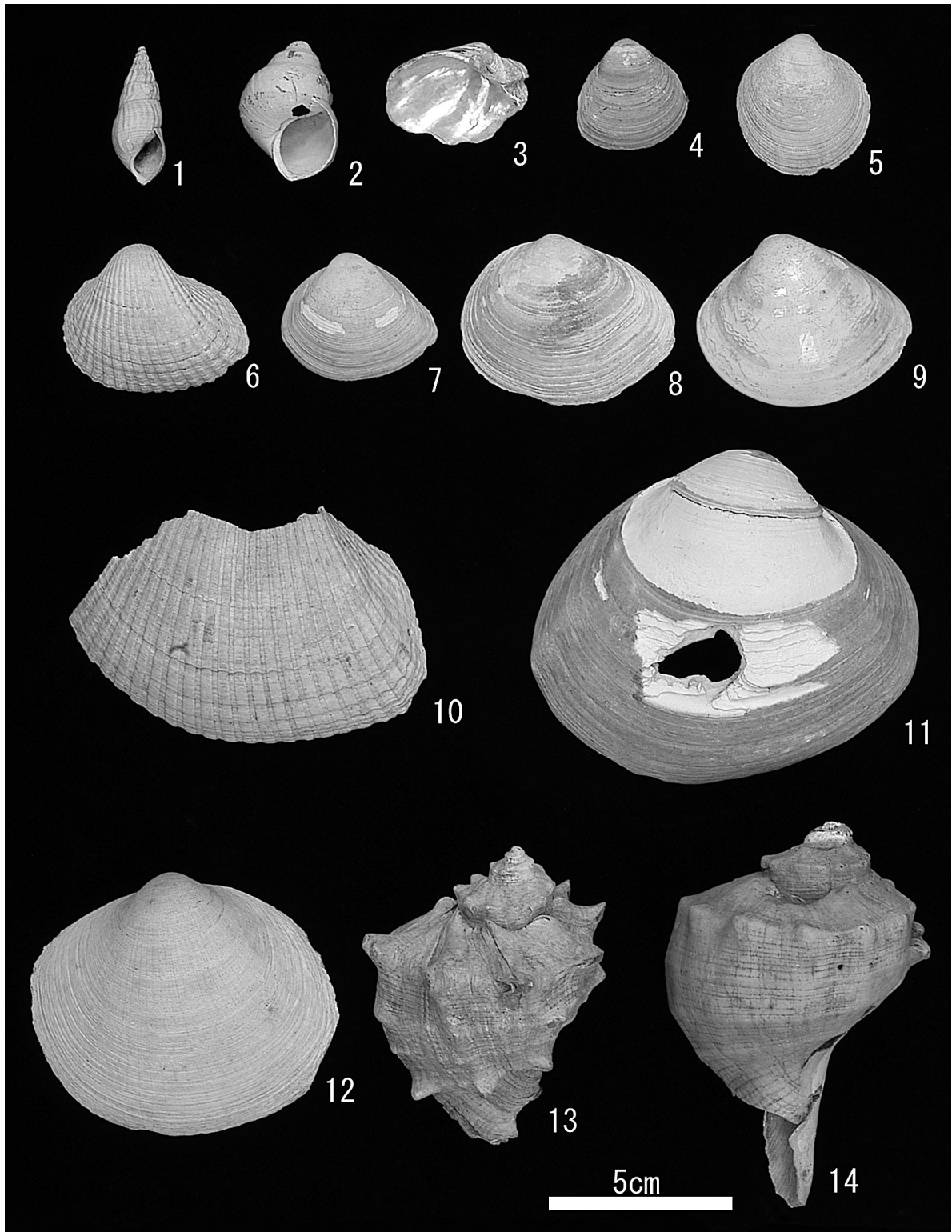


図1 貝類

- 1: ヒタチチリメンカワニナ 2: オオタニシ 3: イシガイ科の一種? 4: ヤマトシジミ
 5: オキシジミ 6: サルボウガイ 7: シオフキガイ? 8: サビシラトリガイ 9: ハマグリ
 10: アカガイ? 11: ウバガイ? 12: ベンケイガイ 13・14: アカニシ
 (L:3, 6, 7, 8, 9, 12 R:4, 5, 11)

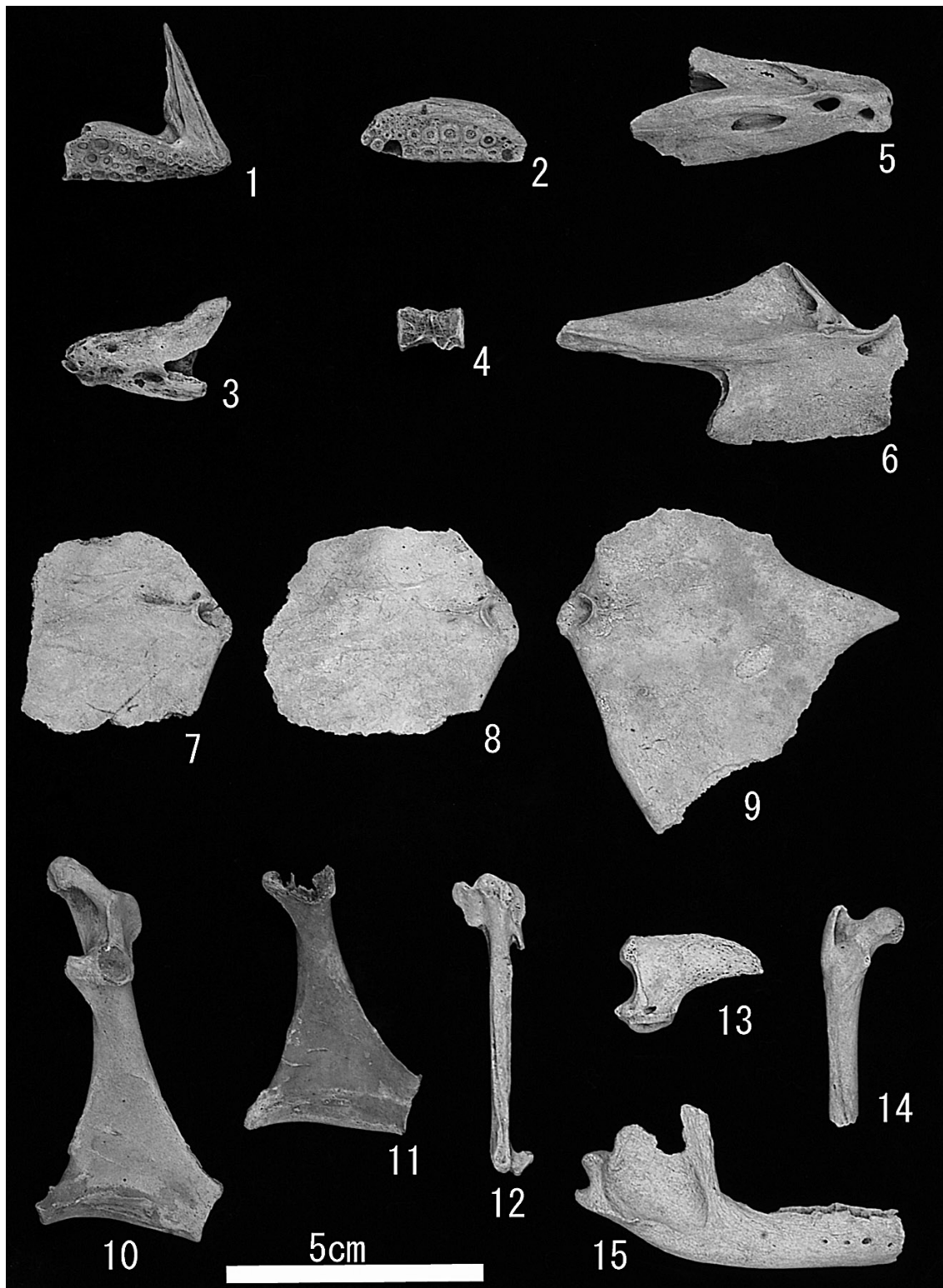


図2 魚類・鳥類・小型哺乳類

1・3: クロダイ 2: マダイ 4: ボラ 5～9: スズキ 10・11: ヒシクイ? 12: タカ類

13: ツキノワグマ 14: テン 15: アナグマ

(1: 前上顎骨, L 2: 前上顎骨, R 3: 歯骨, R 4: 椎骨, L 5: 歯骨, R 6: 関節骨, L

7・8: 主鰓蓋骨, L 9: 主鰓蓋骨, R 10・11: 鳥口骨, R 12: 中手骨, L 13: 末節骨

14: 大腿骨, 近位部, L 15: 下顎骨, L)



図3 イノシシ

1: 上顎骨, L 2: 下顎骨, L 3: 下顎骨, R 4: 下顎枝, L 5: 上腕骨, 遠位部, R 6: 橈骨, L
 7: 環椎 8: 軸椎 9: 尺骨, R 10: 踵骨, L 11: 肩甲骨, R 12: 脛骨, 近位部, R
 (4の矢印は骨が病気により融けた痕跡を指している)

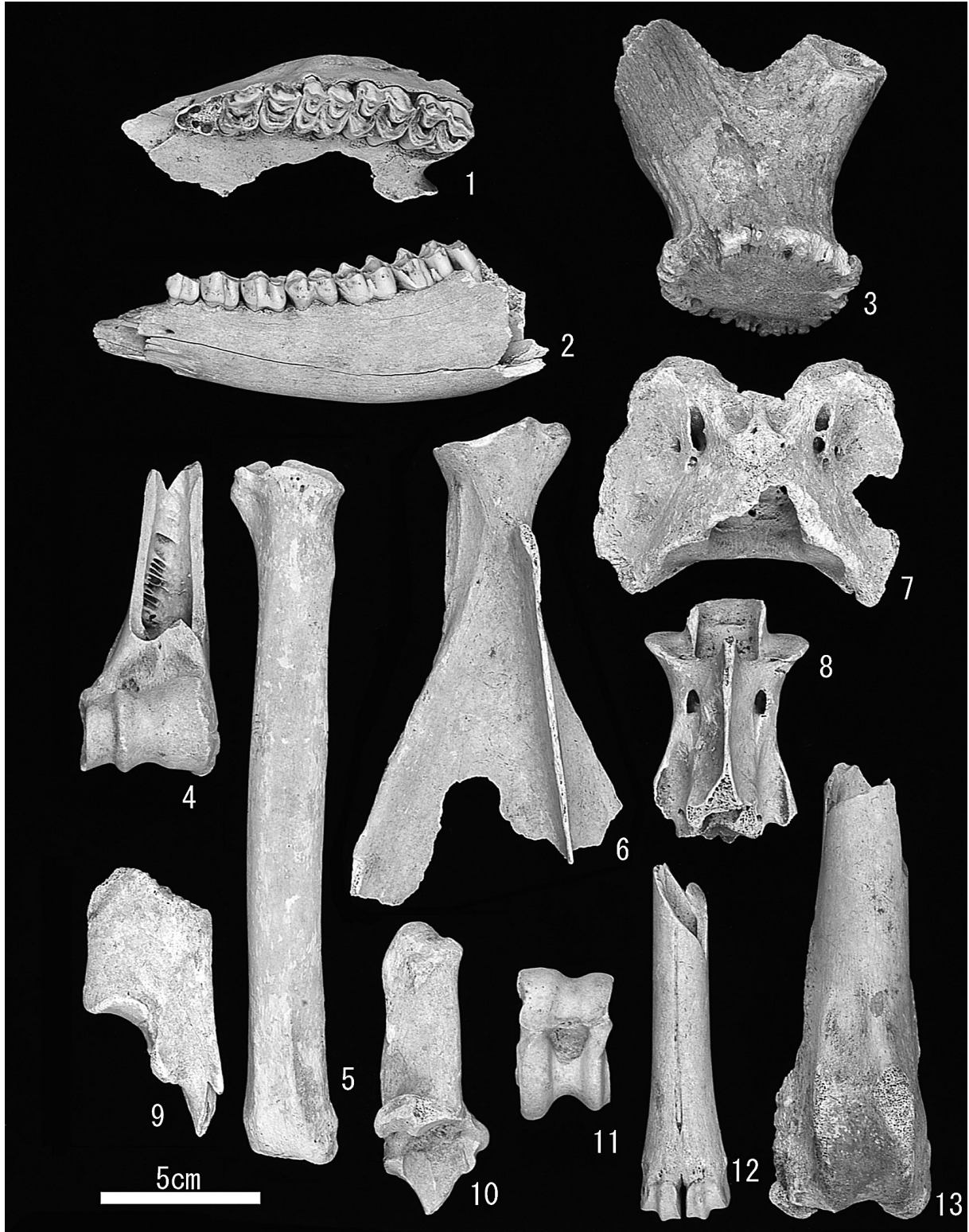


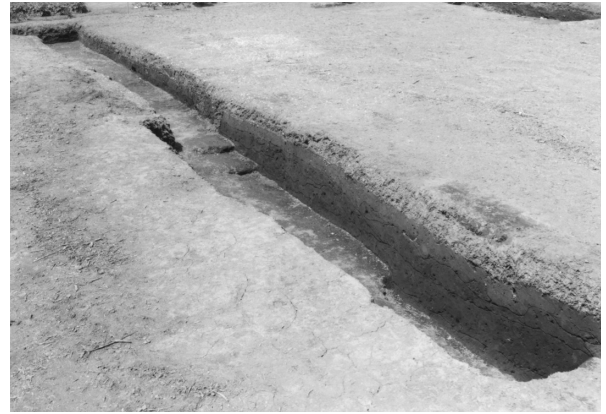
図4 シカ

- 1: 上顎骨,L 2: 下顎骨,L 3: 落角 4: 上腕骨,遠位部,R 5: 橈骨,R 6: 肩甲骨,L 7: 環椎
 8: 軸椎 9: 尺骨,L 10: 踵骨,L 11: 距骨,L 12: 中手骨,R 13: 大腿骨,遠位部,R

写 真 图 版



A区トレンチ全景



A区第1号トレンチ全景



A区第2号トレンチ全景



A区第3号トレンチ全景



B区遺構確認状況



B区第1号トレンチ土層断面



B区第5号トレンチ（貝層）土層断面



B区第6号トレンチ土層断面



第 1 号住居跡
完 掘 状 況



第 2A・2B 号住居跡
完 掘 状 況



第 2 A 号住居跡
遺 物 出 土 状 況

第 18 号 土 坑
完 掘 状 况

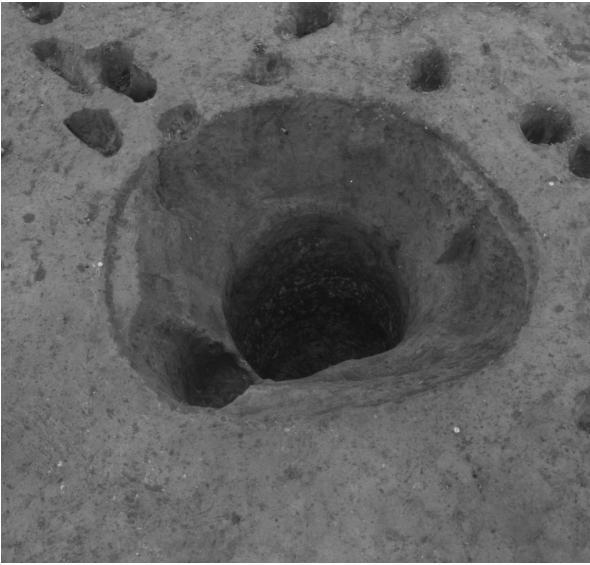


第 50 号 土 坑
遺 物 出 土 状 况



第 53 号 土 坑
土 層 断 面





第54号土坑完掘状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第54号土坑遺物出土状况



第62号土坑完掘状况



第62号土坑遺物出土状况



第68号土坑完掘状况



第68号土坑遺物出土状况



第68号土坑獸骨出土状况



第69号土坑遺物出土状况

PL 6



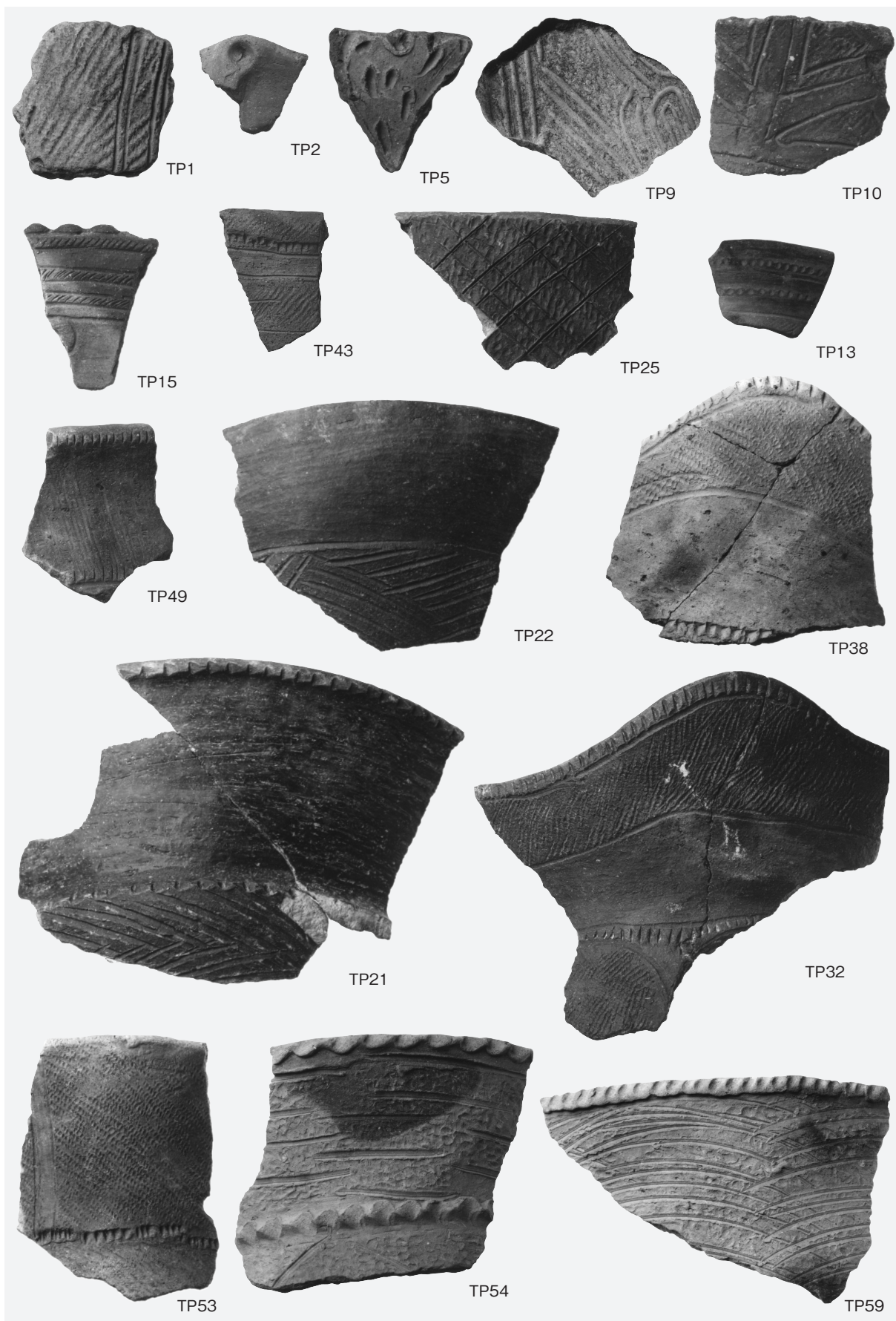
第 97 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



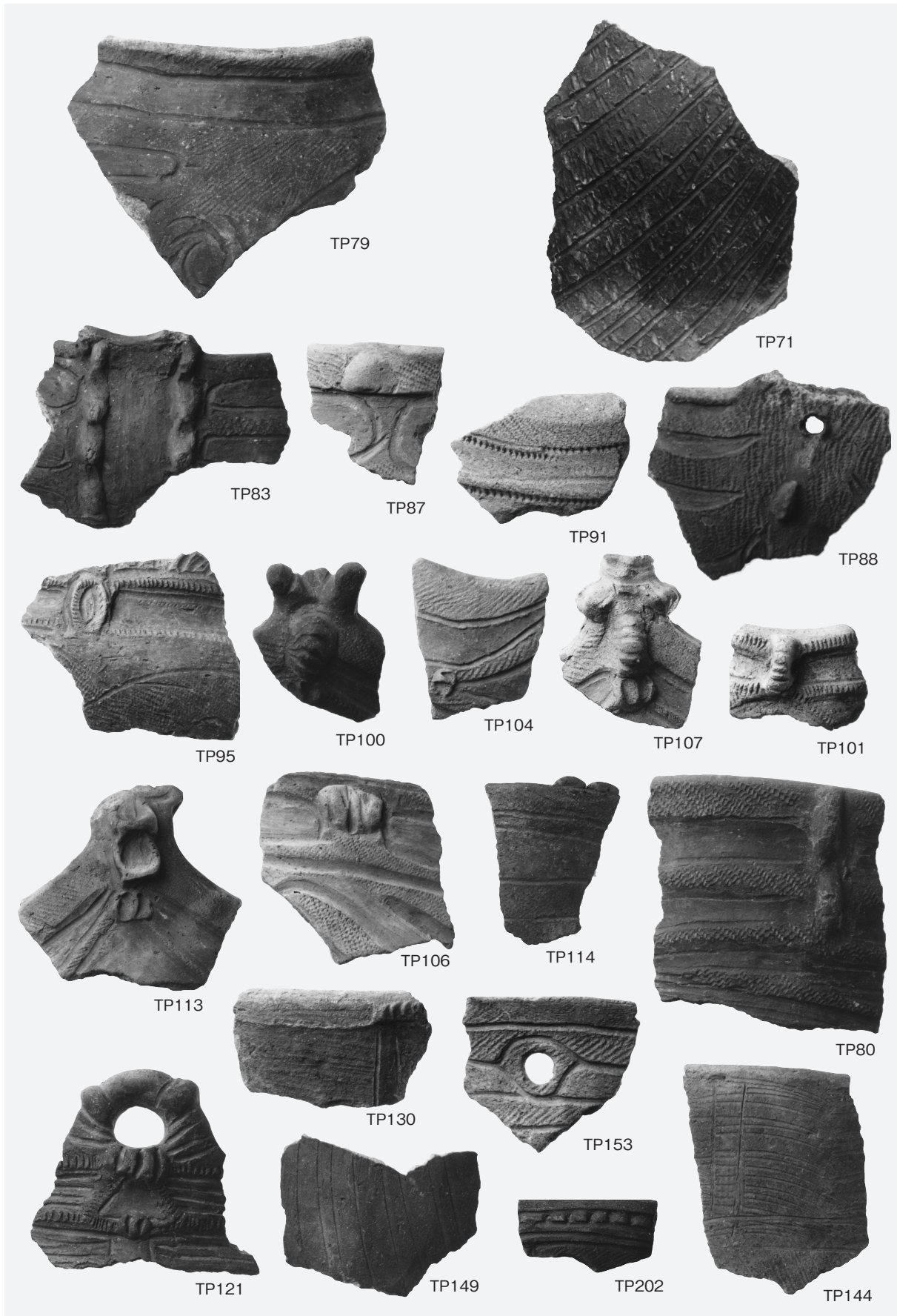
第 1 号 ピ ッ ト 群
完 掘 状 況



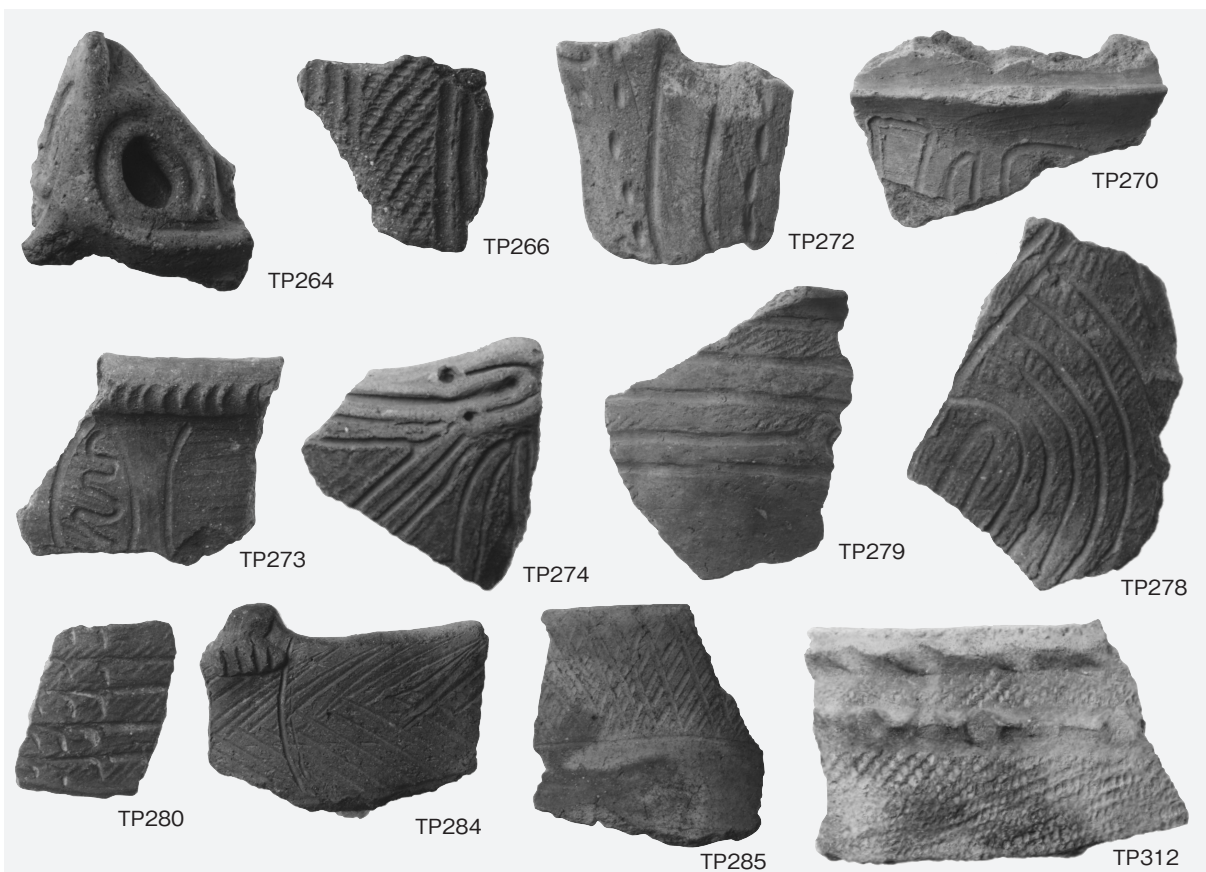
C 区 全 景
完 掘 状 況



A区トレンチ出土遺物



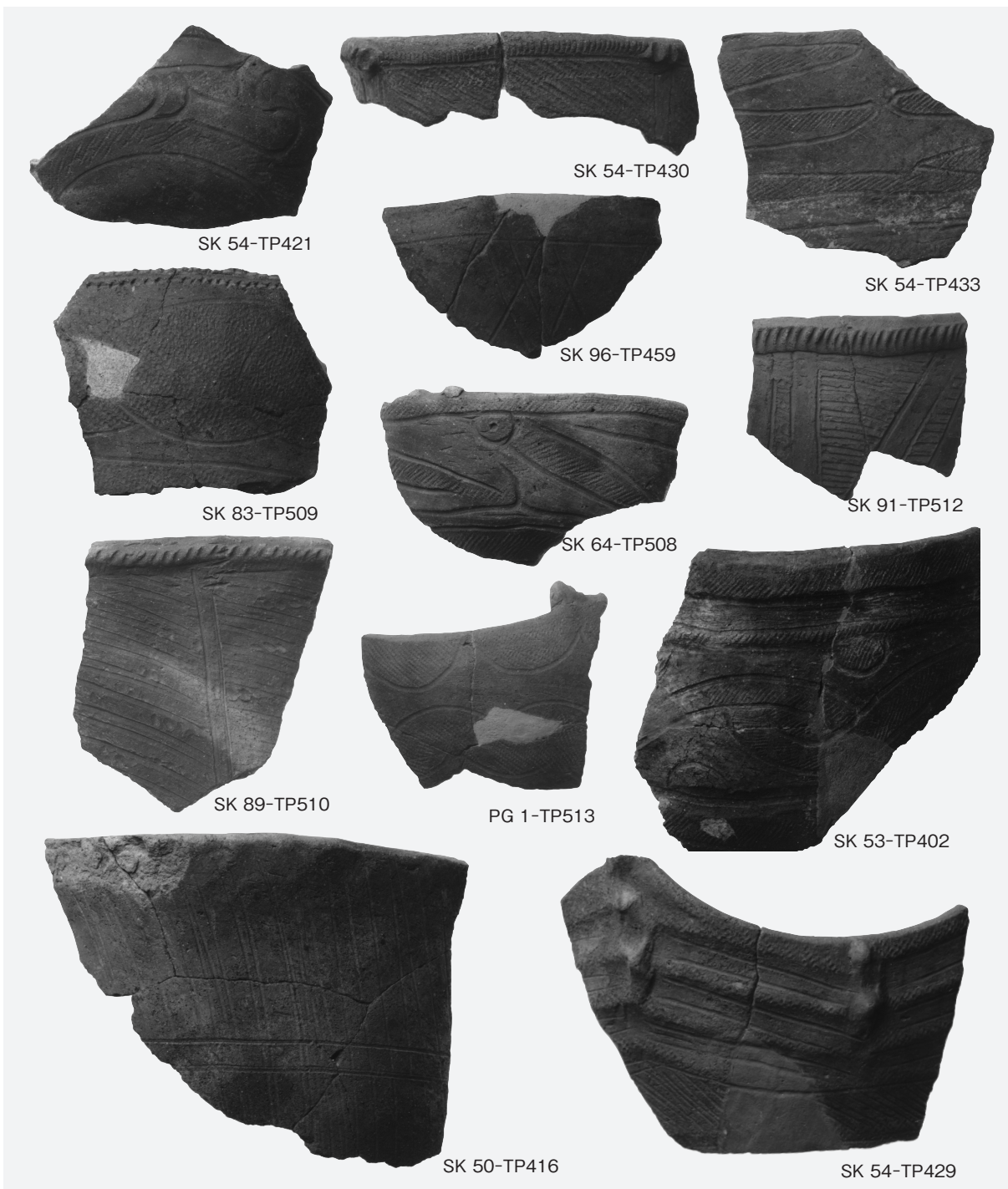
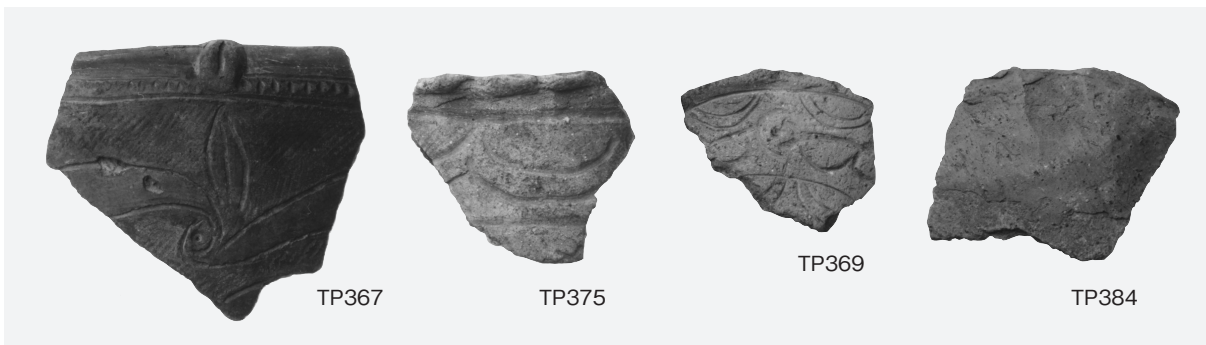
A区トレンチ出土遺物



A・B区トレンチ出土遺物



B区トレンチ出土遺物



B区トレンチ, 第50・53・54・64・83・89・91・96号土坑, 第1号ピット群出土遺物



SI 2B-25



SK 54-36



SK 18-28



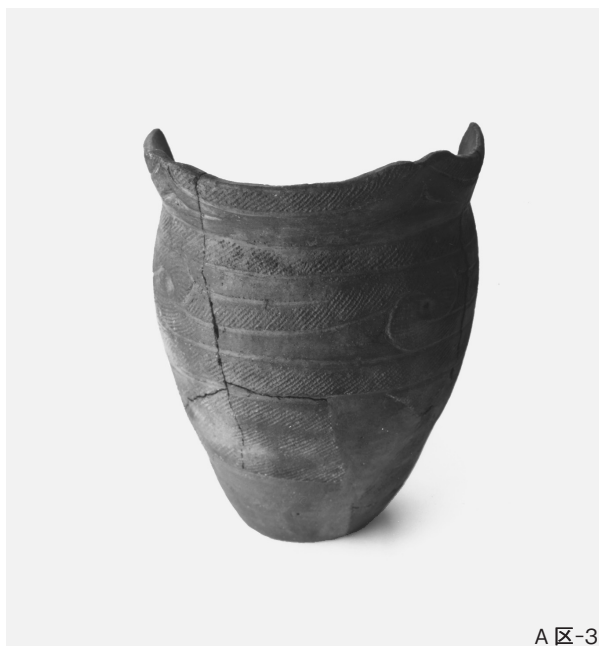
SI 2A 土器埋設ピット-52



SK 54-40

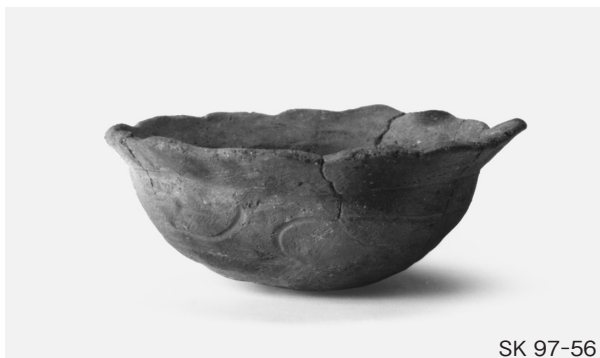


SI 2A 土器埋設ピット-53



A区-3

A区トレンチ，第2A・2B号住居跡，第18・54号土坑出土遺物

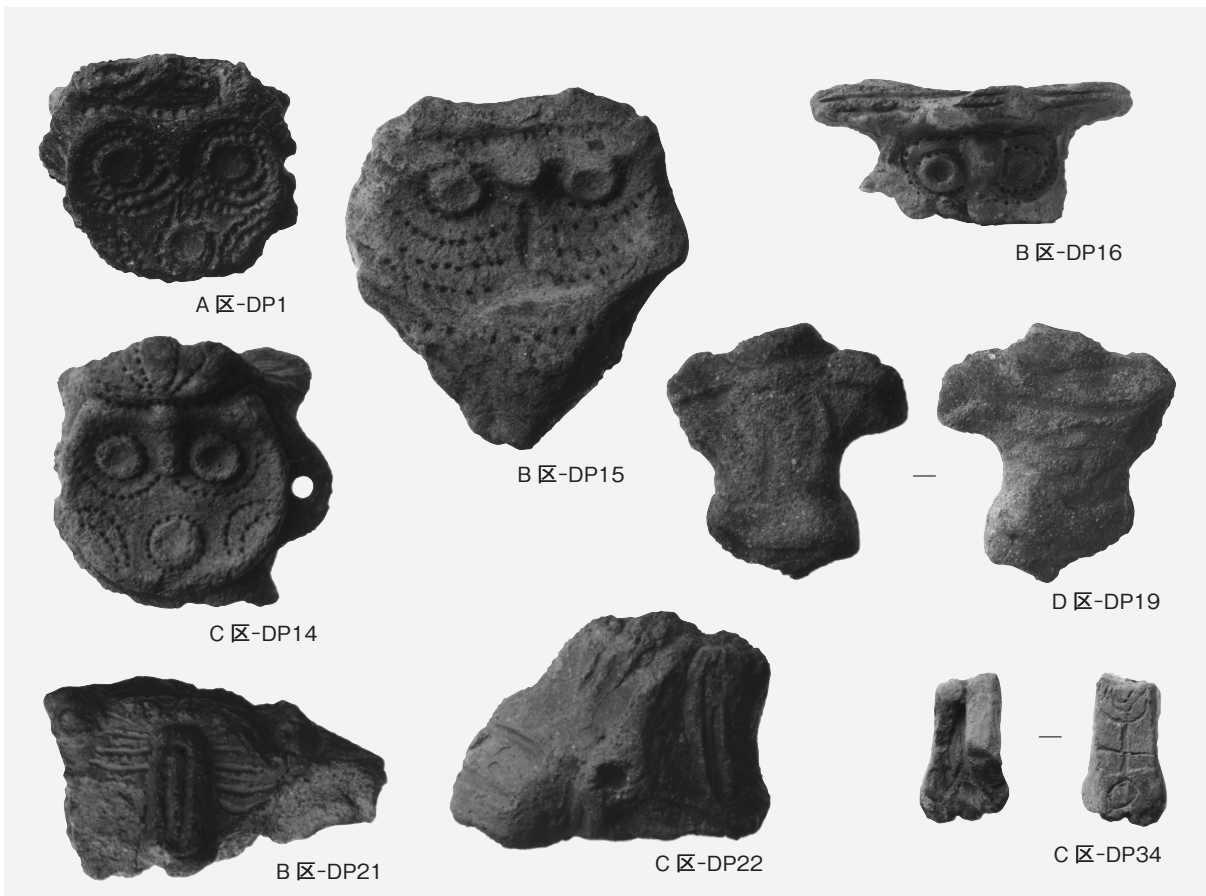


A・B区トレンチ，第54・62・69・97号土坑，C区遺構外出土遺物

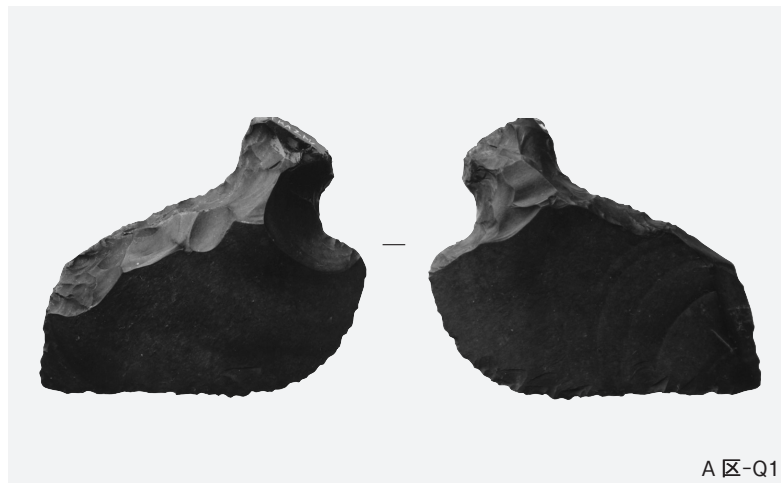
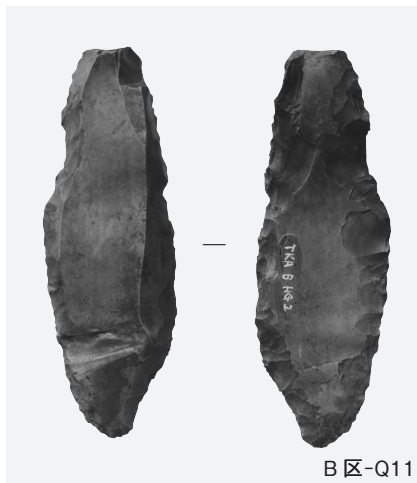
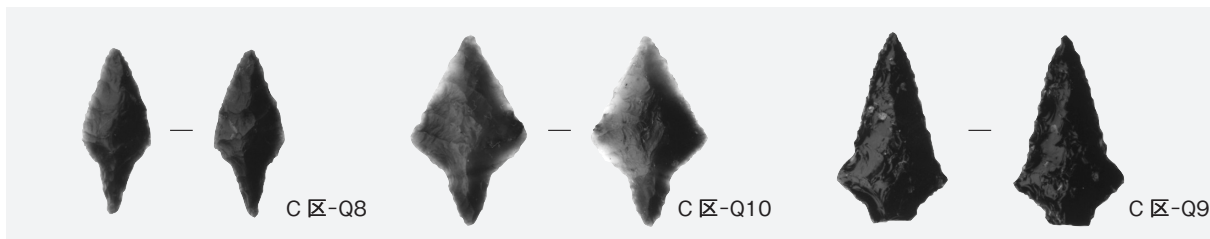
PL14



A・B区トレンチ，第54・69号土坑出土遺物



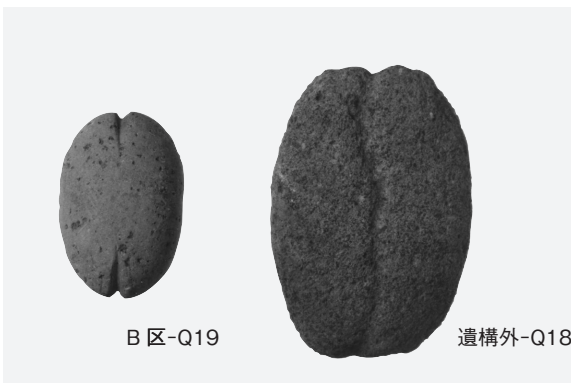
PL16



特殊遺物



C区-Q12



B区-Q19

遺構外-Q18



SK 68-Q4

SD 2-Q7



遺構外-Q23

B区-Q25



遺構外-Q27

遺構外-Q28

C区-Q29



SI 2A-Q3



B区-B1



遺構外-S1



遺構外-S2

特殊遺物

抄 録

ふりがな	かみさかいあさひだいかいづか							
書名	上境旭台貝塚							
副書名	中根・金田台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	XIII							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第325集							
編著者名	柴山正広 須賀川正一 小野政美 小川貴行 越川欣和							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行年月日	2009(平成21)年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
かみさかいあさひだいかいづか 上境旭台貝塚	いばらきけん 茨城県つくば市大字 おおあざ 栄439番地の1ほか	08220 093	36度 6分 26秒	140度 7分 35秒	24 ~ 27m	20070402 ~ 20080131	7,800㎡ 内調査終了面積 2,878㎡ (A区1,777㎡+ C区1,101㎡)	中根・金田台特定土地区画整理事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上境旭台貝塚	貝塚	縄文	貝層	2か所	縄文土器、土製品(土偶・土版・耳飾り・土製円盤・海獣形土製品)、石器(石鏃・敲石・磨石・凹石・磨製石斧・打製石斧・石錘・石匙)、動物遺存体(獣骨・鳥骨・魚骨・貝)		動物遺存体は、イノシシ・シカが多く、人為的に割られたスパイラル剥片である。土製品では、土偶のほか、海獣形土製品が出土している。	
	集落跡	縄文	竪穴住居跡	3軒	縄文土器、土製品(土偶・耳飾り・土製円盤・土器片錘)、石器(敲石・磨石・凹石・石錘)、動物遺存体(獣骨・鳥骨・魚骨・貝)			
	時期不明	井戸跡	1基	溝跡	3条	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、土製品(泥面子)、石器(砥石)、鉄製品(鏃・刀子)		
要約	A区のトレンチ調査では、貝層の広がり、遺物包含層、竪穴住居跡2軒が確認された。貝層は80cm程度堆積しており、縄文土器片(後・晩期主体)・土偶・土版・石棒・獣骨・鳥骨・魚骨・貝などが出土している。B区の調査では、トレンチ調査によって包含層・貝層が確認されているが、破碎した貝が多く、再堆積層と考えられる。C区の調査では、縄文時代の竪穴住居跡・土坑・陥し穴が確認された。貝塚に伴う集落跡と考えられる。当貝塚からは、前期から晩期までの縄文土器が検出されたが、主体は加曽利B式から安行3b式土器である。							

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

上 境 旭 台 貝 塚

中根・金田台特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XIII

平成21(2009)年3月18日 印刷
平成21(2009)年3月23日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第325集

上境旭台貝塚遺構全体図



付図 上境旭台貝塚遺構全体図 「茨城県教育財団文化財調査報告第325集」

